

少年

園叟

少年

平成三十年三月二日発行

三月号

一〇〇〇円

少年

平成三十年 三月号 (通卷一二六号)

パートV・六号

少年

パートV・六号・隔月発行

平成三十年三月二日発行 (通卷一二六号)

俳句雑誌

三月号 (通卷一二六号)

少年

園叟



有季定型のときめき
自然随順のやすらぎ
切磋琢磨のよろこび

俳話断章・句を寝かせる 稲田眸子

戦後のホトトギスは用紙割当制限で部数は三万を越えるといわれていたが、頁数は貧寒たるものだった。その末尾の方に裏表紙にかけて『句日記』が載っていた。「そこに掲載されたのは、その年の句でなく、前年だか数年前だかの句を順次に発表していた」と言う。そんな話を先輩から聞いたことがある。発行号に合わせた季節の俳句を掲載するのが当然だと思っていたが、虚子は、発表するにあたって、一年間、あるいは数年間寝かせていたのである。そのねらいは、自分の句を客観的にみるための一年間、あるいは数年間であつたのであるまいか。あるいは、自分の句を客観的にみるための一年間、あるいは数年間であつたのであるまいか。寡作の筆者は、句を寝かせておくようなことになかなかできないが、虚子のその姿勢に感じ入つたものである。句を寝かせておくようなこと作句の直後だと気持ちも高ぶつており、自分の句、特に自信作の客観的な評価は難しい。その結果、「できた！」と思つた句が誰にも選ばれず落胆し、帰路についた経験は数多くある。虚子の実践した「句を寝かせる」という方法は、己の句を客観的に判断する方策の一つとして有効と考へる。ぜひお試しあれ。

俳話断章	稲田眸子	裏表紙
稲田眸子の俳句紀行	稲田眸子	1
特集 干支からみた平成三十年	坂井溢郎	2
特集 第二十四回 小中学生俳句コンクール報告	稲田眸子	5
巻頭作家招待席	小野京子	14
秀句ギャラリー鑑賞	中田麻沙子	15
少年の俳人達	稲田眸子選	23
特選五十五句(阿部鳴尾・山口 修・倉田洋子)	稲田眸子選	25
彩時記燦々	稲田眸子選	30
少年の抄		56
絆の抄		164
虚子嫌いが読む虚子の歳時記	後藤 章	166
我が青春の銀幕たち	溝口 直	172
続・京子の愛唱一〇〇句「癒し」	小野京子	175
代士子の万華鏡	篠崎代士子	178
吉永さんのお天気雑学	吉永泰祐	182

自叙伝「私は軍国少女」	中嶋美知子	185
くにをの絵手紙紀行	梅島くにを	195
輝二の徒然読書ノート	荒木輝二	197
四季有情（港湾空港タイムス）	稲田眸子	200
月花風声（大分県医師会会報）	稲田眸子	204
便りの小箱	稲田眸子	208
編集ノート			

表紙題字／泉 激
挿 絵／福井美香

稲田眸子の俳句紀行

寒極まりし

冬の山その謐けさを畏れけり
冬風や命を絶ちし一文士
三日はや辞書積み上げて励みをり
墨汁の飛び散つて寒極まりし
寒月や不安次々の中す
小人らのひそんでいさう犬ふぐり
天空へ伸びる階段春の夢

青春と老い

一月の「あらくさ句会」で次の句に出会った。

青春がふと滲み出る賀状かな

作者は、石田三省様。本名は「石田省三」。温厚で、統率力のあるお人柄は皆に慕われており、眸子もまた敬愛するお一人である。選評の役を仰せつかっている眸子は、次のよう選評を添えさせて頂いた。「青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ」サミュエル・ウルマンの「青春」という詩の冒頭の文章である。／この言葉は、マッカーサー元帥が座右の銘とし、松下幸之助氏が愛した。ロバート・ケネディーが、エドワード・ケネディーへの弔辞にこの詩の一節を引用したとも聞いた。「青春の詩」は、「優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる」と続く。／賀状を手に取り、共に青春を謳歌した頃のことを懐古する作者。「滲み出る」に歳月の重さを思う。「年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる」の言葉を噛みしめているに違いない。

青春と老いについて、考えさせられた一句である。

干支からみた平成三十年

戊戌の年について

坂井溢郎

(一) 戊(ぼ・ぼう・つちのえ)について

「戊」は十干の五番目、方位は中宮(五行で中央の位)、季は土用、「万物茂盛」の状態を言い、草木の繁茂して盛大になった状態を意味している。樹木が繁茂すると風通しや日当たりが悪くなり、虫がついたり、うら枯れや根上りしたりして本体の樹が痛む。悪くすると枯れる。そこで思い切った勢定をしなければならぬと言うのが戊の年の意味である。

前年で、世の中が活動化して新旧勢力の衝

突、交代の兆しや隠蔽された事件が表面化したりしたことなどを受けて戊の年は、その問題処理決断等を行う年である。

(二) 戊(じゅつ、しゅつ、いぬ)について

「戊」は、十二支の十一番目、方位は西北西、月は九月、季は秋(九月寒露より十月立冬の前日迄)、時は午後七時より九時までを指す。

「戊」は、戊(じゅ、しゅ、まもる)ではなく、一印に戊(ぼこ)の合意文字である。もと刃物で作物を刈ってひとまとめに締めくくり収穫することを意味している。転じて、まとめる、脱落する、盡滅の意がある。

また、一般に戊は茂と同じで中の一は陽気を意味し、草木の茂る中に陽気を蔵するの意味がある。即ち、枝葉末節が茂って日当たりが悪くなり、風が通らなくなることを言い、転じて末梢的煩瑣とか過剰の意をあらわす。

そこで、戊の年は思い切った、一切のあらゆる停滞を一掃するよう贅肉を切り取って簡

易化する必要がある年である。

(三) 平成三十年、皇紀二六七八年、
西暦二〇一八年、昭和九十三年、戊戌
(つちのえ・いぬ、ぼじゅつ)の年
について

総じて、本年は戊戌の同意二語が重なることから善悪の事象がいずれとも重深になるので、問題を特に慎重に取扱うことが肝要である。前年からの革新や激変の形勢がいよいよ具体化し、混乱の中で結着に近づく年である。よって、前年に判然と整理できなかつた(しなかつた)旧い勢力や問題は放置しておく(しなかつた)旧い勢力や問題は放置しておく)と益々繁茂し紛糾の度を加え、それが原因で衰亡することにもなりかねない。そこで本年は何としても支出の無駄をなくし、合理化、整理を勇氣をもって断行しなければならぬ年である。

加えて来年は、己(き・つちのと)亥(が
い・い)の年で、規律を正し、整理・統合を
すすめるような合併再編を加速する年となり、

筋の正しい新たな政治、経済、制度、新たな開発方式の採用等に注力して、これらを軌道に乗せなければならぬ年となるので、その覚悟をもって今から努力する必要がある。

(四) 既往の戊戌の年について

- ①六十年前の戊戌の年・昭和三十三年(一九五八年)
- ・第二十八回衆議院議員選挙
- ・売春防止法施行
- ・皇太子、正田美智子と婚約
- ・一万円札発行
- ・第四次日中貿易協定調印
- ・東京タワー完成(各テレビ放送開始)
- ・岩戸景気のはじめ
- ②二十年前の戊戌の年・明治三十一年(一八九八年)
- ・第五回総選挙
- ・自由党と進歩党が合同し、憲政党を結成
- ・第六回総選挙
- ③百八十年前の戊戌の年・天保九年(一八三

八年)

・江戸城西の丸再建

(五) 成年の人の一般的な性格について

正義感が強く、正直、忠実聡明で直感力がある。人づきあいがよく、弱者を無視できない優しさがある。愛情に敏感で表現力も直線的な性格を持っている。

生のままの思考や感情を撓めるようにして陽気な柔軟な思考の行動がとれるように心がけること。

(六) 成年生まれの著名人

徳川綱吉(犬公方)、石原裕次郎、チャール

坂井溢郎(さかい・いっお) *

全日本漁港建設協会 名誉会長・工学博士



全日本漁港建設協会の仕事始め式でご挨拶中の坂井溢郎様

第二十四回 小中学生俳句コンクール報告

稲田眸子

(埼玉県俳句連盟副理事長)

埼玉県芸術文化祭二〇一七協賛事業として、第二十四回小中学生俳句コンクールが開催されました。埼玉県俳句連盟、朝日新聞さいたま総局が主催し、埼玉県、埼玉県議会、埼玉県教育委員会、さいたま文学館の後援です。募集期間は平成二十九年七月一日～九月二十日、審査期間は十月一日～十二月十五日。選者は、落合水尾・星野光二・山崎十生・鈴木貴水・栗原憲司・小川紫翠・稲田眸子・江原正子・おおば水杜・折原野歩留・川島一紀・小山愛子・斎藤 勲・佐怒賀直美・洲浜ゆき・染谷多賀子・山口素基の十七氏。県内八十四校から、一万一〇〇七人、一万

八六八五句の応募がありました。部門別では、低学年の部が二七七三人、高学年の部が四五七一人、中学生の部が三六六三人でした。入選句は四九一句、入賞句は四十五句。応募句の〇・二四%という高いレベルを勝ち抜いた四十五句でした。以下にその作品を紹介します。

《小学校低学年の部》

☆埼玉県知事賞

雨あがりにじにちかづくかんらん車

須之内花梨

(加須市立三俣小学校2年生)

【評】雨あがりの後、雫を乗せ、

夢を乗せ、ゆっくり回る

大かんらん車。空には大

きな虹。希望を乗せて回

る大かんらん車。

(稲田眸子)

☆埼玉県議会議長賞

ひまわりもかあさんみたいにわらってる

高麗 光

(新座市立石神小学校1年生)



埼玉県俳句連盟会長の挨拶



入賞した生徒と父兄

☆埼玉県教育委員会教育長賞

ジャムつけてちぎってたべたいなのくも

網谷思音

(さいたま市立浦和別所小学校1年生)

☆埼玉県芸術文化祭実行委員長賞

学校が恋しくなった夏休み

半澤祐真

(加須市立大桑小学校3年生)

☆埼玉県芸術文化祭奨励賞

くものすにしづくが光ってかんらん車

町田涼祐

(鴻巣市立鴻巣東小学校2年生)

いねをかるジージのせなかとおおきいね

大場海璃

(久喜市立栗橋西小学校2年生)

ところてんするりとのどをかけてゆく

樋口ひなた

(毛呂山町立毛呂山小学校3年生)

☆朝日新聞さいたま総局長賞

しゃぼんだまやさしくふくとおおきいな

秋山咲良

(加須市立高柳小学校1年生)

むしのこえなんどもきくとうたになる

佐々木 梓

(久喜市立久喜北小学校2年生)

つばめの子大人になったらまたおいで

吉田 縁

(鴻巣市立赤見台第二小学校3年生)

☆埼玉県俳句連盟会長賞

きもだめし自分のかげににげるボク

堤 柚桜

(加須市立加須小学校3年生)

ひやけしてみぎぬいでもまだみぎ

木村心咲

(加須市立加須南小学校2年生)

なぞのひもそのしょうたいはくりの花

坂井愛栞

(三郷市立高州東小学校2年生)

しゃぼん玉光がまわり風にのる

吉田 凜

(加須市立高柳小学校3年生)

うわばきがちいさくなつたなつやすみ

高野 綯

(さいたま市立中尾小学校1年生)

《小学校高学年の部》

☆埼玉県知事賞

せみのうかてんしのようなしろいはね

新井 煌

(行田市立西小学校4年生)

【評】ぶるぶると体を震わせな

がら生まれてくる蝉。真

っ白な天使のような羽が

両側に丸まり、羽化する

姿は不思議そのもの。

持ち主だね。

(稲田眸子)

☆埼玉県議会議長賞

風鈴が僧侶のような音立てる

小田陽介

(吉川市立栄小学校5年生)

☆埼玉県教育委員会教育長賞

打ち上がる花火は空の万華鏡

弓削田未來

(さいたま市立中尾小学校5年生)

☆埼玉県芸術文化祭実行委員長賞

プールからでてきた耳が尖ってる

加藤孔太

☆埼玉県芸術文化祭奨励賞

七日目のせみの気持ちを知りたいな

鈴木心菜

(久喜市立久喜東小学校6年生)

ぼくだってへちまにまけずせがのびた

高野真熙

(さいたま市立中尾小学校4年生)

うち上げた花火がちって星になる

水谷一斗

(宮代町立笠原小学校4年生)

☆朝日新聞さいたま総局長賞

海開きなみがザブーンとさけんでる

青木志音

(入間市立藤沢北小学校5年生)

暑い日にせのびしている温度計

清水 環

(三郷市立丹後小学校6年生)

夏空にすいこまれていくホームラン

菊野翔太

(毛呂山町立泉野小学校4年生)

☆埼玉県俳句連盟会長賞



小田陽介君*の表彰（埼玉県議会議長賞）
*三郷市ジュニア俳句スクールの受講生



小学年高学年の部の記念撮影

一行日記夏の美ら海あふれだす

中内最英

(さいたま市立浦和別所小学校5年生)
太陽がぼくのアイスを狙ってる

高橋 匡

(加須市立志多見小学校6年生)
富士山のとっぺんめがけ冬来たる

小田陽介

(吉川市立栄小学校5年生)
タンポポは毎年みんなで風の旅

勝倉美優香

(さいたま市立中尾小学校5年生)
自転車を横切る風に赤とんぼ

辻 涼太

(さいたま市立中尾小学校5年生)

《中学生の部》

☆埼玉県知事賞

一冊のノートが文字でうまる夏

結城実怜

(深谷市立南中学校1年生)

【評】 人生で初めて膨大な時間

を使って勉強する絶好の
時間が受験を目指す夏休
み。その気迫を一冊のノ
ートと文字で表現。

(稲田眸子)

☆埼玉県議会議長賞

砂浜に書いた言葉が消えて秋

荒木俐穂

(小川町立樺台中学校1年生)

☆埼玉県教育委員会教育長賞

あの日にも原爆ドーム蝉しぐれ

岡部 樹

(北本市立東中学校1年生)

☆埼玉県芸術文化祭実行委員長賞

桜咲く高校広く門を開け

篠崎奨磨

(加須市立昭和中学校2年生)

☆埼玉県芸術文化祭奨励賞

光速で過ぎ去ってゆく夏休み

佐々木夕維

(さいたま市立東浦和中学校2年生)

深谷駅寒さに負けない赤レンガ

小河賢斗

(深谷市立上柴中学校1年生)
新緑と千本鳥居の異空間

酒井七菜

(深谷市立深谷中学校3年生)
☆朝日新聞さいたま総局長賞
かき氷言えぬ思いが溶けてゆく

齋藤紫音

(加須市立昭和中学校3年生)
青空が夕やけ空にさえてゆく

鶴谷真輝

(深谷市立南中学校1年生)
初めての捻挫の痛み西日差す

鈴木楓花

(小川町立礪台中学校1年生)
☆埼玉県俳句連盟会長賞
さくらんぼとおくの海をながめてる

石原裕大

(川越市立福原中学校1年生)
夏の空コバルトブルー無限大

古澤実怜

(加須市立昭和中学校1年生)

紅葉見て大人になったと感じてる

竹内友梨

(深谷市立南中学校1年生)
甲子園涙とともに落ちる汗 吉岡諒斗
(深谷市立南中学校2年生)

広い海私の大きな水族館

本間希海

(北本市立東中学校2年生)
高い指導力を発揮し素晴らしい成績を修められた十五校には学校賞を贈呈。

小学生低学年の部は、加須市立大桑小学校、さいたま市立中尾小学校、加須市立加須小学校、久喜市立久喜東小学校、鴻巣市立鴻巣東小学校の五校。

高学年の部は、新座市立東北小学校、加須市立高柳小学校、三郷市立丹後小学校、さいたま市立中尾小学校、加須市立志多見小学校の五校。

中学生の部は、北本市立東中学校、所沢市立南陵中学校、加須市立昭和中学校、深谷市立南中学校、深谷市立上柴中学校の五校でした。

一月十四日、さいたま文学館で開催された表彰式には二百名が出席。立見の席が出るほどの盛況でした。

表彰式は、栗原憲司副会長の開会のことばの後、鈴木貴水埼玉俳句連盟会長が主催者を代表して、挨拶をしました。

「埼玉県各地の小・中学生から二万句に近い応募をいただいたことを嬉しく、その熱意に敬意を表します。しかも、その作品のレベルの高さに驚きました。選者の先生方と真剣に検討し選句いたしました。俳人松尾芭蕉は、『俳句は三尺の童にさせよ』という言葉を残しています。即ちこれは、俳句を作るに当たっては、むずかしく考えたり、小細工などせず、小学生のような素直な心で句作せよという教えです。今回の作品にはこの芭蕉の教えにかなった句が沢山ありました。皆さんが大人になられても今日の佳き日を忘れることなく俳句を楽しんでください」

続いて、時枝秀樹朝日新聞さいたま総局長の挨拶、さいたま文学館の衛藤一憲埼玉県教育局副参事が来賓挨拶を行いました。

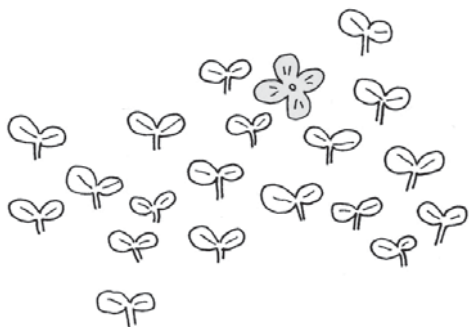
いよいよ表彰。審査員の中田さよ子・稲田眸子・染谷多賀子の三氏の作品講評に続き、小学生低学年の部、小学生高学年の部、中学生の部の順に一人ひとり壇上にあがり、表彰を受けました。表彰状授与のあとの記念撮影では、入賞した生徒たちの顔が凛々しく一段と輝いていました。

表彰式授与の後、県知事賞、学校賞の受賞者から受賞のスピーチがありました。小学低学年の部で埼玉県知事賞を受賞した、須之内花梨さんの受賞のことばをご紹介します。

「けんちじしようにえらんでいただき、ありがとうございます。このはいくは、夏休みにかぞくでゆうえんちに行つたときのことです。雨がふつていきましたが、かんらん車にのつていたら、雨がやんでにじが見えました。とてもうれしかったです。そのにじに、かんらん車がゆつくりとちかづいていようすです。これからはいくをたくさんつくりたいです」

どのスピーチにも喜びが溢れていました。
ご父兄はもちろんのこと、全員が万雷の拍手を送りました。

最後に、山口素基担当副理事長が謝辞と次年度の再開を約して閉会となりました。



巻頭作家招待席 小野京子

冬うらら 人生の午後歩みゆく

小野京子

自分の生きた足跡を振り返りたくなる年齢を迎えた自分に、とまどいを感じながらも、窓外を流れる雲を追いながら、自分の来し方を振り返っている自分がいます。

思いっきり伸びのびと自分を表出できた中高生時代、あつという間の大学生活。四十年近い教員生活。眸子主宰に出会い、共に歩んできた二十年近い歳月。そのどれもが貴重で、様々な出会いと学びをもたらしてくれました。そして今また、新たな願いを胸に歩み始めようとする自分がいます。人生の日暮れ、人生の午後を、ゆっくりと自分の歩幅で歩き続ける自分でありたい。歩き続けなければ、その思いがこの一句を生みました。



「誌友へのメッセージ」

「自然を詠い、我れを詠う。自然と我れとの一体感を詠う。私たちはそのことを大切にした」。創刊にあたっての主宰のお言葉を、今またかみしめています。句友の皆様と歩み続けることのできる幸せをかみしめている日々です。

「自選の三句」

青嵐いま故郷の土を踏む
まだ何か告げねばならぬチュールリップ
一掬ひして涼風を持ち帰る

「趣味等」

レース編み、パステル画、小さな旅

「現住所」

〒八七〇一〇八七三
大分市高尾台二丁目八番四号

TEL 097-544-3848

秀句ギヤラリー鑑賞

(パートV・五分分)

中田麻沙子

冬うらら人生の午後歩みゆく 小野京子

サロイヤンに「人生の午後のある日」と訳された作品がありました。掲句の「人生の午後」とはどのような光景の時間なのでしょう。昼下がりと黄昏とも、余生とも違った、奥行きのある伸びやかな時間が想像されます。

作者は「少年」大分句会等の纏め役。又「ジュニア俳句教室」を立ち上げ、育ててこられた方。眸子先生が深く信頼を寄せていらつしやる方です。創刊二十周年記念の浅草大会での総合司会。あの時の張りのあるお声が印象に残っています。

(天職として一生懸命に行ってきたことが漸く実を結んできた。これからは自分を労わって、少しゆつくりと歩んでみよう)。季語の「冬うらら」が温かく後押ししているようです。調べの整った品格のある句です。

小春日が欲し先生をお迎えす 平田節子

句を味わうにつれ、お迎えするその「先生」の存在が大きくなってきました。作者がどれ程その日を心待ちにしていたことか。日々変化する当日の天気予報に一喜一憂し、やきもきしてきたことか。無事にお迎えすることができ安堵しました。

この「先生」とは言うまでもなく眸子先生で、その日大分での俳句吟行会が催されたようです。エッセイで作者は眸子先生が未だ大学生の頃より句会で席を並べ競い合った大ベテランの方と知りました。眩きにも似た平明な言葉に、先生を信頼する気持ち、喜びが伝わってきます。「小春日を以て」でなく、「小春日が欲し」が句に命を吹き込んでいます。

小春日や馬の鼻づら温かし 高松くみ

馬に触れてみると思いのほか大きくて、体温が高く温かいのです。かつて成田に「三里塚御料牧場」があり、何度か実際にさわってみたことがあり感触を思い出しました。小春日の暖かさ、今触れている馬の温かさが一体となって、ほのぼのとした親愛の空気が流れます。

作者はチャレンジ精神旺盛な方と推察いたしました。好奇心と行動力は、いつまでも青春、元気の秘訣だそうです。

日向ぼこ話の尽きぬ椅子二つ 佐藤裕能

話の尽きぬ位長い時間座っている椅子はどこにあるのでしょうか。公園でしょうか、ご自宅のお庭でしょうか、はたまた病院ということも。

措辞の「椅子二つ」が二人の親密さを物語っています。

でも、話は趣味のことなど他愛のない話かもしれませんが。ポカポカと日向ぼこをしているのですから。作者はといえ、そんな二人を傍らで温か

く見守っているのです。

美術館と墓地ある暮し紅葉山 篠崎代士子

紅葉の美しい丘陵に立地する「美術館」。近くには樹木葬でしょうか、整然とした「墓地」があります。そしてその背景に美しい「紅葉山」。その憧れの舞台設定に魅了されました。

昨年の晩秋、伊豆旅行の帰りに夫と別行動で一人、伊東、熱海、湯河原と途中下車をしながら三つの美術館を梯子しました。どの美術館も丘の上にあり、丁度掲句と同じようなロケーションでした。夏以降何かと鬱々としていたのが一気に解消されました。美術館は心のビタミンです。

この句の「墓地」とは実在ではなく作者の心の拠、覚悟の意味かもしれません。無造作に見えてきちんと計算された理知的な句と思います。

頬染めし昭和の少女檀の実 利光幸子

秋、鈴なりになった薄紅色のマユミの実（蒴果）が熟すと四つに割れ、可愛らしい赤い種子が

現れます。その実から作者は純真ではにかみ屋の少女の頃の自身や友人を想ったのです。

「昭和の少女」に魅かれました。作者は日頃から散策の度に見かける様々な花木を観察し、移り変わりを楽しみ、句に詠まれたのだと思います。季語の「檀の実」がきちんと活かされています。

白玉や母喜ばす嘘いくつ 利光幸子

作者の昨年度の俳句大賞、選者入選された句です。母と娘の情愛のこもった佳句ですね。「白玉」が光っています。「そう、そう」と一人頷いています。

月面を歩く 感触 霜柱 村田文雄

昭和三十年代の頃、東京近郊では学校の裏庭、畑の片隅、工場裏の赤土などに霜柱が沢山現れよく遊んだものです。初めの頃はサクサク、シユクシユク。その後ザクザク、ジャリジャリ。踏んだ時の感触が蘇ります。

作者は遊んでいた時に、何か軽石のようなデコ

ボコとした表面から、ふと月面のクレーターを想像したのです。そして地下のガラスのような氷の柱を思い浮かべ、恐る恐る体重をかけないように歩きました。あのマイケルジャクソンの「ムーンウォーク」のように。

ファンタジーのような発想がすてきです。新たな村田ワールド誕生でしょうか。

踏んだとき小さな叫び霜柱 富岡行人

複雑な光を発する氷の結晶体の地下宮殿の柱は美しく壊れやすいのです。そこには童話に登場するような可愛いらしい小人たちが住んでいます。ある日スニーカーで無造作に踏まれようものなら、思わず小さく声を発してしまいます。

想像力豊かな富岡さんらしいメルヘンのような一句です。

まるで光のバーコード霜柱 勝浦敏幸

地下宮殿の霜柱の結晶を顕微鏡で見ると、キラキラと光る柱の列はバーコードをも連想させます。

そこに音楽が流れて、電子ピアノのエレクトリカルパレードの始まりです。「バーコード」の比喩が新鮮です。作者は理系の方なのでしょうか。

鼻赤き子らの 歓声霜柱 佐々木素風

昭和の子ども達は寒い冬でもよく外遊びをしました。学校から帰ると秘密基地のある窪地に集まって、霜柱や氷の張った池で遊びをみつけました。頬つぺたや鼻先を真っ赤にして、中には青っ凍の子もいて。今ではそんな子は見かけません。明日は何をして遊ぶうか、あれこれと思ひめぐらせているうちに眠りに落ちるのです。

ホスピスの友見舞ふ坂霜柱 富岡いつ子

緩和ケア病棟のホスピスに入院されている友人。ついお見舞いの足取りも重くなります。さらにその病棟は坂の上方にあり、足元は凍りついた霜柱が立って……。溜息が聞こえそうです。

それでも帰り道は、(来てよかった)と少し心が軽くなっています。私も何度も経験があります

が、その友人の顔は心配をよそに穏やかで明るいのです。

解体の我が家崩るる霜柱 溝口 直

霜柱にはまた陽に溶けると崩れる「翳」のイメージがあります。作者はエッセイに(悩みぬいた末に自分の守ってきた病院の廃院を決心。解体工事が始まった)とありました。身を切られるような決断。その解体の様子を冷静な目で句にされています。「崩るる我が家」と「霜柱」が響き合っ

て胸に迫ります。一月号の句に「今年より新しき道つながりぬ」を発見し、安堵しました。創刊二十周年記念の懇親会でのあの軽快なピアノ、またお聞きしたいものです。

防災に汲み置く桶に初氷 日隅初美

東日本大震災以降、全国的に「防災」への関心が高まっています。

「防災の汲み置き」で思い出すのは赤く「防

火」と書かれたブリキのバケツ。学校や広場、商店の軒下などに並べてあり、朝、そのバケツに張った氷を誰よりも早く毀さないように掬ったことを。

作者があつた熊本地震のあつた南小国の方と知り、はつと思ひました。この句の「防災」には深い思ひがあるのだと。

そして「汲み置く桶」から広い草原が目に見え、どこか牧歌的な懐かしさを感じました。

飼ひ犬の哀れ器に初氷 北里信子
初氷鶏がつついて水を呑む 橋本やち

屋外で飼っている犬や鶏は厳しい寒さから身を守る術を自然から学ぶと謂われます。初氷に凍った器の水も当の犬も鶏もあまり気にしていないのかもかもしれません。因みに我が家の飼犬は氷つた器をペロペロと舐めたり、陽の当たった場所に銜えて行き解けるのを待って飲んでいました。

鶏も固い氷をその嘴で一生懸命突いて水分補給をしているのですね。

「生き物」のもつ「哀れ」が愛おしいです。

初氷水道管にタオル巻く 高橋敏恵

今年には強烈な寒波に水道管トラブルのニュースが相次ぎました。かつては学校や公園、商店の裏の水道管に、凍結防止にタオルなどが巻かれていたのをよく見かけました。

高橋さんは普段生活で何気なく見ているも気づかない句材を上手に句にされています。「初氷」の兼題にかつて見た「水道管のタオル」が即座に結びつき、句にしたのです。「初氷」にはきつと、白いタオルでしょうね。情景が目に見え、

遠雷や脳病棟の友の貌 山本万象

思いがけずに脳病棟に入院することになった友人。その後の回復の状況が気になっています。空を見ると雲行きが怪しくなり、雷鳴が聞こえてきます。どうも病院の方角。「大丈夫だよな」と自分に言い聞かせつつ、不安を募らせています。

「脳病棟」の措辞に一寸ドキツとしました。季語を「寒雷」でなく「遠雷」としたのは、作者の優しさと詩心だと思います。

マフラーに顔を埋めて輪に入らず 濱 佳苑

(今日は何となくあの人達の輪の中に入って喋りに時間を割きたくない気分……) そんな日ってありますね。そんな時は、マフラーを高く巻き、顔を半分隠すようにしてそっと立ち去ります。

スカーフでは質感がありませんし、襟巻ではお洒落感がありません。このマフラーはきつとやわらかいカシミアの大判のマフラーですね。「顔を埋めて」「輪に入らず」の間合いが絶妙です。

稲埃払ひて坐せり理容椅子 梅島くにを

米どころ富山のとある老舗理髪店。稲掛けの作業を終え、軽く衣服を掃って急いで店にやってきた客。(もしかしたら途中稲架の道を通ってきたので、稲埃が再び付いたかも知れない) 鏡の前の椅子に座るとき、急いでもう一度袖の辺りを払った。今日は少しおめかしをしたい。「理容椅子」からこんなストローリーが浮かびました。

或いは座席の隅には先客の遺した小さな稲埃があり、そっと掃ったのでしょうか。

主役のくるりと回転する理容椅子がドラマのワンシーンのようにズームアップされてきます。店主の梅島さんの日常生活の一端をさらりと句にされています。ベテランらしい佳句と思います。

老理髪師の語ることも石路咲けり 麻沙子

冬茜 食堂の窓いっぱい 奥土居淑子

夕飯の準備を済ませ、家族の帰宅を待つ食堂。ふと窓辺に目を遣ると、いつの間にか空はあかね色に染まっています。(きれいな夕焼け、早く帰ってこないかしら)

「食堂」は家族のささやかな幸せの象徴でしょう。か。「冬夕焼」でも「寒茜」でもなく、「冬茜」の季語の斡旋が見事です。いつまでもあかね空を見ていたくなる美しい句です。

冬用意先ずは櫓木の井桁組み 鎗水稔子

パチパチと音がして焔の揺らめく暖炉。その火の色のやさしさに今、薪ストローブが人気のようにです。

寒い冬に備えて、薪ストーブの準備は先ず、焚き付け用の櫓木を集める事から始めます。裏山の雑木林の櫓木や小檜、水檜など、落葉樹の枝や切れ端を集めます。その櫓木を「井桁」の形に順序良く並べて、組んでいくのです。以前キャンプでこの「井桁組み」を体験したことがありますが、薪や小枝のバランスに思いの外苦労しました。人々を包み込む暖かさは、このひと手間をかけた「冬用意」にあるのではと思います。

今日一つあしたも一つ冬支度 宮川洋子

月に一回の三郷俳句塾に片道二時間以上かけて出席される作者は、お仕事にも俳句にも真摯な方です。身の回りの冬支度は計画を立て、仕事の合間に少しづつ熟して行かれるのでしょうか。

「今日一つ」「あしたも一つ」の平明な言葉のリフレインがリズムを生み、冬支度をどこか楽しんでいられるように感じられます。

♪日曜日に市場に出かけ 糸と麻を買ってきた
トウリヤー トウリヤー トウリヤー…♪
ロシア民謡がふと口を衝いて出てきました。

最近の作者の句に時々、軽妙で飄々とした句を見つけたからかも知れません。新しい宮川ワールドも拝見してみたいです。

悴む手今年も冬を受けとめる 御沓加壽
悴むも悔ひ残さじと励みをり 大塚そうび

記録的な寒波に列島が震えています。手足のみならず身体全体が凍えるようで心まで悴んできます。「悴む」は陰影のある季語です。

奥様亡き後も変わらず「木の皿づくり」、「俳句」に励んでいらつしやる御沓さん。(冬が寒いのは承知の上、受けとめよう。不都合があれば、その時は何か対策を考えよう)「今年も」「冬を受けとめる」に静かですが、毅然とした覚悟が感じられます。

大塚そうびさんは以前三郷俳句塾で「白日傘の君」と慕われた方です。再び「少年」に復帰されて本当に嬉しいです。

措辞の「悔ひ残さじ」に凜とした決意が思われます。冬来りなば春遠からじ、です。どうぞお元気になれますように。

山を焼く炎ゴッホの筆使ひ 川奈はる絵

後期印象派の画家ゴッホの作品には「糸杉」が多く描かれています。中でも晩年の精神を病んだ頃の南仏プロバンスでの絵。糸杉がまるで生きもののように、黒い炎となつてうねりながら天にのびてゆく、狂気を孕んだ激しい筆のタッチに圧倒されます。

野山の枯木を焼き払い、害虫を駆除する、早春の「山焼き」。その立ち上がる大きな煙に、作者はあのゴッホの「糸杉」を連想したのです。



少年の俳人達

少年の抄
平林益雄

(本号入会者)

小野啓々	小野柳絮	勝浦敏幸
加藤和子	神永洋子	川西ふさえ
河津昭子	河津悦子	河津せい子
川奈はる絵	北里千寿恵	北里信子
北里典子	倉田洋子	耕天恵学
古城由紀子	後藤 章	佐々木素風
佐々木紀昭	佐志原たま	佐竹白吟
貞永あけみ	佐藤須磨子	佐藤アル子
佐藤年緒	佐藤白塵	佐藤裕能
佐渡節子	敷波澄衣	篠崎代土子
清水あつ子	志村き代子	首藤加代
下城たず	杉野正依	住田至茶
妹尾一支	高橋敏恵	高松くみ

武末和子	武田東洋子	津田緋紗子
利光幸子	富岡いつ子	富岡行人
長田民子	中川英堂	中嶋美知子
中田麻沙子	中村玲子	西川青女
錦織正子	能川はるを	萩原胡桃
橋本喜代志	橋本やち	濱 佳苑
日隈初美	平田節子	福田久子
藤井隼子	本田 蟻	布田尚子
堀 麦穂	牧 一男	牧野直樹
松嶋民子	松田明子	松村勝美
松村れい子	御沓加壽	水野幸子
溝口 直	村山邦保	宮川洋子
宮崎敬介	光山治代	宮崎チク
宮本陸奥海	村田文雄	矢下丁夫
安武くに子	山口 修	山口慶子

少年の俳人達

少年の抄

山田洋子

鷺塚靖子

池田美智子

石塚未知

永福倫子

大塚そうび

奥土居淑子

小野京子

山本万象

阿部鳴尾

飯野亜矢子

上田雅子

榎並万里

大平青葉

越智祥子

鎗水稔子

荒木輝二

五十嵐千恵子

梅島くにを

太田 孝

奥寺郁子

落合青花

絆の抄

江村悠朗

平林益雄

佐藤一步

中村沙佳

特選五十五句

稲田眸子選

冬山や送電線の守り人

阿部嶋尾

赴任地へ立つ駅頭の寒残月

山口修

探査機の嶮しき復路冬銀河

倉田洋子

階段を駆け初詣一番乗り	ふる里はあの冬山の懐に	尾根尾根に放牛の群冬の山	最果ての冬風神の采配か	冬風の下田の海に黒き船	冬風や羽根を十字に鵜の立てる	冬風や手毬のやうな姫の島	冬風や唐より僧の帰り来し	冬風や海の魔物の転た寝か	冬風や黒潮の湯気立つと言ふ	病棟の窓は真四角寒の月	孤高なるひとの横顔寒の月	閉ざされし湯小屋の扉寒の月
首藤加代	佐藤須磨子	日隈初美	鷺塚靖子	神永洋子	山田洋子	水野幸子	本田 蟻	福田久子	川奈はる絵	松村れい子	小野京子	杉野正依

薄墨の木々きらきらと雪しずく
雪晴れの樹木の辺り蒸気立つ
ランナーに残る一周冬青空
仕舞屋の箱階段や冬灯
辞書閉ぢる音をしづかに冬灯
料理出来ぬ体やわびし冬の月
湖水る観測の人足袋白し
短日やいつせい点る階段灯
電子辞書馴染めず炬燵に放り置く
エイホエイホ登る階段寒稽古
身ほとりに辞書ある暮し冬うらら
寒風や敢へて階段駆け上る
寺階段主待つ犬か日向ぼこ

古城由紀子
村田文雄
奥土居淑子
敷波澄衣
堀麦穂
橋本やち
中村沙佳
能川はるを
河津昭子
中川英堂
永福倫子
飯野亜矢子
村山邦保

一言を足すに辞書引く年賀状	武末和子
久女忌や情に流されまじくゐる	平田節子
階段の長き手摺や寒見舞	松村れい子
不可能を辞書に増やして年暮るる	橋本喜代志
作業着を洗濯しをり大晦日	宮川洋子
冬の雲一直線に四極山	佐々木紀昭
階段の上より眺む凍る町	池田美智子
氷壁を登りし勇者日の丸を	奥寺郁子
嬉しくて今川焼を五つ買ふ	平林益雄
祖母の手のいつも定位置箱火鉢	小野柳絮
除雪車の重たき響き零れをり	佐藤白塵
反されて櫓木の赤き吐息かな	住田至茶
喝采を背に男去る冬火花	中田麻沙子

割れば弾む如くに落ちぬ寒卵
湯気立ちて眉間に優しさ戻りくる
階段を軋ませて来て鬼やらふ
風の海潜りし頭上鮫の群れ
熊の子の交通事故も夜話に
落葉踏み俱利伽羅寺へ階嶮し
悔ひなしと云ふは嘘なり去年今年
御社の高き階淑気満つ
戦無き国こそ良けれ初日の出
福引の「超大吉」に爆笑す
春の風邪気のすすまねば言ひ訳に
犬駆ける土手の土筆を蹴散らして
稻雀どつと舞ひ来て田にこぼる

布田尚子
大平青葉
濱 佳苑
山本万象
鎗水稔子
梅島くにを
清水あつ子
利光幸子
佐藤裕能
長田民子
溝口 直
榎並万里
橋本やち

彩時記燦々 稲田眸子選

◇寒月（かんげつ）【冬・天文】

寒月や犬の吠えたる猫の影 勝浦敏幸
寒月や無神論者が手を合はす 佐志原たま
寒月や吐く息大きく吸うて吐く 妹尾一支
寒月や影も私もとぼとぼと 津田緋紗子
寒月や野生忘れぬ糸切り歯 橋本喜代志
寒月や砂利を採りたる跡の穴 濱 佳苑
寒月や男三代三無口なり 松田明子
寒月に無情の知らせ雇ひ止め 村田文雄
寒月や猫小走りで家に消ゆ 矢下丁夫
寒月や天主台だけ残る城 山口慶子
寒月や手術を迷ひ膝さする 鷲塚靖子

寒月や森に妖精出て来さう

五十嵐千恵子

寒月や生ゴミ漁りゐる鴉 大塚そうび
寒月や背の傾きを正したる 奥土居淑子
寒月の船笛届く最終便 富岡いつ子
寒月の鋭き光地に注ぐ 松村勝美
寒月の高く帰郷の終列車 佐竹白吟
寒月の丸くなるまで立ち尽くす 北里信子
寒月が真上殉教青銅碑 清水あつ子
寒月に背筋伸ばすや石仏群 佐々木紀昭
寒月をきれいといふ子いとおしい
日隈初美
寒月と寝台特急ふるさとへ 鎗水稔子
寒の月眠れぬ夜をもて余す 加藤和子
寒月光深く波うつ黒瓦 敷波澄衣

寒満月光陰流れゆくまに	平田節子
寒満月女易者に列のあり	川奈はる絵
寒満月一朵の雲も寄せつけず	中嶋美知子
鉾杉を透かしてのぼる寒の月	佐藤テル子
閉ざされし湯小屋の扉寒の月	杉野正依
托鉢の僧去りゆけり寒の月	錦織正子
朋友はそれぞれ天へ寒の月	萩原胡桃
玻璃越しに流るる雲と寒の月	光山治代
酒少し検査値跳ねる寒の月	荒木輝二
孤高なるひとの横顔寒の月	小野京子
病棟の窓は真四角寒の月	松村れい子
階段の上で気づきし寒の月	御沓加壽
亡き人と近づくための寒の月	宮川洋子
水行の僧寒月に照らされて	篠崎代士子
ちぎり絵の彩をちぎりて寒月夜	布田尚子

赴任地へ立つ駅頭の寒残月	山口 修
熱の子の寝入りて寒の月清し	矢下丁夫
◇冬風（ふゆなぎ）【冬・地理】	
冬風や潜水艦の浮上せり	小野啓々
冬風や灯のつき初めし港町	加藤和子
冬風や黒潮の湯気立つと言ふ	川奈はる絵
冬風やリハビリ最中深呼吸	倉田洋子
冬風を犬の遅れてまた先に	後藤 章
冬風や泡を残して浪引きぬ	後藤 章
冬風や河口へと魚回遊す	住田至茶
冬風や航跡二本双胴船	高橋敏恵
冬風や街の喧騒より離れ	利光幸子
冬風や鵜が片羽を広げ干す	濱 佳苑
冬風や海の魔物の転た寝か	福田久子
冬風や唐より僧の帰り来し	本田 蟻

冬風や手毬のやうな姫の島 水野幸子
冬風や梢は空を支へあふ 宮崎敬介
冬風や亡母の忌に聞くエピソード

安武くに子

冬風や大棧橋に舞ふテープ 山口 修
冬風や羽根を十字に鶺鴒の立てる 山田洋子
冬風や軍船客船舫ふ島 山本万象
冬風や遙か立山連ね浮く

五十嵐千恵子

冬風や猫ととんびと島人と 落合青花
冬風や能登の漁火濃く淡く 梅島くにを
冬風の下田の海に黒き船 神永洋子
冬風の波止場のかもめ同じ向き 河津悦子
冬風の川原どんだの丸太積む 河津せい子
冬風の礁に一鶺まぎれなし 清水あつ子

冬風の湾へ迫りく四極山 利光幸子
冬風の島人集ふ朝の弥撒 富岡いつ子
冬風の人工島に人の波 村田文雄
冬風ぎて滑る客船東京湾 中川英堂
冬風ぎて樽の糝の機嫌好し 中田麻沙子
冬風ぎて総身の力ゆるびたる 能川はるを
冬風に往き交ふ舟も一呼吸 池田美智子
鈍色に光る一湾冬の風 小野柳絮
鶯高く鴉は低く冬の風 後藤 章
オリオンの釣り糸垂らす冬の風 後藤 章
噴く山と真青な空と冬の風 永福倫子
車窓より魚のジャンプ冬の風 牧野直樹
心中に冬風と云ふ眺めあり 堀 麦穂
最果ての冬風神の采配か 鷺塚靖子
関八州冬風ぎ続き松明けぬ 宮本陸奥海

◇冬山（ふゆやま）【冬・地理】

九州は未だ緑の冬の山 北里信子
長靴の重き身にしむ冬の山 北里典子
靈宿し人寄せ付けぬ冬の山 佐藤裕能
引き返す勇氣も背負ひ冬の山 橋本喜代志
飼ひ主の呼ぶば牛寄る冬山 下城たず
お仲間と日溜まりハイク冬の山 高橋敏恵
孤高なる梅園眠る冬の山 利光幸子
雪溶かし沸かすコーヒー冬の山 富岡行人
呼び交す声筒抜けや冬の山 中嶋美知子
尾根尾根に放牛の群冬の山 日隈初美
ジクザグに牛の道あり冬の山 日隈初美
頂に砦の跡や冬の山 本田 蟻
弁解は一語で足らふ冬の山 布田尚子
日当たれば動き始めし冬の山 小野京子

ヤツホーも凍てつくやうな冬の山

また一つ病名覚え冬の山 御沓加壽
ドローンの影の写りて冬の山 荒木輝二
雲迫ること恐ろしき冬の山 勝浦敏幸
お狩場の猪鹿狼供養碑冬山に 住田至茶
冬山のどの地表にも日の射して 河津悦子
冬のとときどき物の落ちる音 小野啓々
冬山を突つ切り黒い高速道 佐竹白吟
冬山に昇る噴煙伽藍岳 貞永あけみ
冬山に入りていよいよ耳聡し 篠崎代士子
冬山の山美しくあり怖さあり 濱 佳苑
冬山の奥に民話のやうな村 牧野直樹
冬山の山動ぜぬ姿見習ひたし 水野幸子
冬山や送電線の守り人 溝口 直
阿部鳴尾

冬 の 山 筑 波 二 峰 に 友 住 ま ふ 飯 野 亜 矢 子
冬 の 山 白 き 魔 物 の 棲 め る か に 上 田 雅 子
冬 の 山 切 り 立 つ フ オ ッ サ マ グ ナ か な

榎並万里

冬 の 山 標 あ ら わ に な っ て ゐ し 大 塚 そ う び

冬 山 に 付 せ ん の つ い た 記 憶 あ り 大 平 青 葉

冬 の 山 た だ 黙 然 と 立 ち ゐ た り 江 村 悠 朗

ふ る 里 は あ の 冬 山 の 懐 に 佐 藤 須 磨 子

日 矢 を 分 け あ ふ 冬 の 山 日 本 海 宮 崎 敬 介

友 暮 ら す 久 慈 の 冬 山 今 二 人 山 本 万 象

ご 無 沙 汰 を 詫 ぶ 冬 山 の 父 母 の 墓

五十嵐千恵子

一 城 の 聳 ゆ 冬 山 天 碧 し 清 水 あ つ 子

◇ 初 詣 (は つ も う で) 【 新 年 ・ 人 事 】

階 段 を お そ る お そ る の 初 詣 北 里 信 子

転 ば ぬ や う 階 段 降 り る 初 詣 耕 天 恵 学

蛇 神 社 祈 願 成 就 の 初 詣 日 隈 初 美

石 段 に ち と つ ま づ き て 初 詣 阿 部 鳴 尾

階 段 を 上 が り 合 流 初 詣 高 松 く み

初 詣 階 段 の 雪 払 ひ つ つ 佐 藤 テ ル 子

初 詣 人 の 流 れ に つ い て ゆ く 平 田 節 子

初 詣 テ ン ト の お 茶 の 熱 き こ と 松 田 明 子

初 詣 社 へ 磴 の 高 さ か な 河 津 せ い 子

階 段 を 駆 け 初 詣 一 番 乗 り 首 藤 加 代

◇ 雪 (ゆ き) 【 冬 ・ 天 文 】

新 辞 書 に 「 安 全 神 話 」 雪 予 報 川 西 ふ さ え

山 に 向 き 犬 吠 え て ゐ る 雪 催 濱 佳 苑

貸 し 出 し の ス コ ッ プ 並 ぶ 雪 の 朝 上 田 雅 子

靴 跡 に 蹂 躪 さ れ し 雪 の 庭 堀 麦 穂

雪 国 の 友 と 別 れ て 北 斎 展 宮 本 陸 奥 海

埋もれたる非常階段吹雪く夜々

五十嵐千恵子

沼に雪櫓舟の舳先雁掠め 宮本陸奥海

雪景色しばらく走り消えにけり 溝口 直

薄墨の木々きらきらと雪しづく 古城由紀子

雪晴れの樹木の辺り蒸気立つ 村田文雄

雪掻きの音あちこちに始まりし 中村玲子

◇冬(ふゆ) 【冬・時候】

ランナーに残る一周冬青空 奥土居淑子

辞書繰れば若き日の跡冬日和 藤井隼子

生き延びし命の冥加冬の椅子 佐藤一步

改定の辞書を抱きて冬の町 小野京子

仕舞屋の箱階段や冬灯 敷波澄衣

辞書閉ぢる音をしづかに冬灯 堀 麦穂

みすゞの詩思ひ出せずの冬の夜 耕天恵学

冬の夜電池の切れし電子辞書 江村悠朗

◇冬の月(ふゆのつき) 【冬・天文】

冬の月外壁工事長引きぬ 山口慶子

明かり消え聳へ立つビル冬の月 中村玲子

料理出来ぬ体やわびし冬の月 橋本やち

悔ひ一つ冬三日月の通夜帰り 山田洋子

◇初氷(はつごおり)・氷る(こおる) 【冬・地理】

初氷桶に柄杓の直立す 山口慶子

峡の田の陽当る処初氷 河津悦子

老いの坂踏み外すまじ初氷 佐藤一步

指入れて確かむ厚さ初氷 平林益雄

湖氷る観測の人足袋白し 中村沙佳

◇短日(たんじつ) 【冬・時候】

短日や使ひ馴れたる電子辞書 加藤和子

短日やいつせいで点る階段灯 能川はるを

短日の手許もどかしく豆を選る 宮崎チク

◇冬ざれ（ふゆざれ）【冬・時候】

冬ざれや終活プランあれこれと 池田美智子

冬ざれや犬小屋空きて三年過ぐ 平林益雄

冬ざるる石の階段続く寺 落合青花

◇春隣（はるとなり）【冬・時候】

春隣辞書もお手上げ若者語 佐々木紀昭

つぎつぎと売れる洋菓子春隣り 上田雅子

春隣キャピトルヒルに空広し 佐藤白塵

◇年の暮（としのくれ）【冬・時候】

階段を踏みはずしけり年の暮 武末和子

先競ふ駅の階段年の暮 矢下丁夫

床屋へと父乗せてゆく年の暮 松嶋民子

◇炬燵（こたつ）【冬・人事】

作句飽き辞書を枕の炬燵かな 村山邦保

電子辞書馴染めず炬燵に放り置く

河津昭子

子どもには辞書持つ権利こたつ壇

大平青葉

◇寒稽古（かんげいこ）【冬・人事】

階段をかけのぼる子ら寒稽古 北里典子

エイホエイホ登る階段寒稽古 中川英堂

階段を一気にのぼり寒稽古 萩原胡桃

◇冬麗（とうれい）【冬・時候】

冬麗や鬘がごと尾根の樹々 倉田洋子

身ほとりに辞書ある暮し冬うらら

永福倫子

◇冴ゆ（さゆ）【冬・時候】

さえざえはにすいさんずい辞書を繰る

耕天恵学

たましひの億光年の星冴ゆる 宮崎敬介

◇冷え(ひえ)・冷たい(つめたい) 【冬・時候】

面談を待つ底冷えの廊下かな 松嶋民子

空つぼの郵便受けの冷たさよ 松田明子

◇霜柱(しもばしら) 【冬・天文】

外輪山の土手押上げし霜柱 河津悦子

理科室の裏の廃棄場霜柱 中田麻沙子

◇寒夕焼(かんゆやけ) 【冬・天文】

階段をカンカン登る寒夕焼 宮崎敬介

角力灘一望の丘寒夕焼 永福倫子

◇冬銀河(ふゆやかた) 【冬・天文】

探查機の嶮しき復路冬銀河 倉田洋子

踏み締める老いの階段冬銀河 佐々木素風

◇寒風(かんふう) 【冬・天文】

寒風や敢へて階段駆け上る 飯野亜矢子

階段を寒風と子ら駆け抜ける 太田 孝

◇冬温し(ふゆぬくし) 【冬・時候】

冬ぬくし父の形見の大字典 奥土居淑子

終の家二脚で足りて冬ぬくし 平林益雄

◇日向ぼこ(ひなたぼこ) 【冬・人事】

寺階段主待つ犬か日向ぼこ 村山邦保

ベランダのカニサボテンの日向ぼこ

鎗水稔子

◇マスク(ますく) 【冬・人事】

挨拶のあと振り返る大マスク 川西ふさえ

マスクとり滝の階段口呼吸 安武くに子

◇寒参り(かんまいり)・寒詣り(かんまいり)

【冬・人事】

階段を手摺りづたひに寒参り 河津昭子

鬼作る急な階寒詣り 佐々木素風

◇賀状書く(がじようかく) 【冬・人事】

賀状書き遅々と進まず辞書を見る

北里信子

一言を足すに辞書引く年賀状 武末和子

◇冬凧(ふゆだこ) 【冬・人事】

冬凧や負けず嫌ひの次男坊 津田緋紗子

元寇の海見はるかし冬の凧 津田緋紗子

◇久女忌(ひさじよき) 【冬・人事】

一途なる情といふもの久女の忌 平田節子

久女忌や情に流されまじくある 平田節子

◇探梅(たんばい) 【冬・人事】

探梅やポツケに入れる電子辞書 萩原胡桃

探梅や相模の海をよく晴れて 上田雅子

◇寒見舞(かんみまい) 【冬・人事】

階段の長き手摺や寒見舞 松村れい子

辞書頼み言葉選びて寒見舞ひ 矢下丁夫

◇日向ぼこ(ひなたぼこ) 【冬・人事】

日向ぼこ手擦れの辞書とコーヒーと

奥寺郁子

出番なき本箱の辞書日向ぼこ 御沓加壽

◇大根引き(だいこんひき) 【冬・人事】

大根引すずめ覗くやチドリ穴 村山邦保

母の忌や姉とふたりで大根引く 佐志原たま

◇大根(だいこん) 【冬・植物】

メモ書きに大根水菜新刊書 川西ふさえ

友呉し辛子大根大涙 御沓加壽

◇臘梅(ろうばい)・蠟梅(ろうばい) 【冬・植物】

臘梅の一枝手渡すごあいさつ 敷波澄衣

臘梅の香や陽だまりの庭掃除 志村き代子

◇石路の花(つわのはな) 【冬・植物】

ほつほつと灯ともしころや石路の花

倉田洋子

石路咲くや在の暮しをよしとして

中嶋美知子

◇春隣（はるとなり）【冬・時候】

辞書引いて草の名探す春隣 錦織正子

◇寒明け（かんあけ）【冬・時候】

寒明けや開幕間近の総稽古 富岡いつ子

◇歳晩（さいばん）【冬・時候】

歳晩や氏神様の常夜燈 神永洋子

◇日脚伸ば（ひあしのぶ）【冬・時候】

階段の一段飛ばし日脚伸ば 北里千寿恵

◇寒さ（さむさ）【冬・時候】

階段の手摺りに頼る寒さかな 宮崎チク

◇大寒（だいかん）【冬・時候】

大寒やいのちを宿す枝の先 佐藤年緒

◇冴ゆ（さゆ）【冬・時候】

月冴ゆる八国山へ昇りきて 志村き代子

◇凍つ（いっ）【冬・時候】

凍てついた街がトラムで息を継ぐ

佐藤白塵

◇年越し（としこし）【冬・時候】

年を越し私も後期高齢者 池田美智子

◇日脚伸ば（ひあしのぶ）【冬・時候】

球を蹴り野に遊ぶ児ら日脚伸ば 富岡いつ子

◇年の暮れ（としのくれ）【冬・時候】

不可能を辞書に増やして年暮るる

橋本喜代志

◇数へ日（かぞえび）【冬・時候】

数へ日や母に頼まれ釘を打つ 松嶋民子

◇年送る（としおくる）【冬・時候】

笑ふたり時には泣きて年送る 松村れい子

◇大晦日（おおみそか）【冬・時候】

作業着を洗濯しをり大晦日 宮川洋子

◇師走（しわす）【冬・時候】

街師走核廃絶の署名せり 永福倫子

◇寒九（かんく）【冬・時候】

山路来て寒九の水を含みけり 石塚未知

◇小春日（こはるび）【冬・時候】

小春日や妻とひと日の畑仕事 平林益雄

◇日脚伸ぶ（ひあしのぶ）【冬・時候】

階段に物置く癖や日脚伸ぶ 松嶋民子

◇寒い（さむい）【冬・天文】

酷寒に耐へて綾なす辞書を編む 勝浦敏幸

◇寒風（かんなぎ）【冬・天文】

寒の風通勤列車の佇める 佐藤白塵

◇冬の雲（ふゆのくも）【冬・天文】

冬の雲一直線に四極山 佐々木紀昭

◇凍つ（いつ）【冬・天文】

カンカンと外階段の凍つる音 貞永あけみ

◇冬晴れ（ふゆばれ）【冬・天文】

冬晴やまだまだ余力ありさうな 長田民子

◇冬日（ふゆび）【冬・天文】

冬日差す本棚の辞書セピア色 藤井隼子

◇霜（しも）【冬・天文】

宣告を祈る手に聴く霜夜かな 堀麦穂

◇霜（しも）【冬・天文】

階段に響く靴音霜降る夜 奥寺郁子

◇銀嶺（ぎんれい）【冬・天文】

車窓から銀嶺の富士真正面 奥寺郁子

◇凍る（こおる）【冬・天文】

階段の上より眺む凍る町 池田美智子

◇冬茜（ふゆあかね）【冬・天文】

つぎはぎの縄文土器や冬茜 佐藤一步

◇氷壁（ひょうへき）【冬・地理】

氷壁を登りし勇者日の丸を 奥寺郁子

◇今川焼（いまがわやき）【冬・人事】

嬉しくて今川焼を五つ買ふ 平林益雄

◇火の当番（ひのとうばん）【冬・人事】

火の番の当番来たり出番なり 平林益雄

◇冬館（ふゆやかた）【冬・人事】

そのたびに軋む階冬館 小野柳絮

◇暖炉（だんろ）【冬・人事】

宗悦と兼子の居間の暖炉かな 小野柳絮

◇火鉢（ひばち）【冬・人事】

祖母の手のいつも定位置箱火鉢 小野柳絮

◇炭（すみ）【冬・人事】

その噂聞きたくなくば炭をつぐ 勝浦敏幸

◇手袋（てぶくろ）【冬・人事】

編みかけの手袋片手遺し逝く 神永洋子

◇歳暮（せいぼ）【冬・人事】

お歳暮と大活字の辞書届きけり 河津せい子

◇畳替え（たたみがえ）【冬・人事】

跡継ぎのをらぬ嘆きの畳替 北里千寿恵

◇霜焼け（しもやけ）【冬・人事】

霜焼けの手ふくよかに八百屋の娘

北里千寿恵

◇冬の灯（ふゆのひ）【冬・人事】

冬の灯の階段男児母を待つ 佐々木紀昭

◇除雪車（じよせつしゃ）【冬・人事】

除雪車の重たき響き零れをり 佐藤白塵

◇建国記念日(けんこくきねんび) 【冬・人事】

沖縄の苦悩の続く建国日 佐藤裕能

◇ちゃんちゃんこ(ちゃんちゃんこ) 【冬・人事】

孫舞台緋もんぺとちやんちゃんこ

佐渡節子

◇義士の日(ぎしのひ) 【冬・人事】

義士の日や一碗重き茶の湯席 敷波澄衣

◇日記買ふ(にっきかう) 【冬・人事】

生かされてゐるよろこびの日記買ふ

清水あつ子

◇スキー(すきー) 【冬・人事】

スキー客阿鼻叫喚の噴火かな 首藤加代

◇餅搗き(もちつき) 【冬・人事】

七人の姉さん被りお餅つき 首藤加代

◇避寒宿(ひかんやど) 【冬・人事】

老人に苦手の階段避寒宿 下城たず

◇冬耕す(ふゆたがやす) 【冬・人事】

冬耕やすぐにつき来る鴉二羽 杉野正依

◇櫓(ほだ) 【冬・人事】

反されて櫓木の赤き吐息かな 住田至茶

◇冬花火(ふゆはなび) 【冬・人事】

喝采を背に男去る冬花火 中田麻沙子

◇冬籠(ふゆごもり) 【冬・人事】

懐かしき辞書の手触り冬籠 中村玲子

◇息白し(いきしろし) 【冬・人事】

息白く階段登る部活の子 錦織正子

◇煤逃げ(すすにげ) 【冬・人事】

叱られた猫も煤逃げ彷徨ふよ 能川はるを

◇寒灯(かんとう) 【冬・人事】

寒灯や辞書に象形文字おどる 本田 蟻

◇寒卵（かんだまこ）【冬・人事】

割れば弾む如くに落ちぬ寒卵 布田尚子

◇インフルエンザ（いんふるえんざ）【冬・人事】

インフルエンザ到頭先生にも及ぶ

牧 一男

◇着膨れ（きぶくれ）【冬・人事】

着ぶくれて階段降りる象の足 牧野直樹

◇大掃除（おおそうじ）【冬・人事】

大掃除辞書より落ちたラブレター

太田 孝

◇湯気立ち（ゆげたち）【冬・人事】

湯気立ちて眉間に優しさ戻りくる

大平青葉

◇忘年会（ぼうねんかい）【冬・人事】

忘年会カウンターには客ひとり 越智祥子

◇柚子湯（ゆずゆ）【冬・人事】

頑なな一日柚子湯に浸かりけり 石塚未知

◇障子（しようじ）【冬・人事】

夫と我障子張り終へティタイム 越智祥子

◇札納め（ふだおさめ）【冬・人事】

老舗着のまま足早に札納む 大平青葉

◇鬼やらふ（おにやらう）【冬・人事】

階段を軋ませて来て鬼やらふ 濱 佳苑

◇冬眠（とうみん）【冬・人事】

重き辞書棚に冬眠続きをり 大塚そうび

◇寒鴉（かんがらす）【冬・動物】

拝殿の復興遅々と寒鴉 河津昭子

◇鴨（かも）【冬・動物】

円陣を組めば鉄壁鴨の陣 佐々木素風

◇寒雀（かんすずめ）【冬・動物】

しばらくはおしやべりタイム寒雀

川奈はる絵

◇寒鯉（かんこい）【冬・動物】

寒鯉の大口揃へ寄り来たり 高松くみ

◇鮫（さめ）【冬・動物】

凧の海潜りし頭上鮫の群れ 山本万象

◇熊（くま）【冬・動物】

熊の子の交通事故も夜話に 鎗水稔子

◇枯柳（かれやなぎ）【冬・植物】

枯柳昔花街ありしとか 加藤和子

◇冬木の芽（ふゆきのめ）【冬・植物】

雲掴むごとき枝先冬木の芽 古城由紀子

◇枇杷の花（びわのはな）【冬・植物】

経験を心の糧に枇杷の花 古城由紀子

◇冬芽（ふゆめ）【冬・植物】

冬芽つけ無事に帰還の移植木 佐藤年緒

◇山茶花（さざんか）【冬・植物】

山茶花の押しくら饅頭蒼い空 武末和子

◇青木の実（あおきのみ）【冬・植物】

花街の名残りの神社青木の実 中田麻沙子

◇藪柑子（やぶこうじ）【冬・植物】

幼な名ではなしの弾む藪柑子 萩原胡桃

◇返り花（かえりばな）【冬・植物】

青春とは心の姿勢返り花 橋本喜代志

◇落葉（おちば）【冬・植物】

落葉踏み俱利伽羅寺へ階嶮し 梅島くにを

◇枯蓮（かれはす）【冬・植物】

枯蓮の沼みて俳人氣取りかな 大塚そうび

◇去年今年（こぞことし）【新年・時候】

電子辞書手放せぬ日々去年今年 首藤加代
晩学の辞書首つ引き去年今年 利光幸子
晩学や辞書を友とし去年今年 中嶋美知子
悔ひなしと云ふは嘘なり去年今年

掛け違ふ二人の卸去年今年 清水あつ子
飯野亜矢子

階段をしかと踏みしめ年新た 光山治代
机上には何時も辞書あり年新た 高松くみ
使ひ込む辞書の手垢や年新た 松村勝美

◇初雀(はつすずめ) 【新年・動物】
ふるさとの土柔らかし初雀 萩原胡桃
初雀ちちちちちと福を呼ぶ 池田美智子
弾みきて首をかしげる初雀 光山治代
◇七草(ななくさ) 【新年・植物】

七種の八草となりぬ神供へ 下城たず
七草を摘むも楽しみ早や米寿 佐藤須磨子
七種の殊に芹の香粥する 佐藤テル子
◇元旦(がんたん) 【新年・時候】

元旦や一番電話孫曾孫 鷲塚靖子
元旦の祝肴や鱈子付け 福田久子

◇初明り(はつあかり) 【新年・天文】
一語づつ菩薩に禱る初明り 佐藤一步
初あかり父の遺影の翁眉 敷波澄衣

◇初御空(はつみそら) 【新年・天文】
百三の母が合掌初御空 佐志原たま
昇り行く機影一筋初御空 佐々木素風
◇淑気(しゆくき) 【新年・天文】
御社の高き階淑気満つ 利光幸子
卓上の漆器づくしの淑気かな 西川青女

◇お年玉（おとしだま）【新年・人事】

片言で会釈の曾孫お年玉 宮崎チク
神妙にさし出す両掌お年玉 落合青花

◇恵方詣り（えほうまいり）【新年・人事】

階段を登りてめざす恵方道 武田東洋子
犀星の詩碑に立ち寄る恵方道 福田久子

◇初稽古（はつけいこ）【新年・人事】

我先に駆くる階段初稽古 牧 一男
一歩づつ登る階段初稽古 小野啓々

◇初日記（はつにつき）・新日記（しんにつき）

【新年・人事】

初日記 まず継続の志 佐竹白吟
新しき日記帳への文字太く 鷲塚靖子

◇元日（がんにち）【新年・時候】

元日の卒寿の母が紅をさす 松村勝美

◇初春（はつはる）【新年・時候】

七十の手習ひの初春の一句 妹尾一支
◇正月（しょうがつ）【新年・時候】

正月や母囲む子等歳とりぬ 藤井隼子

◇三日（みっか）【新年・時候】

境内に願ひごと満つ三日かな 長田民子

◇初日（はつひ）【新年・天文】

戦無き国こそ良けれ初日の出 佐藤裕能

◇初茜（はつあかね）【新年・天文】

神鶏のひと声高く初茜 光山治代

◇初景色（はつげしき）【新年・地理】

雪山となりたる五岳初景色 河津昭子

◇礼受ける（れいうける）【新年・人事】

礼受けて嫁の名違へ叱らるる 平林益雄

◇雑煮（ぞうじ）【新年・人事】

われ二つ妻三つ食ぶ雑煮餅 平林益雄

◇屠蘇(とそ) 【新年・人事】

屠蘇に酔ひスーパームーンにも酔ひし

佐藤年緒

◇年酒(ねんしゅ) 【新年・人事】

年酒酌む二人暮らしを運命さだめとし 神永洋子

◇福引き(ふくびき) 【新年・人事】

福引の「超大吉」に爆笑す 長田民子

◇福袋(ふくぶくろ) 【新年・人事】

福袋目がけ階段駆け上がる 古城由紀子

◇初鏡(はつかがみ) 【新年・人事】

初鏡父似のままに年重ね 高橋敏恵

◇年始め(としはじめ) 【新年・人事】

エレベーター避けて階段年始め 阿部鳴尾

◇筆始(ふではじめ) 【新年・人事】

紙いっばい力いっばい筆始 山口慶子

◇羽子板(はこいた) 【新年・人事】

羽子板を求め手打ちの輪に入る 飯野亜矢子

◇筆始め(ふではじめ) 【新年・人事】

筆はじめ辞書手放せぬ齡なる 佐藤テル子

◇事始め(ことはじめ) 【新年・人事】

句やかに舞妓正月事始 篠崎代士子

◇初場所(はつばしよ) 【新年・人事】

初場所や相撲用語を辞書で引く 篠崎代士子

◇成人式(せいじんしき) 【新年・人事】

成人式舞台衣裳さながらに 武末和子

◇初芝居(はつしばい) 【新年・人事】

太棹の音を持ち帰る初芝居 西川青女

◇初句会(はつつかい) 【新年・人事】

選の数一つ増やして初句会 宮川洋子

◇旅始め(たびはじめ) 【新年・人事】

辞書引いて未知なる国へ旅始め 石塚未知

◇弓始(ゆみはじめ) 【新年・人事】

甲 矢 乙 矢 翁 命 中 弓 始 山田洋子

◇風(たこ) 【新年・人事】

風はもう時代遅れかドローン飛ぶ

阿部鳴尾

◇春炬燵(はるこたつ) 【春・人事】

あやとりの川から橋へ春炬燵 川奈はる絵

辞書片手漢字ナンクロ春炬燵 佐渡節子

孫に聞くスマホの辞書や春炬燵 杉野正依

春炬燵つひに持ち出す広辞苑 小野啓々

◇受験(じゅけん) 【春・人事】

受験子や葉分厚き辞書を繰る 能川はるを

受験子の灯火辞書繰る音ひそか 山田洋子

受験生手癖付きたる辞書を引く 中村玲子

受験近し辞書を枕にうたた寝す 松嶋民子

◇春(おいのはる) 【春・時候】

老いの春大きな漢字辞書を買ふ 中川英堂

老いの春いつも手元に電子辞書 橋本やち

こんなにも早く来しとは古稀の春

宮川洋子

◇立春(りっしゅん)・春立つ(はるたつ)

【春・時候】

懐に青春きつぷ春立ちぬ 富岡行人

立春の電子辞書より愛の文字 水野幸子

◇残雪(ざんせつ) 【春・天文】

残雪の筵踏みしめ露天湯へ 安武くに子

被災の阿蘇筋曳くやうに雪残り 北里典子

◇卒業(そつぎょう)・卒業式(そつぎょうしき)

【春・人事】

卒業式辞書をいただき五十年 武田東洋子

階段を上がり一礼卒業子 佐竹白吟

◇早春（そうしゅん）【春・時候】

早春の階段一歩一歩づつ 水野幸子

◇二月尽（にがつじん）【春・時候】

古書店の跡は雑貨屋二月尽 奥土居淑子

◇三月（さんがつ）【春・時候】

三月の街に繰り出す応援歌 富岡行人

◇春宵（しゅんしやう）【春・時候】

春宵や句座の誰もが電子辞書 梅島くにを

◇惜春（せきしゅん）【春・時候】

惜春の大辞典ならそれでよし 布田尚子

◇春の雲（はるのくも）【春・天文】

階段をのぼれば春の雲遊ぶ 小野京子

◇梅東風（うめこち）【春・天文】

梅東風や辞書をポッケに一巡り 中村沙佳

◇春の雷（はるのらい）【春・天文】

稿継ぎのつまづきし時春の雷 梅島くにを

◇春の雪（はるのゆき）【春・天文】

春の雪太郎次郎の屋根に降る 江村悠朗

◇下萌え（したもえ）【春・地理】

下萌えや野球少年皆坊主 山口修

◇早春賦（そうしゅんふ）【春・人事】

訪ぬれば母のハミング早春賦 中田麻沙子

◇山焼き（やまやき）【春・人事】

山焼の生きもののごと炎翔く 西川青女

◇春の風邪（はるのかぜ）【春・人事】

春の風邪気のすすまねば言ひ訳に

溝口直

◇耕し(たがやし) 【春・人事】

委託田となり耕しの始まりぬ 安武くに子

◇種蒔(たねまき) 【春・人事】

種蒔に持つて出かける電子辞書 富岡行人

◇大試験(だいしけん) 【春・人事】

大試験付箋貼られて太る辞書 平林益雄

◇入学式(にゅうがくしき) 【春・人事】

ブレイザーとストラックスとの入学式

荒木輝二

◇通路(へんろ) 【春・人事】

コンビニにお通路さんの鈴ひとつ

榎並万里

◇笹鳴(ささなき) 【春・動物】

笹鳴や今も主は病がち 松村れい子

◇春蚕(はるこ) 【春・動物】

階段の二つある蔵春蚕飼ふ 山口慶子

◇浅蚓(あさり) 【春・動物】

ひたひたと浅蚓言葉を交はしをり

川西ふさえ

◇蔕の臺(ふきのとう) 【春・植物】

ひとり居の姉へ初採り蔕の臺 長田民子

◇梅(うめ) 【春・植物】

早梅や太宰治の家遺る 本田 蟻

◇芽吹き(めぶき) 【春・植物】

辞書を手に森の芽吹を訪ねけり 佐藤裕能

◇若草(わかぐさ) 【春・植物】

若草や杖なしで起つ老いの試歩 山口 修

◇木瓜の花(ぼけのはな) 【春・植物】

公園の入口に咲く木瓜の花 榎並万里

◇土筆(つくし) 【春・植物】

犬駆ける土手の土筆を蹴散らして

【秋・人事】

榎並万里

◇花(はな) 【春・植物】

句に花を咲かす言葉よ辞書を繰る

住み古りて大根を懸け柿を干し
吊し柿日にひとつ減る物干し場

志村き代子
佐志原たま

住田至茶

◇雷(かみなり) 【夏・天文】

遠雷の大雨風となる一寺 河津悦子

◇月(つき) 【秋・天文】

空海の弥陀の空へと澄める月 錦織正子

◇薔薇(ばら) 【夏・植物】

辞書を引く薔薇といふ字の虚ろさに

◇稲雀(いなすずめ) 【秋・動物】

稲雀どつと舞ひ来て田にこぼる 橋本やち

牧 一男

◇夜長(よなが) 【秋・時候】

電子将棋一人遊びの夜長かな 河津せい子

◇鹿(しか) 【秋・動物】

聞きたけれ線刻絵画の鹿の声 牧 一男

息すのみ姉に語りて夜長の灯 佐藤須磨子

辞書捲り歳時記捲る長き夜 村田文雄

◇干し柿(ほしがき) ・吊し柿(つるしがき)

◇辞書
新辞書に「安全神話」雪予報 川西ふさえ
辞書繰れば若き日の跡冬日和 藤井隼子

改定の辞書を抱きて冬の町 小野京子

辞書閉ぢる音をしづかに冬灯 堀 麦穂

冬の夜電池の切れし電子辞書 江村悠朗

短日や使ひ馴れたる電子辞書 加藤和子

春隣辞書もお手上げ若者語 佐々木紀昭

電子辞書馴染めず炬燵に放り置く

河津昭子

子どもには辞書持つ権利こたつ壇

大平青葉

作句飽き辞書を枕の炬燵かな 村山邦保

階段をかけたのぼる子ら寒稽古 北里典子

エイホエイホ登る階段寒稽古 中川英堂

身ほとりに辞書ある暮し冬うらら

永福倫子

冬ぬくし父の形見の大字典 奥土居淑子

さえざえはにすいさんずい辞書を繰る

耕天恵学

賀状書き遅々と進まず辞書を見る

北里信子

一言を足すに辞書引く年賀状 武末和子

探梅やポツケに入れる電子辞書 萩原胡桃

辞書頼み言葉選びて寒見舞ひ 矢下丁夫

日向ぼこ手擦れの辞書とコーヒーと

奥寺郁子

出番なき本箱の辞書日向ぼこ 御沓加壽

辞書引いて草の名探す春隣 錦織正子

不可能を辞書に増やして年暮るる

橋本喜代志

酷寒に耐へて綾なす辞書を編む 勝浦敏幸

冬日差す本棚の辞書セピア色 藤井隼子

お歳暮と大活字の辞書届きけり 河津せい子
 懐かしき辞書の手触り冬籠 中村玲子
 寒灯や辞書に象形文字おどる 本田 蟻
 大掃除辞書より落ちたラブレター
 太田 孝
 重き辞書棚に冬眠続きをり 大塚そうび
 電子辞書手放せぬ日々去年今年 首藤加代
 晩学の辞書首つ引き去年今年 利光幸子
 晩学や辞書を友とし去年今年 中嶋美知子
 机上には何時も辞書あり年新た 高松くみ
 使ひ込む辞書の手垢や年新た 松村勝美
 筆はじめ辞書手放せぬ齢なる 佐藤テル子
 初場所や相撲用語を辞書で引く 篠崎代士子
 辞書引いて未知なる国へ旅始め 石塚未知
 辞書片手漢字ナンクロ春炬燵 佐渡節子

孫に聞くスマホの辞書や春炬燵 杉野正依
 春炬燵つひに持ち出す広辞苑 小野啓々
 受験子や葉分厚き辞書を繰る 能川はるを
 受験子の灯火辞書繰る音ひそか 山田洋子
 受験生手癖付きたる辞書を引く 中村玲子
 受験近し辞書を枕にうたた寝す 松嶋民子
 老いの春大きな漢字辞書を買ふ 中川英堂
 老いの春いつも手元に電子辞書 橋本やち
 立春の電子辞書より愛の文字 水野幸子
 卒業式辞書をいただき五十年 武田東洋子
 春宵や句座の誰もが電子辞書 梅島くにを
 惜春の大辞典ならそれでよし 布田尚子
 梅東風や辞書をポッケに一巡り 中村沙佳
 種蒔に持つて出かける電子辞書 富岡行人
 大試験付箋貼られて太る辞書 平林益雄

辞書を手を森の芽吹を訪ねけり 佐藤裕能
句に花を咲かす言葉よ辞書を繰る

住田至茶

辞書を引く薔薇といふ字の虚ろさに

牧 一男

辞書捲り歳時記捲る長き夜 村田文雄

◇階段

階段をおそるおそるの初詣 北里信子

転ばぬやう階段降りる初詣 耕天恵学

石段にちとつまづきて初詣 阿部嶋尾

階段を上がり合流初詣 高松くみ

初詣階段の雪払ひつつ 佐藤テル子

初詣社へ磴の高さかな 河津せい子

階段を駆け初詣一番乗り 首藤加代

仕舞屋の箱階段や冬灯 敷波澄衣

短日やいつせい点る階段灯 能川はるを

冬ざるる石の階段続く寺 落合青花

階段を踏みはずしけり年の暮 武末和子

先競ふ駅の階段年の暮 矢下丁夫

階段を一気にのぼり寒稽古 萩原胡桃

階段をカンカン登る寒夕焼 宮崎敬介

踏み締める老いの階段冬銀河 佐々木素風

寒風や敢へて階段駆け上る 飯野亜矢子

階段を寒風と子ら駆け抜ける 太田 孝

寺階段主待つ犬か日向ぼこ 村山邦保

マスクとり滝の階段口呼吸 安武くに子

階段を手摺りづたひに寒参り 河津昭子

鬼作る急な階寒詣り 佐々木素風

階段の長き手摺や寒見舞 松村れい子

階段の一段飛ばし日脚伸ぶ	北里千寿恵
階段の手摺りに頼る寒さかな	宮崎チク
階段に物置く癖や日脚伸ぶ	松嶋民子
カンカンと外階段の凍つる音	貞永あけみ
階段に響く靴音霜降る夜	奥寺郁子
階段の上より眺む凍る町	池田美智子
そのたびに軋む階冬館	小野柳絮
冬の灯の階段男児母を待つ	佐々木紀昭
老人に苦手の階段避寒宿	下城たず
息白く階段登る部活の子	錦織正子
着ぶくれて階段降りる象の足	牧野直樹
階段を軋ませて来て鬼やらふ	濱 佳苑
落葉踏み俱利伽羅寺へ階嶮し	梅島くにを
階段をしかと踏みしめ年新た	光山治代
階段を登りてめざす恵方道	武田東洋子

我先に駆くる階段初稽古	牧 一男
一步づつ登る階段初稽古	小野啓々
福袋目がけ階段駆け上がる	古城由紀子
エレベーター避けて階段年始め	阿部鳴尾
階段を上がり一礼卒業子	佐竹白吟
早春の階段一步一步づつ	水野幸子
階段をのぼれば春の雲遊ぶ	小野京子
階段の二つある蔵春蚕飼ふ	山口慶子

平林益雄の俳句紀行（越谷市）

今川焼

礼受けて嫁の名違へ叱らるる
われ二つ妻三つ食ぶ雑煮餅
嬉しくて今川焼を五つ買ふ
火の番の当番来たり出番なり
息荒く僧の駆け行く冬山路
春の日やだんだん坂の寺の町
大試験付箋貼られて太る辞書

初心

いつの日か、俳句を学びたいと思い続けていました。漸くに、眸子先生とのご縁をいただき、「三郷俳句塾」「少年」での学びに加えていただくことになりました。ご先輩の皆様のご指導を御願ひします。いつの日にかと、思うに至る契機を顧みると、俳句に取り組む、先輩、同僚が身近にいたことだと思えます。先輩からは出版した句集をいただきました。同僚には、新聞の投句欄に、入選する人もいました。このように俳句を学ぶ機会が身近にあったのに、なぜ一步を踏み出せなかつたのかと、悔いていますが、でも、それを今さら言っても詮無いことです。

この度、「三郷俳句塾」「少年」での学びの機会をいただけたことを大切にしていきたい。俳句が、これからの生活を豊かなものにしてくれるものと思っています。

とはいえ、晩学であり、投稿を継続してゆけるか不安でもあります。「俳句はつくりはじめたときが、あなたにとつていいばいばい俳句どきですよ」と言う、俳人の言葉も知りました。「継続は力なり」で、学習を進めたいと思っています。初心を忘れずに。

小野啓々の俳句紀行（大分市）

浮上せり

冬風や潜水艦の浮上せり
寒三日月地髪の芯の火照りし夜
冬山のどの地表にも日の射して
天辺より風下りくる冬の山
一步づつ登る階段初稽古
アパートの裏階段の北風激し
春炬燵つひに持ち出す広辞苑

四方の山

昔の子供向けテレビドラマに「ケーキ屋けんちゃん」というのがあった。けんちゃんのお姉さん役を演じた子役の名前が四方晴美であった。

私が「『しほう』って珍しい名字ねえ」と言うとう母が「『よも』って読むの」と言ったのを覚えている。私と「四方」の最初の出会いである。その後、俳句に関わるようになるも名字以外で度々出てくる。上五、下五に付くと五音の関係もあり無条件で「よも」と読むが中に付くと音数により「しほう」と読むかもしれないと考えるわけである。中七にあり「よも」と読むのが確定した後も句評の際はどうしても「しほう」の山と読んでしまう。私の頭の中では童謡の『富士山』の「四方の山を見下ろして……」があり、それは私だけの固定観念なのだ。

続いて「階段」。「階」を「きざはし」と読み、階段の意味であることを古典の時間に教わった。殿上人の登る階段である。今ならお寺の回廊に続く階段をイメージする。その固定観念があり、私には「階」は「きざはし」、「階段」は「かいだん」。「階段」を「きざはし」と読むのには抵抗がある。ただ悩むのは寺社に続く長い石段である。「磴」「階段」であり、「階」ではないだろう……

小野柳絮の俳句紀行（八千代市）

冬館

鈍色に光る一湾冬の風
言祝ぎのスーパームーン二日かな
透明な疎林に潜む冬館
そのたびに軋む階冬館
宗悦と兼子の居間の暖炉かな
祖母の手のいつも定位置箱火鉢
指先に寒さよりくる辞書めくる

おつくう

「少年」のホームページの表紙を飾る池内紀氏のN新聞に載った文章を読んで、失礼ながら多いに合点して安心した。冒頭の部分を書いてみる。

「おつくう」という病がある。漢字で書くと（億劫）。
医者のカルテにはしるされていないから、医学的には病気ではないのだろう。若い人がかかるケースはごく少ないと思われる。年とともに疾患率がたかまつて、老いの到来とともに歴然とあらわれる」という冒頭を読んだだけで、大いに納得したのである。
夏の暑さをようやく乗り越え、少し涼しくなりやれやれと気を緩めると途端にこの「おつくう」がやって来る。どうも気温が下がるに従って、体を休めたいと思う気持ち勝ってくるようだ。

医者に行くのを二三日延ばし、取敢えず薬だけ貰って来てもらおう。友達に電話して会っておこうと思うが差したる用事もないので、暖かくなつてからにしようとか。電話を架けるにも何と話したらと又「おつくう」になる。架かってくる電話は否応なく出なければならぬので「おつくう」なことはない。動物の冬眠と同じで、気温が下がると自然と活力がなくなり、出掛けずに家の中で最低限のことだけをして、暖かい部屋で繭の中に包まれたようにしたい。完全に「老人力」百パーセントである。

勝浦敏幸の俳句紀行（ふじみ野市）

螺旋階段

むささびの闇から闇へ冬銀河
ドローンの影の写りて冬の山
冬風や汽笛残るる赤煉瓦
影もまた螺旋階段冬夕焼
その噂聞きたくなくば炭をつぐ
酷寒に耐へて綾なす辞書を編む
寒月や犬の吠えたる猫の影

酒

酒の失敗には事欠かない。
靴をなくす。妻に警察まで迎えに来てもらう。乗り過ごして遠方の駅に行ってしまう。公園で寝てしまい蚊に喰われる。

今年も重ならなかったが、極月は忘年会が多く、ときに掛け持ちになることが。重なっても、酒好きのサガだろうか、両方の席を断らない。このような日は無事には終わらない。

最近も年を取ったからか、酔うばかりでなく、すぐ眠くなる。電車で座ると即就寝と相成る。歩いていても立ったまま寝てしまう。歩きながらも少しでも休めるベンチなどを探してしまう。

この年になって、こんなにも恥多い酒呑みであることに弁解の余地はない。が、そろそろ好い酒呑みになろうとは思っている。

実は、医者から、呑むことによる翌日の心臓への危険因子を減らすため、飲酒は禁じられている。だが、「とは言え」と従ってこなかったのだ。昨晩は、けつこう酒量がかどってしまった。とは言え、今晩も忘年会が待っている。掛け持ちではないが、今晩も自信がない。

加藤和子の俳句紀行（新潟市）

寒の内

短日や使ひ馴れたる電子辞書
正面に神の眠れる冬の山
寒の月眠れぬ夜をもて余す
冬風や灯のつき初めし港町
枯柳昔花街ありしとか
青々と名もなき低き冬の草
咏へきし雪堰切つて降り始め

寒の内

年が明け、一日一日と過ぎてゆく。天候にふりまわされ、体調不良で家にばかり籠っている。自己嫌悪に落ち込むばかりである。

昨日まで雪や霰が少し降っていたが、突然どんどん降り始め、一日で七十二センチ降った。今日起きてみたら八十センチ近く、さすが雪国、くるべきものがきた。そんな折、仙台の友人から電話がかかってきた。大好きなKちゃんである。彼女は仙台から出たことがないので、訛りがあつて、私にとつては聞いているだけで和んでくる。そのKちゃんが「もう年賀状が読めなくなつたし、書けなくなつたから、和ちゃんもう出さないでいいよ」なんて言うので、「そんなことを言わないで、あなたには出したいの、気にしないで」と言つた。ご主人に読んでもらつたね。彼女は幼い頃から目が弱く、涙目であつた。そして加齢と共に悪くなつて、全体的に見えなくなつたらしい。でも彼女はとても明るく症状を話し、「歩き馴れた道は一人でも歩いて買物にも行くよ」なんて軽々と話すので、心配性の私は驚くばかり。母は強しである。

「もうお互い治る年齢でもないし、上手に付き合つてゆくしかないね」と笑い合つた。

神永洋子の俳句紀行（東京都）

常夜燈

冬空を少し広くし冬の山
寒月やコツコツコツと赤い靴
冬風の下田の海に黒き船
歳晩や氏神様の常夜燈
編みかけの手袋片手遺し逝く
冬の夜若き日の事語り合ひ
年酒酌む二人暮らしを運命とし

私の冬灯り

家から歩いて十分程の所に氏神様である奥沢神社がある。

江戸時代、村に疫病が流行した時に、村の名主の夢枕に八幡大神が現れて、「藁で作った大蛇を祭ると良い」と言われ、その通りにしたら、忽ち治ったと言ひ伝えられている。毎年九月中旬の祭の際に藁で作った十メートル程の大蛇が街中を練り歩く。そのお練りは豊作を願う行事でもあり、区指定無形民俗文化財として有名で、何回かNHKで放映された事もある。社殿は尾州檜材を用いた室町時代の様式で、都内では珍しい造りと言われている。

以前、夫の勤めるY證券の倒産や、義父に先立たれて独りになった痴呆の義母の介護の事で夫と義妹夫婦や義弟との諍いに挟まれて苦しい思いをした事があった。その際、大樹に囲まれた社殿には、ひっそりとした常夜燈があり、その姿に魅かれ、心が和んだ事があった。以下はその頃の句である。

沈黙の神社私の冬灯り

それは今でも変わらない。歳末の忙しい時、そこを通りかかった時に、ふと、その頃の事と右の句を思い出した。

川西ふさえの俳句紀行（福岡市）

寒の月

挨拶のあと振り返る大マスク
メモ書きに大根水菜新刊書
新辞書に「安全神話」雪予報
冬凧や寺も社も無き街に
摩崖仏石の階段冬時雨
振り仰ぐ窓の高さに寒の月
ひたひたと浅蜷言葉を交はしをり

ちはやふる

和歌には、枕詞が幾つか有り、その中で私の好きなのは、「ぬばたまの」「あしびきの」等であるが、「ちはやふる」については、少し違った意味で、関心がある。「ちはやふる」は神の枕詞で、私が住む福岡市東区香椎には、香椎神宮が有り、町名に「千早」という処もある。

ちはやふる神代も聞かず龍田川

からくれなみに水くぐるとは 在原業平朝臣

作者は、伊勢物語の主人公で、美しき貴公子として有名な人である。

ある時、落語で「ちはやふる」を聴いた。長屋の御隠居と、八っさんの会話である。千早と、神代という二人の女性に袖にされた、龍田川という力士が、落ちぶれて、豆腐屋の千早さんの処に物乞いに行つたが、おからもくれなかつたので、身投げをしたという話である。「落ち」は、八っさんが「くぐるとは」の「とは」とは？ と問うと、御隠居は「それは、千早の本名だ」

永遠の美少年、業平様に憧れを抱いていた私は、百人一首の中で、「ちはやふる」に出会う度に、龍田川と業平が混同されて、何とも複雑な心境になってしまうのである。

河津昭子の俳句紀行（南小国町）

寒参り

冬風げる有明海を傍らに
階段を手摺りづたひに寒参り
電子辞書馴染めず炬燵に放り置く
拝殿の復興遅々と寒鴉
湯の溢るポインセチアの初湯舟
待ち待ちてトンネル開通年の暮
雪山となりたる五岳初景色

初句会

はなわらび初句会は、一月十五日。山間の温泉郷湯宿で催された。

静かな佇まいの庭園には、所々、雪が残っていて、訪れる人も無く、森閑としていた。

旅館からの送迎バスで十時過ぎに到着。直ちに句会が始まる。

日頃十五名のメンバーが五名欠席となり、女性ばかり十名の初句会となった。

気がつけば、穴井梨影女先生のお姿が無かったので、皆びっくりし、淋しげだった。

先生は年明けて急に、熊本市内の病院にご入院なさった御様子。一月三日に、能を習っていた孫が、七ヶ月の児と三人でお邪魔した時にはとてもお元気で、お年とは思えぬほど気丈にしておられたのに……。先生に選句していただかず、残念な思いで、散会となった。

梨影女先生の一日も早いご快癒をお祈りするばかりである。

河津悦子の俳句紀行（小国町）

峡の田

雷が伴ひ来たる雪しまく
遠雷の大雨風となる一寺
睡蓮を沈めて鉢の初氷
きんきんと光る外輪山霜柱
外輪山の土手押し上げし霜柱
峡の田の陽当る処初氷
ベランダに茶の花が咲き椅子一つ

初氷

兼題に「初氷」の季題が出た。足弱の私に外の初氷には出会えない。ふと子供の頃のことが蘇ってきた。咄嗟にあれを文章にしようと思った。

茶碗氷である。今日はよく冷えるなあ、湯呑茶碗に水を入れ、外に出そうと。明日の朝を楽しみに氷造りに挑んだ。その氷を夢に、目覚めと共に弾んで茶碗を見に行った。実に、初氷で薄く氷っている。何と表面だけで直ぐに外れた。その薄氷を指でつまみ、口には入れず、冷たい冷たいと眺めていた。

又ある時は、砂糖を入れたり、取り外しができるように藁すぼを入れたり、色々と工夫をしたものだ。しかし、砂糖氷も藁すぼ氷も口にした事は記憶に無い。只、薄氷の茶碗だけが記憶に残っている。

田んぼに出ると、水溜まりに氷が光っていた頃、又川一面氷っていた頃、橋を渡る時、着物の足首が切れるように冷たかったこと、暖房はないが炬燵で十分暖かったことなどを思い出す。小国のその寒さが懐かしい。

河津悦子の俳句紀行（小国町）

冬山

冬風の波止場のかもめ同じ向き
対岸の月きんきんと冴ゆるかな
対岸の軒並照らす寒の月
冬山の夕陽にしばし笹黄葉
お狩場の猪鹿狼供養碑冬山に
取り巻きの九重連山冬山に
階段の紅葉トンネル本堂へ

淋しさ、悲しさ、恐ろしさ

冬山も美しいものである。笹黄葉が枯れかかった頃、外輪山を下ると丸々とした笹山が所々ある。雨に濡れた笹山は活気を取り戻し、初冬の山を彩る。又、午後の陽に当たりぬくもった笹山には柔らかさがあり、魅せられ、惹かれながら、外輪山を下って行く。全く冬を感じない。

話は変わるが、一昨年の大地震の後、国道に並ぶ豊肥線が地震と土砂水に途切れ、又国道沿いの白川に外輪の泥状の土砂が崩れ落ちた。白川に架かる橋も橋桁ぐるみ流され、その凄まじさを対岸より間近に眺めた時、何とも言えない悲しさに立ち竦んでしまった。外輪の山崩れが鮮明に見え、自然に逆らえぬ驚きに、今見る冬山の淋しさ、悲しさ、恐ろしさが身に沁みる。

先日、市内より帰る途中、国道の外輪山路が閉ざされ、県道廻りを余儀なくされた。車外は零下五度、檜山の枝は真っ白に凍てつき、暫くは解ける事もないだろうと思った。雪山の美しさ又四季の美しさが頭の中を駆け巡る。雪山の美しさ、凍て山の美しさに魅せられ続けての帰途となった。

河津せい子の俳句紀行（小国町）

大活字の辞書

電子将棋一人遊びの夜長かな
お歳暮と大活字の辞書届きけり
冬風の川原どんだの丸太積む
年越しの月青々と谷の温泉
初御空自衛隊機の横切りぬ
初詣社へ磴の高さかな
寒月や灯のほそぼそと過疎の町

白いエプロン

天皇陛下のご退位がいよいよ決まったようである。民間であれば、ご隠居という処であろうが、水戸のご隠居のように楽しいご旅行等がお出来になられたら皇后様もお喜びになれるかと私共も楽しみにしている。

もう二十年も前の事であるが、皇居清掃活動に参加させて貰った。私共は十五名程のグループであったが、三日か四日間程、白いエプロンをして皇居の内部のあちこちの掃除とか草取り等をさせていた。―そんなに頑張らなくても良いですよ―と係の人に声をかけられました。良い天気の中で楽しい時間を過ごさせていただいた。

最後の日には、天皇陛下に直接お会い出来る時間があり、皇后様、紀宮様にもお目にかかることが出来、忘れられない思い出となった。東京に連泊していたので、NHKや上野の鈴木、国立美術館等にも出かけた。

今春は初詣や、映画館へも連れて行ってもらったが、疲れるという老いを覚える年齢となり、一抹の淋しさ、侘しさを感じている。せめて俳句の仲間の方々とは元気でお付き合ひ出来るように頑張りたいと思っているこの頃である。

川奈はる絵の俳句紀行（所沢市）

おしやべりタイム

冬風や黒潮の湯気立つと言ふ
寒満月女易者に列のあり
潮入りの漣ひかる寒月光
しばらくはおしやべりタイム寒雀
辞書を手にする事久し春隣
あやとりの川から橋へ春炬燵
点描のやうに敷きつめ花むしろ

気の合う二人

近ごろいい話はないの！
寂しがりやの友人は言う
一緒に居て気疲れしない人
それがあなたなの：と
私もそうなの

♪気の合う二人

お山の 細道は
だれだれ通る だれ通る
狐の 親子の 通るみち
月夜に 狸の 通るみち♪

友人は唄い出す
私も唄う

口ずさみながら
近くの里山を歩く
友をたずねても
帰らなければならぬ
後ろ髪ひかれる年の暮

北里千寿恵の俳句紀行（大分市）

一段飛ばし

跡継ぎのをらぬ嘆きの疊替
霜焼けの手ふくよかに八百屋の娘
一房の重きに落つる蜜柑つり
初句作めくる頁の辞書古し
錦花鳥いのち続くよ老いの春
妻の肩借りて進む歩老いの春
階段の一段飛ばし日脚伸ぶ

錦花鳥と留守番

昨年末、長男家族より、錦花鳥の「鏡ちゃん」を預かる事になった。体長八センチほどの、目白より小さい鳥だ。炬燵の上に放つと、丸めたティッシュと間違ふほどである。

昨年九月にも、ドイツニールランドへ行くというので預かった。錦花鳥の寿命は、五、六年と言う。彼女（メス）は、六年生きているので、私同様お婆さんだ。一回目と同じく、朝一番に元気なのを確かめる。今回は冬なので、寝る前に籠の側に湯たんぽをおいて、バスタオルを二、三枚乗せ、暖かくしてあげた。一昨年の三毛猫（メス）の看病を思い出す。彼女は十四年生きた。鏡ちゃんは、そんな心配をよそに、テレビの上まで飛び、夫の掌で遊び、我が物顔に、所構わず糞をした。

かつて、オカメインコを飼っていた二男が、東京より帰省した。初対面から、二男の掌に乗るので、彼の方が固まって、動けないほどだった。三泊四日の休日を鏡ちゃんに癒され、又、東京へと行った。正月四日には、長男宅に返し、使命を果たし終え、ほっとしている。

北里信子の俳句紀行（福岡市）

階段

冬風の空高々と鳶飛ぶ
九州は未だ緑の冬の山
賀状書き遅々と進まず辞書を見る
階段をおそるおそるの初詣
ベランダの花も部屋内寒に耐へ
寒月の丸くなるまで立ち尽くす
南国であられ降るなり大寒波

唐津の海

一、二ヶ月に一度、娘に連れられ唐津への日帰り旅行を楽しんでいる。唐津は佐賀県なので、遠いように思われるが、福岡市からは車で一時間足らずで着く距離。車中から新緑や紅葉、山頂に雪を被った天山などを眺めながら、思わぬ一句が浮かんでは、鉛筆を慌てて取り出した事も何度か。

いつも唐津の海は穏やかに私を迎えてくれる。露天風呂より浜辺に目をやると、すーっと黒い影。空を見上げると、鳶が大きく大きく円を描きながら、羽ばたきもせず、風に乗り、飛び回っている。静寂の時、かすかに波の音だけが聞こえる。

唐津は、父が生まれ育った所。父も空を見上げただろうか、兄達と砂浜を駆け回っただろうか。

唐津行は、美味しい食事と温泉、そして父を思い出す、楽しくて甘じょっぱいひと時なのである。また次の唐津行きを楽しみにしていますよ、娘どの。

北里典子の俳句紀行（南小国町）

筋曳くやうに

裸木や寒月にスカット透かさるる
寒々と闇照らしゆく冬の月
長靴の重さ身にしむ冬の山
山茶花の散らした紅の薄明かり
階段をかけのぼる子ら寒稽古
被災の阿蘇筋曳くやうに雪残り
散歩径 一步 一步に飛蝗飛び

千の倉より、子が宝

健康が話題になり、関心を持つようになった。テレビでは、「ためしてガッテン」や「人体の神秘」など、健康に関する番組をよく見る。

健康で最後を迎えた母の姿は、私の目に焼き付いている。「千の倉より、子が宝」と書き遺していた。私も健康で「ピンピン、コロリ」で逝きたいと思う。一つは食事が大切だとか。幸い、我が家は畑でいろいろな野菜を作っているので、料理に新鮮な野菜を使うことができる。卵も新しいものが用意できる。野菜中心にバランスよく、十種類を目標に取るように気をつけている。

また、ほどよい運動。今、すこやかクラブ（老人会）で、ロコモ体操や、音読など、いろんなメニューを入れたプログラムを作り、皆で一緒に、楽しく笑いながら運動している。

我が家でも、ながら体操や出来ることを毎日頑張っている。続けることが大切だとか。

一人では続かないので、主人を見ながら、共に行動しながら、残りの人生を、少しでも楽しみたいと思う。

倉田洋子の俳句紀行（東京都）

ひかりの痛み

ほつほつと灯ともしころや石露の花
数へ日の駅ゆうぜんと鳩あゆむ
冬麗や鬘がごと尾根の樹々
寒月のひかりの痛みきはまれり
探査機の嶮しき復路冬銀河
冬風やりハビリ最中深呼吸
その一瞬はつと息のむ落椿

心のつかえ

結婚して以来、諏訪大社上社の撰社八剣神社に二年参りするのを恒例にしていたが、今年は、東京で新年を迎えたので、府中にある大國魂神社に、初めて、初詣した。

身近に健康の不安を抱える人が多く、自身も五十肩と突発性難聴で、半年間通院に明け暮れたので、両手の指では足りないほどたくさんのお願いをした。八幡太郎義家も戦勝祈願したと伝わる、関東随一の神社とはいふものの、初めて詣でて、いきなり「どうぞ御利益を」というのでは、神様も驚かれるかと思ひ、「心につかえているものを、一旦預かって頂けませんか」というほどの気持ちで、二拝二拍一拝した。

仕事始めの日、同僚のYさんから「宝来鈴」を贈られた。五十肩も難聴もストレス性との診断で、心がめげてしまった私への厄除けの鈴だ。キーホルダーに取り付けた鈴がリリンと鳴る度に、気持ちが解れてほっこりする。

年明けの診断では、聴力、肩共ほぼ回復とのこと。身近な人からの思いやりと、心のつかえを預かって下さった大国主に、深謝。

耕天恵学の俳句紀行（越谷市）

にすいさんずい

さえざえはにすいさんずい辞書を繰る

冬の山階段昇る永平寺

転ばぬやう階段降りる初詣

最後尾木枯らし背に抜き返す

鳶が舞ふ父かと思ふ冬の空

みずぶの詩思ひ出せずの冬の夜

玄関に松と南天お出迎へ

金沢・北陸二人旅

十二月の初旬、金沢・北陸へ、妻と二人旅をしました。当初は、十月に、働いていた頃の業界の友人三人と行く予定でしたが、腰を痛め、やむなくキャンセルしたりベンジでした。

金沢では、四大仏と言われるお寺が四ヶ所あります。予約の電話を入れましたが、成約できたのは一ヶ所でした。寺町にある浄安寺で、寄木造りの阿弥陀如来坐像を拝観しました。また近くにある行基菩薩が開眼供養した伏見寺で、阿弥陀如来金銅仏像を飛び込みで拝観できました。さらに「非公開文化財・特別公開」に遭遇し、長久寺、妙法寺、承証寺、西方寺の四ヶ所も拝観できました。

寺町近くの願念寺で、芭蕉の句碑を発見しました。〈つかもうごけ我泣く声は秋の風〉でした。「塚も動け」の表現で、芭蕉が金沢の門人「一笑」に会えると思ひ旅をしてきたところ、悲報を聞いての激しい感情を詠ったようです。

後は、雪吊の金沢兼六園、奥深い曹洞宗の永平寺、雨と雷が渦巻く東尋坊、雪の中の白川郷合掌集落、地酒を頂いた飛騨高山を訪れました。

古城由紀子の俳句紀行（大分市）

薄墨の木々

寒の月に探す面影ミーちゃんの

福袋目がけ階段駆け上がる

スカイプで孫「あけましておめでとう」

雲掴むごとき枝先冬木の芽

薄墨の木々きらきらと雪しずく

春嵐「苦は楽の種」突き進む

経験を心の糧に枇杷の花

抛り所としてきた言葉の力

「楽は苦の種、苦は楽の種」は、私の小学校の恩師が教えてくださった言葉である。早めに苦勞をして早く楽になりたいと努力を楽しんだ。

学生時代は「貫徹能力が問われているのだ」に憧れた。また、漫画「ガラスの仮面」の北島マヤの言葉「一つの舞台の成功は次の幕を開く」に共感し、一歩踏み出すことで開ける道を探した。

その後、「リーダーシップとは、その人自身の価値と可能性を明確に伝え、自分の目で見えるようにすることである」と「第8の習慣」で学んだ。互いのよさを伝え合い、我が子の可能性も信じた。

脳はだまされ易いそうである。「事故が起こるのでは」と心配すると脳は潜在意識を動員し事故を起こすらしい。以来、樂觀的に考えるようになった。

退職後は二、三年間の取り組みも多く反省している。しかし、恩師の言葉「短い時間であっても経験するということは視野を広げ自分を見つめ直すきっかけになる」を得て励みにしている。

俳句では言葉の奥深さや言葉の力を教えて頂いた。ご指導頂いた恩師や師匠に大変感謝をしている。

後藤 章の俳句紀行（大宮市）

冬風

冬風を歩幅の合はぬ二人かな
鳶高く鴉は低く冬の風
冬風を犬の遅れてまた先に
成就院から冬風の由比ヶ浜
冬風に雪の降り込むばかりかな
冬風や泡を残して浪引きぬ
オリオンの釣り糸垂らす冬の風

一周遅れ（十）

二〇〇九年に西村睦子氏の『「正月」のない歳時記』（本阿弥書店）が出たときは少し悔しかった。この本は私と同じく虚子の『「新歳時記」』を読み解く試みであつたからだ。

この本の特徴は季語の成り立ちにおいて虚子の果たした役割を詳細に追跡していることである。読者は現在何気なく使用している季語が、虚子の「ホトトギス」営業戦略によつて生まれたものが多いことに驚愕するであろう。また太陽暦への変更に伴う歳時記の在り方の変遷にも驚くことが多いに違いない。現在、ユネスコの世界遺産に俳句を登録しようという運動が起きているが、俳句の定義の仕方で大いに問題化する恐れがある。つまり俳句はあくまで「有季、定型」だと言ひ張る人々がいるからだ。だが冷静に考えて見ればわかることだが、「有季」とはいつたい何を指すのか。歳時記にある季語を指すというのだろうか、ではどの歳時記を指すのだ？ と聞いただけでその主張は根拠を失うだろう。

歳時記は聖書ではない。季語は時代によつて盛衰があり、これからもある。その変遷の中心に居たものこそが虚子であり、ホトトギスであつた。運動推進者に熟読を進める。

佐々木素風の俳句紀行（天分市）

老いの階段

冬風の緩む艫綱舟泊り
山と積む薪の彼方の冬の山
踏み締める老いの階段冬銀河
鬼作る急な階寒詣り
風雪や潮焼け顔の深き皺
円陣を組めば鉄壁鴨の陣
昇り行く機影一筋初御空

五十年の時を超えて

先日、出身中学校の同窓会に出席した。

会場が遠かったことから、途中のＪＲの駅で集合し、会場の料亭の迎えのバスに。

たまたま遅れて乗り込んだ人物、小生の隣の席へ：「誰？」：思い出せない。

約三十秒後、突然思い出した。「そうだＳ君だ」出席者名簿で気になっていた彼に、五十年ぶりに会えたのだった。

しかし、悲しいかな、相手は、小生が分からない。当時から体重が十五キロも増えては、人相は違うか？互いに名乗りあった後、しばし雑談。

ハンサムで頭の良かった彼は、東京の有名大学に進学したが、在日であったため、当時は、就職も難しかったこと、奥さんは、母国に行って日本語を全然できない人を娶ったこと、その後、大分に帰郷したが、その奥さんに先立たれ、今やつと前向きになれたことなどを淡々と語った。人生いろいろなのだ。往路のわずかな時間であったが、まだまだ、これから互いに元気で生きていこうと語り合った次第である。

佐々木紀昭の俳句紀行（天分市）

春隣

冬風や襷とぎれし箱根山
寒月に背筋伸ばすや石仏群
冬の山仏頭戻りし摩崖仏
冬の灯の階段男児母を待つ
露天湯に千年灯り冬の宿
冬の雲一直線に四極山
春隣辞書もお手上げ若者語

お地藏さん

孫を含む近所の小学生八人で集団登校している。全員の親が働いているため、一年生の孫をもつおばあさん二人と一緒に学校まで付き添っている。子どもたちの安全のためではあるが、付添者の健康を保つためでもある。その時にゴミを拾いながら歩いているが、タバコの吸殻の何と多いことか。一日に二〇本前後は拾っている。しかも前日拾った場所と同じところに落ちていて、捨てるのが習慣になっているのだろう。車内に捨てたくないのか、携帯灰皿を持っていないのか、駐車場の前やバス停に多い。喫煙場所が限定され、喫煙者には気の毒とは思いますが、路上に捨ててよいわけではない。

通学路の途中高架下の角に赤いよだれかけをしたお地藏さんが三体ある。子どもたちは毎朝立ち止まり手を合わせている。何をお願いしているのかは定かではないが、今の子にも信心深いところがあるのかと思うと微笑ましい。

お地藏さんは地藏菩薩。半跏思惟像で有名な弥勒菩薩が降臨するまで、人々を救うのが役目とされている。我々の生活を近くで見守ってくれている存在であり、改めて敬意を表さなければならぬと思う。喫煙者にはお地藏さんが見ているぞと言いたい。

佐志原たまの俳句紀行（大分市）

初御空

母の忌や姉とふたりで大根引く
吊し柿日にひとつ減る物干し場
黒星のやうやう終はり年明くる
百三の母が合掌初御空
寒月や無神論者が手を合はす
産土の神の階段淑気満つ
冬山や人の悩みの小さきこと

百三歳

夫の母が、ついに百三歳になった。戸籍上は大正四年一月生であるが、本当は年末に生まれたという。ということは、大正三年（一九一四年）生まれである。

同居する長女もすでに七十六歳ということ、さすがに今は施設のお世話になっている。昨年秋には、原因不明の発熱が続き病院の集中治療室に移され、医師から「覚悟を」と言われたものの回復し、隣接する介護施設に戻っている。何度も何度も、危機的状況を乗り越えていく母の生命力には驚くばかりである。夫と末娘を早くに亡くしているが、彼らがこの世での時間を母にプレゼントしているに違いない。

ベッドの脇に、テニスをしていたという母の女学校の頃の写真が飾ってある。この無垢な少女が、警察官の妻となり、四人の子を育てあげたのである。大正生まれで苦労してない人はいないと思う。しかし、母から苦労話は聞いたことがない。「不足（不平）を言っちゃダメ」だと、良く言っていた。

万物に感謝しつつ、流されるままに生きてきた。その結果が百三歳である。

佐竹白吟の俳句紀行（大野城市）

ねんごろに

階段を上がり一礼卒業子
寒月の高く帰郷の終列車
冬の山ときどき物の落ちる音
冬風やとんびまあるくゆるやかに
独逸語の辞書歳末の歡喜頌
ねんごろにバスタブ洗ひ去年今年
初日記まじり継続の志

重力

言うまでもない事だが、私たちは地球の引力によって下に引く張る力として働く「重力」の場で毎日生活をしている。ところが段々年を取ってくると、この重力が私達にとって「厄介者」になってくる。坂道を登るときに重力が後ろから下へ下へと引く張って、途中で息が上がって休まなければならぬ。階段も数段であれば何でもないが二十段〜三十段になると登るのが辛くなる。どうかするとちよつと重たい物を運ぶのも大変だと感じるし、椅子から立ち上がる時は「ヨイショ」と言いながら時には手をつけて身体を持ち上げる事も段々増えてきた。

お年寄りは転ばないように、とよく言われるが、躓いたり滑ったりして転んだ時に、私達は自分が失敗して転んでしまったと自責の念を持ってしまう。これは見方を変えれば、私達を引く張りがして地面に打ち付けるような働きをした重力の仕業なのだ。この重力に抵抗し、バランスが崩れても確り踏ん張って姿勢を保つには筋力を保ち或いは強化して重力に「あらがう」事を考えねばないと思ひ当たった。そう実は、私達の身体には「抗重力筋」と呼ばれる筋肉群があるのだ。これを鍛えなければ、という結論になった。

貞永あけみの俳句紀行（大分市）

冬風

冬うらら辞書を片手に喫茶店
冬山を突つ切り黒い高速道
冬風や孫を抱きて一と日過ぐ
カンカンと外階段の凍つる音
寒月に静まり返る別府湾
無精髭吾子の手包み懐手
吾子抱く妻のおくれ毛日脚伸ぶ

生きる力

赤ん坊は必死に生きている。乳を飲む時、母乳でもミルクでも、口いっぱい含み、時には目を閉じ、眠りに落ちそうになりながらも、力強く吸う。飲ませながら観察しているだけで心が熱くなる。本能なのだから当たり前だけど、感動を覚える。睡眠はすくすくと育つために必要で、生命力をゆつくり落ち着かせ、培う。睡眠はその力を發揮させる源だ。それでも睡魔と闘うというか、嫌がるというか。眠たいときにグズグズ泣くことを大分では「寝くじ」という。千葉県出身の娘婿は知らなかったので、大分弁であろうか。ギャンギャン泣いた後、腕の中で寝落ちする。「生きる力」と「無防備さ」、愛おしさが胸を打つ。その一方で、病棟で毎日睡眠剤でやっとな眠りを得ている妹がいる。妹の一日は長い。何とか今よりもという生きる望みが、生きる力となり、自分を奮い立たせている。安らかに眠れる日はまだまだ遠い。

佐藤須磨子の俳句紀行（南小国町）

寒月

息すのみ姉に語りて夜長の灯
冬風に畑の野菜取り急ぐ
ふる里はあの冬山の懐に
裸木も茜に染まり待つ日の出
掛け声で登る階段初詣
七草を摘むも楽しみ早や米寿
窓越しにナースと眺む寒の月

鳶

一村を取り巻く杉山、棚田二十丁歩、子供の頃から芹を摘んだり、落穂拾いをしたりして遊んだ。今整然と整備され、冬田に人も見かけない。

山際に清水が流れ、向う岸に岩山がそそり立っている堤防を毎日、主人と散歩する。鳶が高く輪を描く。三年ほど前、あの岩山に鳶の巣が有るらしいことに気付いた。餌付けをしてみよう二人で話し合い、鳶の好きそうな餌を高く投げてみた。二、三回飛ばすうちに、鳶は目敏く見つけ、サーツと降り、サーと脚で持ち去った。

それから毎朝続けた。近くに行くと、鳶は何処からか飛んで来て輪を描く。巢籠りの頃か、見当たらないので名前を付け、「ピーコ」と大声で呼んでみたら、巢のあたりからサツと降りて来て餌を持ち帰った。やがて雛も育ったのか、声が賑やかになった。続けていいうち、鴉が見つけて鳶の餌を横取りしようとして、四、五羽で追い廻すようになった。どうにか身を躲すが、見ている自分達が堪らない。ああ、自然とはこういうことかと、餌を与えるのを諦めた。今でも、「ピーコ」と呼べば、空に輪を描きながらついて来る。ご免ね。

佐藤テル子の俳句紀行（南小国町）

一人粥

冬風の浜に拾ひし桜貝
冬山の山崖駆け下る猷道
初詣階段の雪払ひつつ
筆はじめ辞書手放せぬ齡なる
鉾杉を透かしてのぼる寒の月
七種の殊に芹の香粥すする
七種の数の揃はず一人粥

鏡割り

一月も早や十日。今日は鏡割りの日となった。少し早めに朝食を済ませてから、神仏に供えてあるお鏡をさげる。大黒様に供えたお鏡はすでにひび割れている。祖母は大黒様が割って召し上がったのだと良く話していたのを思い出す。

味良く出し汁を作り、家で採れた椎茸や昆布他七品の野菜を入れた雑煮を神に供え、今年の豊作を祈る。昔の我が家は大人四名子供四名の大家族であり、雑煮の出来上がり待ち切れず、お供えを手伝ってくれたものだ。お代わりを何回も何回もする子供達、その賑わいも遠い昔の思い出となり、父母は逝き、子供達も成人し、それぞれの家族を築いて、賑やかで楽しい毎日を過ごしている。今は一人暮らしの私を氣遣い、毎日のように顔を見に、長男達がやって来る。

この家に嫁いで既に六十五回目の鏡割りだ。例年の如く雑煮を作り、神仏にお供えをする。後何回位このように鏡割りが出来るであろうか？とふと考える。「おばあちゃん、うんと長生きしてね」と言ってくれる子供達や孫達の言葉に励まされ、一人居ても楽しい毎日を今年も過ごしたいと思うのである。

佐藤年緒の俳句紀行(横浜市)

スーパームーン

文字忘れ辞書を片手に賀状書き

階段の先闇に消ゆ冬の星

屠蘇に酔ひスーパームーンにも酔ひし

冬芽つけ無事に帰還の移植木

大寒やいのちを宿す枝の先

寒月や杵突く兎も身を縮め

吾子のごと植樹の桜見守りぬ

植木職人の心

自宅近くの福祉施設内にある紅八重枝垂れ桜が、施設を増設工事に伴い、一時、別場所に移されることになった。桜は施設開設の年に地域の有志が贈った記念樹である。二十年近く経って、紅色の花が枝垂れる風景が地域に馴染んでいただけに、移動で枯れないか心配した。昨年一月、枝や根を短くした桜は、横浜市内の造園会社の畑地に預けられた。

四月にその造園会社を訪ねたところ、桜は幹にむしろが巻まれ、手入れが行き届いて花もすっかりと咲いていた。当初、七月には元の施設内に戻すことになっていたが、造園会社の社長・竹林孝明さんは「枝の一部が枯れているので、夏場にじっくりと葉を付けさせて根を延ばし、冬まで待つて戻した方がこの木のためにはいい」と言ってくれた。

そのアドバイスに心を打たれ、桜を戻す時期を冬まで延ばしてもらった。その間、社長らは真夏の暑さの中で水やりに気遣い、雨が降ればホツとしたという。年明けて一月十九日、施設に戻ってきた桜は、一回り大きくなった感じがした。一年間の桜を世話した苦勞を聞くと、「親が子どもを可愛がるるときと同じ。苦勞ではなくて喜びですよ」と竹林さんは笑った。そこに植木職人の心を見た。

佐藤白塵の俳句紀行（東京都）

重たき響き

初メール届け済みたる娘より
冬の山風を纏ひて顔慥か
寒月に夜ごゑかまはず垣根道
寒の風通勤列車の佇める
凍てついた街がトラムで息を継ぐ
除雪車の重たき響き零れをり
春隣キャピトルヒルに空広し

首都ワシントン

まだ松飾りのとれない時季に米国の首都ワシントンを出張で訪れた。折から北米東海岸の大寒波の様子が大きなニュースとなっていたので、防寒具を大童で揃えて現地へ乗り込んだ。夕暮れの機窓から凍りついたポトマック河が鈍い色を放っているのを見ながらナショナル空港に着陸した。

翌朝夜明け前、ジェットラグで眠れぬ一晚を過ごしてホテルの窓のカーテンを開けると外はすっかり雪景色となっていた。朝食前にひと歩きしようと完全装備で街に出た。滑らぬように歩幅を縮めてそろりと歩き出す。道路管理の作業員と思しき人が盥のような物を抱えて歩道に融雪剤を撒いていた。さらに進むと今度は大きな除雪作業車が道を往復しながら重い地響きとともに路面の雪を削っていた。

首都の朝はとて早い。高層のビルはないが、明けやらぬころから道路を様々な車が疾駆していた。みな驚くほど大きな車たちだ。その中で、ふと角を曲がると路面電車が走る道に出た。わが国の多くの都市とは異なり、軌道は路側を走っている。歩道から直接降り降りできる。車内のほの明かりに浮かぶ乗客の姿とレールの軋む音に触れて何故かほつとしてホテルに帰った。

ワシントンは多様でおもしろい街だ。

佐藤裕能の俳句紀行（所沢市）

沖縄の苦悩

冬風や渚に車行き交へり
靈宿し人寄せ付けぬ冬の山
戦無き国こそ良けれ初日の出
寒月や濡手拭もこちこちに
階段を踏む足かろし暖かし
辞書を手に森の芽吹を訪ねけり
沖縄の苦悩の続く建国日

後世に語り継ぎたい（十六）

沖縄では米軍のヘリがまたまた墜落した。実際に歩いてみると基地の多さ広さに驚く。

太平洋戦争で激戦地となった沖縄は、日本軍はもとより県民も十数万人が犠牲となった。防戦した洞窟跡、戦死あるいは自決した沖縄女子師範や高等学校の生徒たちを祀った「ひめゆりの塔」に合掌し往時を回顧した。

敗戦により米軍の統治下にあった沖縄は一九七二年漸く日本に返還されたが、基地の使用は継続、多発する米軍の事故に対し日本の官憲は手出しが出来ず、政府もはつきりとした態度をとらず、沖縄はいまだに敗戦の虐を受けているのが現状である。

日本は本土さえ未だに米軍が駐留している基地が多数存在している。横須賀の海軍基地、横田、厚木、三沢などの空軍基地や航空管制基地など車を走らせていると「Outposts」の札が貼られた広大な敷地が目に入る。中には軍人・軍属の家族などの生活環境が整った基地もあり、このような施設や生活費まで日本は、負担させられている事実を国民は理解しているのだろうか。

政府は、今年こそ真の独立国として米国に対等な立場で対処し、世界平和のため活躍して頂きたい。

佐渡節子の俳句紀行（南小国町）

寒月

孫舞台緋もんぺとちゃんちゃんこ
冬風や犬と散歩の川縁を
寒月を湯船につかり仰ぎ見る
冬の山彼方此方眺めバスの旅
冬日さす階段上り息荒く
辞書片手漢字ナンクロ春炬燵
散り紅葉川一面に画となりて

お正月

おめでとうございます。

平成三十年、家族八人全員揃って新年を迎える事が出来た。高校生の孫も久し振りに帰って、元朝を迎え、初詣には、犬のラッキーも一緒に、村の天神様にお参りした。

今年は、大学、高校と二人の受験生がいる我が家のお参りだった。

二日には、長女一家四人の来客。就職の決まった長男の笑顔。「これから頑張ります」との言葉。姉娘は大学最後の年を「しっかりと勉強を！」との事。翌日三日には、次女一家。午前中、着物を着飾った長女が成人式の晴れ姿を見せに来て、すぐに式に行く。

夕方、成人式が終わって、四人揃っての来客。進学が決まった弟の笑顔の高校三年生の孫。話を聞いていて、ほっとする。私達、正月だからゆつくり飲んで、正月気分の、賑やかな宴会の毎日。

どうか今年一年が平穏な世の中でありませうようにと、心から祈るお正月であった。

敷波澄衣の俳句紀行（金沢市）

翁眉

義士の日や一碗重き茶の湯席
臘梅の一枝手渡すごあいさつ
仕舞屋しもたやの箱階段や冬灯
冬ごもり和漢英和の辞書積みて
初あかり父の遺影の翁眉
七草の一つ二つは名を忘れ
寒月光深く波うつ黒瓦

義士の日

十二月十四日は、赤穂浪士の討ち入りの日である。テレビではお定まりの忠臣蔵が放映され、手もとの歳時記に「義士の日」「義士会」として記載されている。

金沢ではお茶会がよく開かれる。赤穂浪士の一人である大高源五ゆかりの宗偏流では「討ち入り茶会」とよぶ。親しい知人がその日を楽しみにしていて、凝った趣向をこことまかに話して下さる。

藤沢周平や池波正太郎の文庫本を揃えて、繰り返し読んでいるせいかな、私は武家社会のきまりごとや、下町の人情ばなしが大好きなのである。ところがほのぼのとあたたまる。

このところ、雪の天気予報に一喜一憂しているが、豪雪はともかく、ほどほどに降る雪には冬の暮しにかかせないノウハウがある。上手にとけこむ住まいの智恵を北国の人は先祖からさずかっている。

大雪、小雪、粉雪、綿雪、ぼたん雪と呼び名があり、口にするとき楽しい。立春を過ぎてから、風の中にちらつく雪片を「風花」と名づける日本人の美的感性は見事である。雪は物語を紡ぐ。

篠崎代士子の俳句紀行（別府市）

冬風

階段の手摺に縋るちゃんちゃんこ
堤防に鳴一列冬の風
冬山に昇る噴煙伽藍岳
異邦人戸惑ふ雪の由布の郷
初場所や相撲用語を辞書で引く
匂やかに舞妓正月事始
水行の僧寒月に照らされて

オノマトペ

俳句の技法について興味を引かれた言葉を書いてみよう。

「オノマトペ」とは、擬音語と擬態語の総称である。例えば、ポーポー、トントン、カンカン、ワンワン、うろろ等の動きや様子を表す言葉であるらしい。言われてみると、成程そうかと納得がいくが、難しく考えなくて、オノマトペを使つてずつと俳句を作ってきた。

オノマトペの名句を上げてみる。

鳥わたるこきこきこきと罐切れば

秋元不死男

ひらひらと月光降りぬ貝割菜

川端茅舎

きらきらと松葉が落ちる松手入

星野立子

「オノマトペ」の技法等を知らずに作句した句。

ぼうふらの踊りふわふわ一壺天 代士子

向日葵をくるくる回る一輪車 同

鬼瓦りんりんとして秋日かな 同

締切日てんやわんやの獺祭忌 同

連れのなき雲雀つんつん芝走る 同

大柚子のプカリプカリと露天風呂 同

清水あつ子の俳句紀行（津市）

殉教青銅碑

生かされてゐるよろこびの日記買ふ

町の灯に浮かぶ天主や片時雨

一城の聳ゆ冬山天碧し

冬風の礁に一鵜まぎれなし

寒月が真上殉教青銅碑

伐採の木霊返しや枯野みち

悔ひなしと云ふは嘘なり去年今年

阿漕浦海岸逍遙 その二

鈴鹿風の吹きすさぶ浜辺には、老若男女を問わず、「寒中水泳」の鉢巻も凜々しい五十人余りが集い、怠りなく準備体操をして開式を待つ。

市長の挨拶から鎮めの神酒、潔めの塩を撒く儀で始まり、陣笠、水衣、禪姿で古式ゆかしく二時間余り全国から集まつた流派の面々が泳ぐのであるが、隊列の掛け声勇ましく陣太鼓に合わせて泳ぐ「古式沖渡り」が観海流の華である。観海流とは「観海如陸、心水一致」から名付けられた。祈願太鼓、陣太鼓が浦々にどよもし、長汀に並び大声援を送る人々。特に幼き寒泳の子らに拍手を惜しみなく送る姿は、風花さえも寄せ付けず、漲る力さえ覚え、あつという間の二時間が過ぎ去り、しんがりの神樂太鼓に導かれての幕閉じとなる。流木を山と積んでの大焚火は、寒泳の人々、囁す人々の語らいの場ともなる。

しんがりは神樂太鼓や寒泳す あつ子

大焚火伊勢の神風吹く浜に 同

年々海の汚れや漁師の若者不足の嘆きを耳にする。景観を守るためにも、津ならではの古式を守るためにも、観海流発祥の地、阿漕浦の浜の繁栄を願わずにはいられない。

長老は海の語り部焚火の輪 あつ子

志村き代子の俳句紀行（所沢市）

蠟梅の香

玻璃磨き終えたる窓の秋茜
蠟梅の香や陽だまりの庭掃除
住み古りて大根を懸け柿を干し
伐採のこだま次つぎ冬の山
月冴ゆる八国山へ昇りきて
夜の更けて辞書繰る指へ寒さかな
不忍の池にただよふ寒の月

福寿草

私が嫁いできたときにはすでに庭に福寿草が咲いていた。以来、毎年絶えることなく五十数年咲き続けている。近所の人や友人は「良く咲くね、少し分けて」などと言って、株分けをして持っていか、数年でなくなってしまうらしい。「お宅は手入れがいいんだね」などと言われるが、大した手入れをしていないわけではない。

庭の福寿草は、正月を過ぎると間もなく咲き、約一ヶ月楽しめる。庭の日向に黄金色の福寿草が冬の中輝いている様は一幅の絵を見るようである。福寿草は、キンポウゲ科の多年草。アジア北部に分布し、日本の山地にも自生。縁起の良い名と、花の少ない時期に咲くのが珍重され、正月用の花として栽培。太い根茎を持ち、地上茎は二十センチ、葉は羽状複葉。早春、葉に先立って黄色の花を開く。園芸種も多い。有毒であるが、根は強心薬となる。茶花では根締め用いる。水はけがよく、腐植質で寒風を避けられ、夏は半日日陰になるような条件を好む。

今年もまた、数株の福寿草に多数の芽が膨らんできた。咲くのが楽しみである。

首藤加代の俳句紀行（天分市）

風花

風花や母を迎えに孝と子と
スキー客阿鼻叫喚の噴火かな
七人の姉さん被りお餅つき
時空越え響く一打や除夜の鐘
電子辞書手放せぬ日々去年今年
階段を駆け初詣一番乗り
寒月のスーパームーン月光浴

存えて

今年は、一月十四日に兄弟での新年会をした。従前は一月二日にしていたが、三年前から正月以降にと変更した。その折、弟から母の余命が後一か月位と聞かされた。十二月までは、母の居る施設に足繁く通ったが、インフルエンザの流行期になったので、訪問を控えるように依頼があり、（寂しがらるだろうな）と気には掛かりながら弟家族に任せっきりになっていた。

次の日から、一族の皆は次々に母の見舞いに行った。私も妹と毎日行つた。帰り際には「又来るね」と言うのと頷いている。元氣といえないまでも容態は後一か月とは思えなかつた。ところが、十八日には後二、三日と連絡があつたと弟から知らされた。毎日行つていたので、当日も母を見舞うと、鼻から管を入れ酸素吸入もしていた。母は、鼻の管や酸素吸入の管を嫌がった。「気持ちが悪くても、つけておかないと元氣になれないよ」と言うと、諦めたように頷いた。

そんな中、十九日は九十五歳の誕生日を迎えた。七十歳で胃がんの手術もし、自分の家系は短命と言いつつ存えている。「今が一番幸せ」と母の口癖であつたが、又それが聞けるのを楽しみにしている。

下城たずの俳句紀行（南小国町）

避寒宿

冬風に海鳥浮かれ旅終へし
飼ひ主の呼ぶば牛寄る冬山
老人に苦手の階段避寒宿
初詣二礼二拍に願ひこめ
寒の内月見れずまま寒籠り
電子辞書かかせぬ手元春の旅
七種の八草となりぬ神供へ

初詣

友達に誘われ、一月六日、バスで福岡三社参りに行くことになりました。

この日、我が家は母の命日になっていたので、五日に玄徳寺様に来てもらい、お経をあげてもらいました。

そして六日の旅行当日になりました。この日は天気も良く、晴々とした気持ちで三社に参ることが出来ました。バスで一緒したのは二十三名、数地区からの寄り集まりでしたが、皆な和気藹々で楽しいな雰囲気でした。

まずは、大宰府天満宮。とにかく大変な人混みでした。迷子にならないように皆なについて行くのが精一杯で、有名な梅ヶ枝枝餅を買うどころではありませんでした。次は宗像神社。ここも混み合って大変でした。最後は宮地獄神社。ここで見た二トンもある大きな注連飾りはとてもきれいで、沢山の人手と沢山の藁で大変な仕事だったのだと思います。十人位並んで本堂まで少しずつ進んで行き、お参りができました。

久しぶりの三社参りでしたが、良い祈願成就が出来て有難かったです。友達にも感謝しています。

杉野正依の俳句紀行（南小国町）

冬風

冬耕やすぐにつき来る鴉二羽
冬風の温泉館や賑はひぬ
閉ざされし湯小屋の扉寒の月
蒼々と星を道連れ寒の月
山容照らす寒月阿蘇五岳
階段をゆつくりゆくり春の宮
孫に聞くスマホの辞書や春炬燵

小さな旅

たまには吟行に行こうと料理のおいしい蜜柑の里を訪れた。

九時過ぎに出発。霧に包まれた小国を後に、十三名が車に同乗。

久しぶりに話が弾み、おしゃべりばかり。句は出来ないうまま着いた。

「お二階へどうぞ」と、句会場に通される。句が足りないなので、投句締切までの間、海へ見に行ったり、近所を散策し、どうにか揃えた。

ばたばたと句会を終わり、昼食。新鮮な活料理、生ビールで乾杯。チュウハイ、冷酒と魚は美味しく、満足、満足。

帰りは、お土産の蜜柑を買いに行こうとお店の人に聞き、美味しい蜜柑を買った。以前来たことがあるからと、観光はしないことに。

帰路は又車の中でおしゃべり。同じ趣味の人ばかり、小さな旅の一日であった。

住田至茶の俳句紀行（浦安市）

寒の月

街の灯や翼を照らす寒の月
冬風や河口へと魚回遊す
雲迫ること恐ろしき冬の山
老女眠る春日しがらみ溶かすごと
句に花を咲かす言葉よ辞書を繰る
反されて楳木の赤き吐息かな
はらりと来空一斉の牡丹雪

囲炉裏

早春の白川郷は雪の中であつた。小路の脇に背丈ほど積まれた雪を、溶かすでもなく積もるでもなく霽が降り続けている。

「ぜんざい」と書かれた旗が出ている合掌造りの屋敷に入る。大きな家だ。一階に囲炉裏があり、その脇に座る。囲炉裏には二の腕ほどある楳木が二本くべられて、その下から立ち上る煙が天井に吸い込まれていく。一階の天井の一部が簀の子になっていて、そこから屋敷全体に煙が回る仕組みのようだ。注文を取りに来た家の人が楳木を素手で掴んで返すと、ふわり火の粉が舞い上がり、楳から輻射熱が直接伝わってくる。雪国ならではの「暖」のおもてなしなのだろう。火の燃える面に明暗があるのは木に残る水分の違いか。降り口の戸が開くたびにすつと外気が入ってきて火の勢が増す。時折、楳がパッと爆ぜて飛ばす火の粉にはっとする。囲炉裏脇の畳に焦げ跡を作っているのはこの火の粉なのだろう。栗餅入りのぜんざいをおいしくいただきたい屋敷を出ると、一片の雪がはらりと袖に落ちてきた。霽は雪で変わったようだ。空一面の牡丹雪がゆつたりと風で流れてゆく。その様はスタート直後のマラソンランナーの如くであつた。

妹尾一支の俳句紀行（大宰府市）

冬の山

冬の海風て明星移しけり
寒月や吐く息大きく吸うて吐く
夕映えに肌焦がしたり冬の山
年の暮れ階段登り息を切れし
炬燵中辞書を片手に文迷ふ
意を汲めぬぬくい牛乳寒き駅
七十の手習ひの初春の一句

七十の手習い

近頃、ニュース番組を見ると外来語が多く、若者は理解できない言葉で話している。時代の流れだろうか。このままでは日本語の美しさが失われていく。同様に、方言も消えつつある。学生の頃、冬の寒い朝、渋谷駅の売店で「ぬくい牛乳をください」と言うくと、店員さんは理解できず、私は困ってしまった。近くにいた人が「あなた、九州の方ですね」「ぬくいは温かいと言うことですよ」と、助け船を出してくれた。

私は七十の手習いで俳句を始めた。五七五に言葉を入れる程度であった。一方で、誰かに指導を受けたいと焦っていた。昨年三月のバスハイクのことである。一人俳句を詠んでいる私に、落合青花様から「私たちの句会『少年』に参加しませんか」と声をかけていただいた。私は「お願いします」と返事をした。

早速、稲田眸子先生から丁寧なお手紙をいただき、初めて投稿した。先生からの講評を読むと私の句が素晴らしく生まれ変わっていた。今、日本語の美しさ、韻文の難しさを感じながら、句帳を持ち、歳時記、辞書を横に置き、学習する毎日である。

高橋敏恵の俳句紀行（三郷市）

冬の山

お仲間と日溜まりハイク冬の山
高齢の低山歩き冬の山
冬風や伊豆の山より眺む海
冬風や航跡二本双胴船
吾生し日や二日のスーパームーン
初鏡父似のままに年重ね
母危篤急ぐ車窓に寒の月

思わぬ怪我

強風に帽子を飛ばされ必死で追いかけた。三十センチ先の帽子なのに風が益々意地悪をする。昨夜の雨で滑り安くなっていたことも忘れ走り続けて……。滑って転んで右肩から着地。衝撃が走る。その場にひれ伏していた。水気が下着にまで沁みてきた。痛さをこらえ起き上ってみた。一人で病院へ。医師に状況説明をする。右肩から着地したのなら絶対顔も打っている筈だと医師は言う。本人の私が顔は打ってないと何度説明してもありえないと医師は言う。そしてレントゲン室へ。その結果骨折はしていないとのこと。痛み止めと貼り薬の処方が終わった。二日後に同病院へ行くも何しに来たかと問われる。年末で休みになるからと言えば骨折もないし湿布もあるはずだから診察を止めますかと。湿布だけで良いのかとふと不安だった。年末年始はなんにも来ず家族の厄介になる他はなかった。親しい山友達が一日後に転んで左肩を骨折したとの知らせがあった。二人で不自由さを電話で話す。三週間経ち違和感があり、整形外科へ行くと、エコーで見て下さる。「鎖骨が変形しており、鎖骨に罅が入ったのでは」との説明であり、以降通院している。最初の病院では鎖骨の説明はなかった。

高松くみの俳句紀行（立川市）

願ひごと

冬風や宿よりひとり西日海
机上には何時も辞書あり年新た
マイクより願短くと初不動
階段を上がり合流初詣
鏡開き汁粉に添へし蕪漬
小寒や天で開けよ霞草
寒鯉の大口揃へ寄り来たり

かすみ草

突然の訃報に声も出なかつた。年末に転んで入院しているが、年が明けると近々転院する予定という話を聞いたばかりであつたからだ。

彼女は家の近くにある特別養護老人ホームに入居した。入居してまだ日が浅かつた頃、担当スタッフから、彼女が夕方になると家に帰りがたり、不安氣に落ち着かなくなる、一人で出口の方へ行つてしまふ、その時間に来てもらえないと連絡があつた。

彼女は、控え目で心配性、氣配り細やかであつた。年齢は八歳しか違わないのに、親子のような鬱囲氣になる時もあった。私のことを「奥さん」と呼んでいた。南側の日当たりのよい窓際にブーゲンビリアや君子蘭の花が散り、床一面に落ちていたことがあつた。二人でそれを拾つて両掌一杯の花を見せ合ひながら「きれいなえ」と笑い合つたこともあつた。一年余が過ぎた頃から、以前より足が弱り、時に車椅子に乗るようになった。認知症の症状もみられるようになった。それでも「奥さんが手を握つてくれた」「奥さんにはいろんなことを教えて貰つた」「ここが一番いい」と眼鏡の奥の目が優しげに語つてくれた。彼女は八十八歳。かすみ草の小花がふわつと風に揺れているような、静かな人であつた。

武末和子の俳句紀行（所沢市）

年の暮

あさぼらけ前はささらの冬の山
階段を踏みはずしけり年の暮
一言を足すに辞書引く年賀状
山茶花の押しくら饅頭蒼い空
家族揃ひ写真に一献暮れ墓参
振袖に兔肩掛け新成人
成人式舞台衣裳さながらに

雪さまさま

鉾山技師の主人と結婚し、福岡県において炭住生活を十六年間送った。冬は割合に雪が降り積もった。唯、水分の多い雪で見た目は大雪のように見えるが、スカートで生活が出来た。

福島県の太平洋側に転勤した。冷たい風がさぞかし多く、大雪で大変だろうと思った。確かに、冬の風邪は肌を刺すほど痛い、雪は降らなかつた。しかし、とてもスカートでは生活できない。冬はズボンを履き通した。お正月は山から下の町の舞台付きの旅館で、社宅の婦人だけの年賀があつたが、その和服の晴れ着の下にも厚い股引きを履いた。さらさらの雪で一年に一、二度は降る事はあつたが、記憶に残る積雪はない。風に消えた。雪は降るから寒いとは限らないようだ。今年も又、気候不順で、日本列島の南の日本海側は、さんざん雪が降っている。太平洋側の関東地方は降らなくて幸せだつた。しかし、大寒の今日、夜から雪になるそう。

夜ではなく、夕方から降り出し二時間も経つと、二十センチばかり積もつた。此処、松が丘に住んで二十年剩りになるが、こんな大雪は初めてである。

武田東洋子の俳句紀行（南砺市）

五十年

眠りけりとなみ野散居冬の山
寒月や真上に凍てるわが窓辺
卒業式辞書をいただき五十年
七彩の冬色御前和みけり
一条の光あまねし冬木立
階段を登りてめざす恵方道
赤き花籬に咲くや寒椿

感謝の心

お正月も過ぎ、今日は早や一月八日過ぎ。月日は一日一日と過ぎ去り、狂いもなく季節が巡ってきます。

「少年」の俳句とエッセイを送らなければならぬ日に近づきました。

今回の兼題を先月から机の上に置いてあるのですが、締切が近くならなければなかなかピッチが上がりません。

元日に、お寺さんのお話を聞きました。「今日しなければならぬことは、先延ばししない。悔いを残さないよう、今日一日一日を大事に生活するように」と教わったばかりです。

まだまだ感謝の心が足りない自分と向き合い、みなさんに助けていただいている自分を心に刻み、今年一年を頑張りたいと思います。

津田緋紗子の俳句紀行（諫早市）

負けず嫌ひ

冬風の湾に女の声の増へ
寒月や影も私もとぼとぼと
寒月や土黒々と藍の甕
晩照や立ち上がりくる冬の山
階段を駆ける足欲し冬日和
冬凧や負けず嫌ひの次男坊
元寇の海見はるかし冬の凧

マイカー顛末記

増え続ける高齢者の交通事故。さすがに私も二年位前からバスや電車に乗る練習を始めた。待つということは難しく、田舎の交通事情は身に沁みた。そんな中、秋の終わりについに私の車に寿命が来た。母の介護を助けてくれたスバルのインプレッサ十年も乗り続けたのは地域事情と何より車が作ってくれた思い出のお陰である。

親しい整備工場で、ああ、もう車やめると口にした私に、社長は事も無げに、あれ持っていけばと会社の代車の一台を指さした。そしてあれよ、あれよという間に新しいマイカーはやってきた。何と私のインプレッサのボールが形見のように取り付けられている！ 少々のお手入れや交換、車検を済ませ、二十万円足らずの代金明細の中に車両代八万円也と記されていたので、私はこの車に「スズキパーマン」と名づけた。

以来二ヶ月、車利用は諫早、長崎に出かける場合とし、慎重に運転している。料金所で普通車料を出したり、スパーに乗って行き、駐車場に忘れて歩いて帰ってきたり、人に言えない話はある。でも、寒風、寒月の季節も笑いつつ、人の温もりを感じつつ凌いでゆくのだ。

利光幸子の俳句紀行（大分市）

梅園の眠る里

孤高

孤高なる梅園眠る冬の山
幽谷の梅園旧宅冬の山
冬風や街の喧騒より離れ
冬風の湾へ迫りく四極山
電子辞書埃払うて年新た
晩学の辞書首つ引き去年今年
御社の高き階淑気満つ

夫の尊敬する江戸時代の先哲三浦梅園の旧宅を初めて訪ねたのは何十年前になろうか。急な坂。息を切らして上った記憶が蘇る。今は、旧宅の保存も資料館も整備されている。梅園の学問や哲学等は、奥が深い。本や資料を読むがちつとも近づけない。

さて、近くに「梅園の里」という地産地消のランチが出来る宿泊研修施設がある。時折、姉妹会（義姉・妹・私）と称してランチバイキングに行く。クリスマスイヴのランチは、三家族と粋を広げた。

まず、お風呂につかる。男達は早々に出たようだ。私達は四方に広がる冬の山に見とれ、長湯になった。さあ、待望のバイキング。国東産の鮪や太刀魚等の水産物、地元のクレソンや大根等新鮮な野菜。食材を活かした品々はどれも美味。兄と義弟は「食いすぎた。バイキングは苦手だ！」と言う。義姉と妹は「皿に取ったのは自分でしょ」と和気藹々。楽しい年忘れが出来た。

帰りには旧宅に寄る。甥がふと呟いた。「健おじちゃんとはよく来たな」と。

人生恨むなかれ 人知るなきを

幽谷深山 華自づから紅なり

奥深い梅園の言葉。いつも心の中に生きている。

富岡いつ子の俳句紀行（長崎市）

朝の弥撒

手をつなぎ兒らとスキップ黄落期
冬風の島人集ふ朝の弥撒
寒月下軍艦島も寝静まり
寒月の船笛届く最終便
寒明けや開幕間近の総稽古
立春やマリリンバの桴踊るごと
球を蹴り野に遊ぶ兒ら日脚伸ぶ

小道具作り

今年も一月末の「みんなで作る音楽会」が目前に迫ってきた。利用できるものは以前の衣裳なども使うが、新しく作ることも多い。今度は、大判小判を作る仕事がある。ダンボールを解体後、カッターで何十枚も切り抜く。次は、金銀の紙を張り付ける。若い保育士さんはひたすら作業をしている。ぴかぴかの大判を紐に吊り下げると完成。四人で熱中した。劇中では、一瞬の間の使用であるが、小道具も手抜きはできない。やっと終って周囲を見ると、縫い物に苦労している人を見つけた。よく見ると、アイヌの衣裳の襟付だった。遠くから見ていると、生前の母の姿を思い出した。子供の頃は家庭科が好きでなかった。成人して初釜に出席するようになり、半襟の付け方を教えてもらったこと、半襟の付け方をいねいに教えてもらったこと、半襟の縫い目がなく役に立つことがある。老眼鏡で初縫いができた。

絵が好きなのは、鮭に色をつけ、切り抜き、腹につめものを入れ、立派な魚を完成。毎年このグループは本番に強い歴史がある。どんなに大変でも楽しんで知恵を出し合ってきた。今年もきつとみんなが成功させるだろう。終わった後の会食は格別である。

富岡行人の俳句紀行（三郷市）

青春きつぷ

冬風や心鎮めし空と海
信号を共に待つの寒の月
雪溶かし沸かすコーヒー冬の山
種蒔に持つて出かける電子辞書
古草に帰れぬ時を思ふかな
三月の街に繰り出す応援歌
懐に青春きつぷ春立ちぬ

A I 俳句

昨年は、中学生の藤井聡太さんが将棋界で活躍し、将棋ソフトで勉強をしたことが知れ、A I が脚光を浴びた。さらに最近の新聞にA I が書いた小説が文学賞の一次審査を通過しており、既にJポップの歌詞をA I が自動作成していること、A I が和歌を詠んでいるとの話が掲載されていた。十七文字という短い定型詩の俳句はA I に向いており、近々A I が詠んだ俳句が大会などに入賞し話題を呼ぶようになるであろう。既に北海道大学では「A I 一茶君」というソフトを作成し句作を始めているとの事である。こんな時流に遅れまいと私も俳句カレンダーをもとにデータベースを作り始めていたので、いつかそつと投句してみようと考えてみた。しかし入賞しても自作でなくA I 作である。

又俳句は入賞の為だけに詠むわけではなく、日々の生活の中で起きた出来事等自身の感動を十七文字に詠み、感動を伝えるものでもあらうと思うので、句作の参考にデータベースを利用する程度が良いのかも知れない。また俳句には文芸としての鑑賞という別の面もあるので、今年は句作と共に今まで私が疎かにしていた俳句の鑑賞も少し始めてみようと考えている次第である。

長田民子の俳句紀行（大分市）

冬の月

冬風や快方兆す便りあり
冬灯記憶を正す漢字辞書
冬晴やまだまだ余力ありさうな
福引の「超大吉」に爆笑す
境内に願ひごと満つ三日かな
ひとり居の姉へ初採り露の臺
薔薇胸にゆつくりと螺旋階段

ふれあい交通

一月から「ふれあい交通」の運行が始まった。交通が不便な地域から最寄りのバス停まで百円で行ける交通機関である。以前にも一度試みたことがあるが、それは何人かと組んで、往復利用するというものだった。行先も目的も違うのに、同じ時刻に一緒に乗るのは難しく、数か月で取り止めになった。

今回は、一人でも、片道でも良いというので、先日初めて利用した。客を乗せながら地区内のルートを廻ってくると思っていたが、乗り場に来たのは空のタクシーで、私ひとりだという。何だか悪いような気がしながらバス停まで乗り、路線バスに乗り換えた。タクシーが百円、バスが百円で随分助かる。しかし、時間は電車より倍以上かかる。時間を気にしない自分だけの用事の時利用できるかなと思つた。

説明会には多くの人が来ていたし、登録もしていたが、現実には様々な問題がありそうである。「最寄りのバス停」も問題で、バスに乗る人はいいが、そこで用事と言つても、店も病院もかなり遠いので、限られた人の利用にならのではと気になる。

今後、少しでもみんなが利用し易くなるよう改善してほしいと願っている。

中川英堂の俳句紀行（小矢部市）

エイホエイホ

冬風ぎて滑る客船東京湾

天を射す黄金の刃寒の月

白雪嶺袴と見立て冬の山

エイホエイホ登る階段寒稽古

老いの春大きな漢字辞書を買ふ

立山の嶺従へて冬星座

ゆきだるま言えぬ幼児やゆきわるだ

不断の努力を

昨年秋深まる頃、稲田先生がお忙しい日程を割いてわがまちに来ていただき、ほんの小さな俳句会も開催できました。

先生には二度目のご訪問ですが、お迎えする私は初めてで、しかも今も横浜の「あらくさ句会」で、年に数回は直接教えてもらう生徒です。先生の来訪でお会いできる嬉しさと気負いで興奮しております。

さて、先生をお迎えし、ほとんどのことは梅島くにを会長さんに仕切っていただきましたが、何とか恰好を付けることができました。

駅の出迎え、梅島宅での素十直筆の俳額との対面、安居寺での素十句碑への献杯、そして、となみ野の俳句会開催等々；その小さな俳句会で先生がズバツと言われるもの言いに、みなさん大いに感じ入ったようです。また先生の句会メンバー全員に発言を求め、進め方は、見習うべきとの意見もあり、我が句会でもそうしたいと思えます。

今後とも先生のご指導をお願いするわけですが、我々もこうした不断の努力を続けていこう！と決意したところです。

中嶋美知子の俳句紀行（大分市）

辞書を友とし

寒満月一朶の雲も寄せつけず
冬風やぼつねんと浮くスワン船
極彩の百の階段初詣
呼び交す声筒抜けや冬の山
晩学や辞書を友とし去年今年
輝割れを包む母の掌罅割れて
石露咲くや在の暮しをよしとして

島国根性

単細胞で一本気な私の島国根性は生半可ではない。二人の息子からは、「島国」と呼ばれる程である。殊に、プロ野球では断然ソフトバング。中でも、大分身の打撃の内川、好守備の今宮、名キャッチャーの甲斐。何れも、昨年、プロ野球界で表彰されている。

日本シリーズ戦に入ると、テレビに釘付けで、つい解説入りの応援に、「へえ、そんなで野球の解説：」傍らで冷静に観戦している長男の呆れ顔。

相撲では千代大海や嘉風、AKB人気投票一位の指原。

大きな舞台では、夏冬のオリンピックやパラリンピック及びマラソン等の国際試合でのテレビ観戦は何があっても見逃すことは無い。

応援が熱狂的になり、年齢を忘れて、血が騒ぎ、顔が紅潮し、体中が熱くなり、身心共に活性化しているように思える。

代表選手となれば、絶対負けられないというプレッシャーと、重荷を背負つての並々ならぬ努力あってこそその勝負である。敗者への称賛も忘れてはならないのだと深く反省している。

中田麻沙子の俳句紀行（流山市）

母のハミング

花街の名残りの神社青木の実
理科室の裏の廃棄場霜柱
冬風ぎて樽の糍の機嫌好し
喝采を背に男去る冬火花
冬三日月想ひ出すたび吠ゆ老犬
階の緩きを選び初詣
訪ぬれば母のハミング早春賦

♪犬は喜び庭かけ回り♪

何年振りかの積雪。雪掻きをしながら、昔風の雰
囲気を持った我が家の愛犬のことを思い出した。
赤褐色の雄の柴犬、名前は「弾（ダン）」。生後
二カ月で夫が知人から譲り受けた。血統書には奥秩
父の産。練習中の娘のピアノの音と、コロコロとは
ずむ様子から名付けた。

庭の片隅の犬小屋が居場所だったが、日中は隣地
の樺の大樹の傍らに杭を打ち、長い綱で繋いでいた。
斜面を上ったり下りたり、自由に動き回っていた。
あの頃のトレーニングが足腰を強くさせ、長寿の秘
訣だったので、と密かに思っている。

木々が芽吹き草花が一面を彩る春。苦手な暑い夏
は木陰を選んで昼寝をしていた。秋風が吹きたすと
急に元気になって散歩にも時間が掛かった。そして
冬。ある時は雪の上で爆睡していた事もあった。キ
ャベツなど野菜が好物。時に番犬の役を果たした。
偶に自転車で散歩をさせると喜んで「ダン、早い
ネ！」と声を掛けると更にスピードを上げた。新し
いログハウスの犬小屋が届いた日には、何度も寝返
りを打ったり、嬉しそうにしていた。それらの話は
晩年入院中の父をも笑わせ、暫し和んだ。
生涯を屋外犬で十七歳二カ月、天寿を全うした。

中村玲子の俳句紀行（八王子市）

舟を編む

手触り

明かり消え聳へ立つビル冬の月
階段を昇りつめれば冬銀河
懐かしき辞書の手触り冬籠
雪搔きの音あちこちに始まりし
冬山や風なく音のひとつなし
寒月を目指し階段駆け昇る
受験生手癖付きたる辞書を引く

学生の頃は辞書をよく使った。

英語の辞書は、特にいつも机に置き、マーカーを塗って、ラインをひいてよく使いこんだもので、目指す項目も、手触りで引けたものだった。

そういえばあの辞書は、どこへ行ったのか見当たらない。一緒に、単語達も見当たらなくなってしまった。自転車は幾つになっても乗れるのに、覚えた単語は、あっさりと消え去ってしまうものだ。

外国為替の仕事をした父は、当時、覚えたら、そのページは食べたらしい。食べるくらい自分のものにした、という意味だったかもしれないが、私も食べてしまえば単語を覚えていられたかも。

国語辞書を作る出版社の社員の話で映画にもなったが「舟を編む」という小説は夢中で読んだ。「言葉は海であり、辞書とは海を渡っていく舟」の題名だが、言葉を大事にしているのが伝わってきた。

私は、今はもう電子辞書を手元に、最近はパソコンで検索して済ませることが多い。紙の辞書こそ面白いと思っているのに、残念なことだ。「広辞苑」売れるかな。

西川青女の俳句紀行（北葛城郡王寺町）

音持ち帰る

元旦の銚子飾りのはなやげり
卓上の漆器づくしの淑気かな
太棹の音を持ち帰る初芝居
山焼の生きもののごと炎翔く
寒月と連れ立つ道のかうかうと
我が町の四方を囲みて寒の山
辞書にも及ぶ今昔の寒なりし

時間

娘たちの通ったキリスト教の幼稚園では保護者のためのカルチャークラブのようなものがあつた。今から四十年程前のこと。

子供が先生に見守られている午前中に、聖書研究クラブ、英語クラブ、読書クラブ、ギタークラブ等々、親たちが各々興味ある科目を選択して自分自身の時間を持てる環境があつた。「愛の園」という幼稚園の存在が園児はもとより父兄にまで大きな影響を与えていることに感謝の念で一杯であつた。

ある日、園長先生が「NHKの朝の連続ドラマは十五分という短い時間ではあるが、一年間（当時）というスパンでかなりのボリュームの内容となる」と話された。

丁度子育てに振り回されている真つ只中の親たちにはとても衝撃的な発言であつた。長い時間は取れなくとも短い時間を繋いでゆけば、やりたいと思つていることが可能であるということを教わつた。園長先生の言葉は、その時から現在までずーと私の脳裏に焼き付いている。

時間は作るものであつて、「時間がない」という言い訳は通用しないことを実感した。「一年の計は元旦にあり」で懐かしく思い出すのであつた。

錦織正子の俳句紀行（大分市）

一期一会

寒の月

托鉢の僧去りゆけり寒の月
冬風や眼下に見ゆる船溜り
禅僧の無の如眠る冬の山
息白く階段登る部活の子
辞書引いて草の名探す春隣
空海の弥陀の空へと澄める月
旅の窓ゆくりゆくりと月渡る

「寒月」の兼題に、ある僧の事が浮かんだ。
当時、学生とお茶の稽古が終り、炭火の後始末をしていた。外は暗くなりかけていたので外灯を点けようと玄関に出ると、お経らしい声が聞こえてくる。そつとドアを開けると、一人の僧がお経を唱えていた。慌てて家中を灯し、心のおもてなしをした。僧はお経が終わると、編笠を少し上げて一札の後、長崎の寺の住職であること、寺に観音像を奉納するために行脚している寄付をお願いして、門々に立っているとの事、そして「もう暮れて、どの家も閉ざしたままなので帰路につこうと歩いて来て、ふとこの家が温かく感じられ、導かれるように参りました」と。五十代位の品格のある僧と寺の話などを聞き、心ばかりを懐紙に包み、末広に乗せて差し出した。僧は巡り会った事を喜ばれて観音様の台座に私の名前を納めて下さると言い、一札されて帰られた。もしかして以前に須磨寺に「慈」の一文字を納めた事も仏様の御縁なのかと思ったりした。
私は門の外まで出て、御僧が角を曲るまで見送った。大空にはもう月が上がっていた。一期一会の思い出である。

能川はるをの俳句紀行 (三郷市)

浮遊

冬風ぎて総身の力ゆるびたる
やさしくなあれ巨きくなあれ寒の月
短日やいつせい点る階段灯
風花の螺旋階段また浮遊
受験子や葉分厚き辞書を繰る
叱られた猫も煤逃げ彷徨ふよ
蘭亭序すつくと立てる初硯

私の愛猫記

明けて成年になったが、猫の好感度は留まることを知らない。書店には猫本のスペース、テレビは猫番組がまかり通っている。新聞で犬派、猫派の特集があったが、猫派が多数を占めた。やんぬるかな。私は何派か？と言われればかなりの猫派になる。第一、犬は飼ったことがない。猫だって私の十代の頃の一匹だけである。「チャコ」という茶斑の雄猫である。

仔猫の頃の愛らしさは覚えていたが大きくなってからは散々苛めた。雪下ろしでは二階の屋根から空に放り投げる。ギャーと喚きつつ雪の中に落下する。夏は家裏の川に投げると必死に泳ぎ帰る。そんな悪戯を越えた苛めを散々繰り返してきた。

その後、離郷して、猫を思い出すこともなかった。何年か後、正月帰省して東京へ戻るべく、結構離れたバス停まで雪道を歩いていて、ふと振り返ると何とチャコが従ってきている。犬が従いてくることはあっても猫が…。啞然として、「帰れよチャコ」と言うと、「ニャー」と鳴いた。バス停まで見送ってくれた。バスの中で涙が溢れた。今から六十年程昔のことである。

萩原胡桃の俳句紀行（岡崎市）

世代交替

ふるさと

次々に漁船もどり来冬の風

チエーンソーの音くぐりくる冬の山

朋友はそれぞれ天へ寒の月

階段を一気にのぼり寒稽古

幼な名ではなしの弾む藪柑子

ふるさとの土柔らかし初雀

探梅やポケットに入れる電子辞書

昭和六十三年度、アパートが建った。

当時は次々と若いカッパルが入居した。子供が産まれ、幼児は小学校に。このアパート内だけで、三十人余の小学生がいた。学校はすぐ近く。家主の庭を通って通学。わいわい、がやがやとそれはそれは賑やかであった。

町営の総合病院も当時は忙しく、病棟は拡張、拡張の勢いであった。優秀な医師が揃っていた。

時は流れ、何時の間にか、次第次第に病院が寂れてきた。町政の行き詰まりなのか、名医は余所へ移り、産科も無くなってしまった。平成も三十年を迎えた今、世代交替か、ぼつぼつ若い家族がアパートに住むようになった。大家さんは、すっかり年老いてしまった。庭の通学路を行く数少ない小学生を今朝も見送っている。

今日はクリスマスイブ。アパートの慣例で、サンタさんからのお菓子のプレゼント会がある。さて何人集まるだろうか。大家さんはいそいそと楽しそう。

電飾を古木にかざりサンタ待つ 胡桃

橋本喜代志の俳句紀行（三郷市）

蜜柑

蜜柑剥く記憶の扉開くごと
不可能を辞書に増やして年暮るる
冬風や航跡長き渡し船
引き返す勇氣も背負ひ冬の山
寒月や野生忘れぬ糸切り歯
青春とは心の姿勢返り花
階段に躍る足音桜草

蜜柑

年末になると、中学時代の恩師が瀬戸内の蜜柑を届けてくれる。

スーパ―には四国や静岡など各地の蜜柑が並ぶが、子供の頃から食べなれた故郷の蜜柑の味は懐かしさも加わって格別である。私が学んだ中学校は三方を山に囲まれており、この山の段々畑ではいい蜜柑ができた。冬の昼休みにはこの蜜柑を失敬しておやつ代わりに食べたものであるが、学校側も抜き打ちの「みかんチェック」で対抗する。蜜柑を剥いて食べる指や爪に鮮明にその証拠が残るので問答無用で御用となるのであった。

正月に懐かしい蜜柑を味わいながら牧野富太郎博士の本を読んでいたら、蜜柑は変態果実だそうだ。曰く「蜜柑の実の子房の壁面から生え出した毛が実の囊の中に一杯に成長しその毛の中に甘味の液汁ができたもの」。蜜柑は普通皮を剥き白い毛をとって指で小包をひとつずつつまんで食べるが、あの部分は毛が広がった内包ということだそう。

最近の蜜柑は改良が進み、皮は薄く種もないが、昔は皮も厚く種も多かった。博士の本は野生の知恵や逞しさを面白く解説しており興味深い。そして恩師の蜜柑は旨い。

橋本やちの俳句紀行（南小国町）

老いの春

稲雀どつと舞ひ来て田にこぼる
冬風の庭に持ち出すバラの鉢
冬山の山昨日の雪はとけぬまま
階段を登る孫の背支え行く
料理出来ぬ体やわびし冬の月
寒月が中天にあり夜の静寂
老いの春いつも手元に電子辞書

夏の水泳の思い出

水しぶきをあげて打ち寄せる大波へ消えたり、現れたりする若者のサーフィンの勇ましい様子を見てみると、小学校時代の水泳場のことを思い出す。

今では各学校にプールがあるが、昭和初期に育った私達にはプールがない代わりに、自分達の家の近くに水泳場があった。夏休みになると、村を流れる大川の水泳場が賑やかになる。水泳場の深い所には、畳三枚上げた位の大石があった。その表面は平らであつたので、皆、その岩で休み、その上から流れに沿って泳いだ。下級生はその大石に行く時は、上級生が前後について守つてやつた。

川の水はきれいであつたが、冷たいので長く泳ぐことは出来ない。あの頃は川の中に大きな魚やメダカが一杯おり、群をなしていた。両方からタオルでそつと掬うとピチピチとした小魚が一杯とれた。小さいのは川に戻し、少し大きいのを持つて帰つた。川岸には雑木や笹の葉が茂り、「ゴリコベ」等がさがっているのので、それをちぎり投げ比べをした。

夏は暑さ知らずで過ごし、家に帰つて一寸お昼寝をした。夕方になるとひぐらしが鳴き始めた。それが小国の夏の風景であつた。

濱 佳苑の俳句紀行 (船橋市)

辞書

風花や赤きリボンの道しるべ
山に向き犬吠えてゐる雪催
冬風や鶉が片羽を広げ干す
冬山に入りていよいよ耳聡し
寒月や砂利を採りたる跡の穴
階段を軋ませて来て鬼やらふ
辞書閉ぢて辞書又開くめかり時

辞書

今や、私も夫も専ら電子辞書に頼っていて、めつたに紙の辞書を手に取るものがなくなつてしまつた。それでも本棚には大小様々な辞書や辞典が昔のままの位置に並んでいる。もう使うことがないと分かつているが、どうしても捨てられない。

表紙をセロテープで止めてある学生の頃に使つたもの、叔父が入学のお祝いを買つてくれた辞書もある。子供たちのためにと奮発したもの、殆んど使うこともなく、しばらく本箱にでんと飾つてあつた分厚い百科事典全巻セット等々。

どれもこれも次世代に引き継がれることなく、やがては処分されてしまうのかと思うとやるせない気持ちになる。しかし、それが大方の辞書というものの定めなのかもしれない。

忘れもしない平成十年の暮、それぞれに家庭を持つた子供たちに、何か記念になるプレゼントをしたいと思ひ立つた。

あれこれと品選びに迷つた末、帰りに寄つた丸善で決めたのは、「二十一世紀必携の一冊」と謳い文句のついた広辞苑(第五版)であつた。

日隈初美の俳句紀行（南小国町）

寒月

尾根尾根に放牛の群冬の山
極暖といふシャツを着て冬の山
ジクザグに牛の道あり冬の山
蛇神社祈願成就の初詣
寒月をきれいといふ子いとおしい
寒月の丸々として空蒼く
階段に差し込む日射し春近し

新なり

大晦日、元日は実家に集まるのが恒例。

今年は十人。父親は九十歳、その子七十歳、六十歳、六十二歳、その子の曾孫達。

この夜も深夜一時頃まで飲んで、話して、布団は部屋一杯敷いて、雑魚寝です。

元旦は、爺の「おめでとう」から始まります。

女性は大忙し。雑煮、持ち寄りの料理をお重に詰め合わせ、甘い物、酔の物、激辛等々。曾孫一人なので、皆の大サーブス。笑いもとって大賑わいです。今年のゲームは、阿弥陀クジ、お年玉あり、服あり、お菓子あり、楽しく過ごしました。

このような幸せが長く続きますように、健康でありますように、と祈った。

平田節子の俳句紀行（大分市）

久女の忌

歳月は急流のごと散紅葉
初詣人の流れについてゆく
冬の山久女の句碑を淋しゆうす
久女忌や情に流されまじくゐる
一途なる情といふもの久女の忌
炬燵の上に歳時記と電子辞書
寒満月光陰流れゆくままに

風邪に臥す

「インフルエンザではない」と医者の子から診断されたけど、こんなに長い風邪ひきは久しぶりであった。この十日残りくずくずして、ディサービスも句会もみんな休んでしまった。

その上、年末から年始にかけて大失敗をやらかした。年賀状が足りなくなつて刷り増した分が「平成二十九年元日」となっているのにあとで気が付いた。何枚かは修正したけれど、そのまま投函したものもあり、どなた様かに間違ひ年賀葉書が行ったか分からない。とにかくごめんなさい、とお断りするより方法がない。

年甲斐もなくという言葉があるが、逆に年をとるほどますます呆けたことをしてしまうことの方が多くなる。

そんな今年の幕開けであつたが、やつと風邪はぬけたようだ。

あんまり頓馬なことをしないで、ちゃんとした年でありますようにと、改めて祈る気持ちである。

一月三十日の「少年」の句会には、何とか参加させてもらいたいと思つている。

福田久子の俳句紀行（金沢市）

恵方道

逆光に嶺そそり立つ冬の山
冬風や海の魔物の転た寝か
引き始め辞書はタッチの電子辞書
元旦の祝肴や鱈子付け
犀星の詩碑に立ち寄る恵方道
手心や炊きあげ加減のあずき粥
湯気上るあんかけ蒸しの寒夕餉

鱈子付け

北陸路の冬ともなれば、雪雲が低く垂れ込め、陰気で晴々しない気候である。だが、この頃になると、蟹、鱈、鱈と日本海の幸に恵まれる。

鱈は、やや特有の臭味と身が硬くないので、お作りは昆布^メにして食する。昆布^メの昆布は幅広い山出し昆布を使う。母は手際よく鱈を捌き、お作り用の身を切り放し作りにして、米酢に浸した布で昆布の表面を軽くふき、鱈の切身作りを、その昆布の上に並べるくると巻き、紐で括り、一夜置いていた。子付けは、真子一本を丸のまま昆布で巻き、干瓢で五箇所位結わえ、蒸す。蒸上げた後、三糧の幅で輪切りにし、両端は子付け用、残りは真子の煮込み用とした。祝肴の一品として、白は真子で、紅は明太子でそれぞれほぐし、鱈の身をまぶす。紅白の鱈の子付けが出来上がる。母が嫁いだ時から一尾の鱈と真子、昆布が暮の三十日に届けられたそうだ。弟の一人が、白と紅の鱈を食べると、タラを二つ合わせてダラになると言い、片方の弟は成績が悪くなってもダラの子付けを食べさせられたからと言えばよい。弟達の会話で、元旦の福笑いともなった事を思い出す。因みに、田舎での「ダラ」は「ばか」の意味である。

藤井隼子の俳句紀行（大分市）

辞書繰れば

小春日の階段のぼり母訪ぬ
 雲間より冬日の洩れて庭照らす
 辞書繰れば若き日の跡冬日和
 冬日差す本棚の辞書セピア色
 冬の山夕日に包まれ今日終はる
 冬の夜や時の過ぎゆく音がする
 正月や母困む子等歳とりぬ

辞書『広辞苑』の七版が出版された。言葉は生き物、時代の流れと共に変容する。新しい言葉が加えられ十年ぶりの改訂だ。

わが家の『広辞苑』は第二版。本箱には若い頃お世話になった昭和の時代に出版された辞書が並んでいる。『岩波国語大辞典』（昭和三十八年版・西尾実編）、『ことわざ大辞典』（小学館・五十五年版）、『漢和大辞典』（学研・五十五年版・藤堂明保編）、『国語大辞典』（学研・六十二年版・金田一春彦・池田弥三郎編）、『国語辞典』（三省堂・五十八年版・金田一春彦・京助編）等々。編者も懐かしい人ばかりだ。あの頃は辞書も頭も使っていた。図書館にも通った。

この頃は分厚い辞書は引かず、手帳大の電子辞書を使用、電子辞書には何十冊もの辞書が収納されていて手軽で便利。しかし、あの頃味わったわくわくする好奇心も感慨も薄い。必要な所だけ見て、すぐ忘れてしまう。目もしよぼしよぼしてよく見えない。セピア色になった辞書を見ながら、若い頃の姿を思い出した。そして、「わくわくするあの気持ちを探さなくちゃ。残された時間は貴重だ」と思った。

本田 蟻の俳句紀行（大分市）

冬風

冬風や唐より僧の帰り来し
冬風や海道沿ひに漁夫の家
寒灯や辞書に象形文字おどる
頂に砦の跡や冬の山
寒月や足音響くガード下
和菓子舗の階段きしむ初句会
早梅や太宰治の家遣る

遠くなる故郷

私の故郷は国東である。そう聞いて良い所だとおっしゃってくれる人もいるが、若い時の私にとつては平凡なただの田舎だった。故郷を誇りに思えるようになったのはごく最近である。

母には姉妹が七人いる。その叔母達七人は国東半島一円に縁づいて家庭を持った。母は上から三番目である。盆などに祖父の家に行った時などには、叔母達や従妹達が大勢集いそれは賑やかであった。上から三人はすでにこの世の人でない。

母が亡くなってから故郷に帰る機会がだんだん少なくなっていく。母の七回忌までは足繁く帰り、生家に弟と泊ったりもしたが、そんなこともなくなった。

弟は跡取というのでそれなりに故郷との縁が続いている。妹は国東市長になった夫に従って国東に移り住んだので、私一人故郷と縁の薄い身になったような気がしてしまふ。

そんな時思い浮かぶのは、父母も祖父母もいて村に活気が溢れていた故郷の姿である。

布田尚子の俳句紀行（所沢市）

弾む如くに

冬風を頷ち漁船とカメラの目
弁解は一語で足らふ冬の山
割れば弾む如くに落ちぬ寒卵
松が枝に高し異端の寒の月
ちぎり絵の彩をちぎりて寒月夜
春夕焼らせん階段占有す
惜春の大辞典ならそれでよし

心の支え

今年八十歳になるママのことなのですけど…。
五十代半ばから六十五歳まで、介護の日々が続き
たらしい。出口の見えない日々はつらかつたらしい。
でも、その十日後に、六十六歳の誕生日を迎えた時
はさすがに淋しかったらしい。

それも束の間、法律的手続きとか、色々な問題に
直面し、解決するのに大分手間取ったらしい。

そして全部解決し、やっと自由な時間が持てたと
思ったら、すでに七十歳になっていたらしい。

それでも、今からでも遅くないと思ひ、いろいろ
な事に挑戦し、もちろん素敵なお友達との出会い、
この事が一番の幸運だったのかもしれない。

その時期に、ボクが同居し、手間をかけたみたい。
そして七十代は、あつという間に過ぎたけど、中身
の濃い、充実した日々だったと言っていた。

その中で一番心の支えになったのは、俳句を学ん
でいたことらしい。この先、ボクもママの心の支え
になれたらいいのだけど。

では又、

マルチーズの五郎でした。

堀 麦穂の俳句紀行 (三郷市)

霜夜

行き行きて訝がうれし冬の山
雪の日の夕べこゑなき団地かな
靴跡に蹂躪されし雪の庭
我が家への階段重し冬の月
辞書閉ぢる音をしづかに冬灯
宣告を祈る手に聴く霜夜かな
心中に冬凧と云ふ眺めあり

俳号

女性に多い自分の名前が苦手だった。最初は画数である。低学年の「かきかた」のノートのマス目に何度書き直しても「瑞穂」という漢字が収まらない。また時折教頭が代理で来て、点呼のとき「ほりば」と呼ぶのにも閉口した。当時の名簿は手書きだったから、姓と名がくっついて「堀端」と読み間違っていたらしい。

三学年のとき、自分の名前の由来を教室で発表するという宿題があった。そこで夕食のときに聞いてみると、冗談を真顔でいうことの多かった父は「こじきからもらったといいなさい」といった。えっ、こじき？ 一瞬、凍りつく私。しかし父はすぐに「それがいやなら日本書紀といえ」という。

あとで母に説明してもらって、翌日はそのように発表し、「太平洋戦争が始まって一週間目に生まれた私が、お米に食いはぐれないようにと付けてもらった名前です」と名乗ることができた。

俳号も中途半端な私が俳号「麦穂」に託した思いには七十六年の複雑な思いが横たわっている。「堀麦水」は江戸時代の俳人。「堀麦穂」はまだ路地裏から出てきて勝手に名乗りを上げたばかりの新参ではあるのだが……。

牧 一男の俳句紀行（大分市）

鹿の声

生徒退き寒三日月の校舎あり

辞書を引く薔薇といふ字の虚ろさに

冬風を心に念ひ手を振れる

我先に駆くる階段初稽古

聞きたけれ線刻絵画の鹿の声

インフルエンザ到頭先生にも及ぶ

年の瀬の合格祈願の手の響き

線刻絵画土器

十二月十二日から十五日までの四日間、大分県シルバー人材センター連合会主催の「遺跡発掘講習会」を受講した。

受講の最終目的は、シルバーでの遺跡発掘の仕事をする為であったが、私にとっても考古学の初歩を学ぶまたとない機会を得る事となった。会場の大分県立埋蔵文化財センターでは、時を同じくして「話題の資料展」が開かれていた。

この企画展で最も注目されていたのは、昨年度の玖珠町四日市遺跡の発掘調査で出土した、二つの線刻絵画土器の口縁部に各々描かれていた鹿と矢尻の絵であった。弥生時代後期のもものと見られるこれらの土器は、当時平野部から山間部へ拡大しつつあった稲作の豊穰を願う祭祀に使用されていたと推測される。又、角のまだ生えていない幼鹿と角のある成獣の牡の鹿の絵は、鹿の角が初夏に生え始め、秋口に完成し、春には角を落とすという生命力のサイクルを稲作にも願う求めたものであると聞いた。

角の尖りの数で鹿の年齢が解る事や、我々の祖先と鹿の関わり合いについても、この企画で教えられた。

牧野直樹の俳句紀行（大分市）

鹿児島紀行

象の足

冬風ぎて群れる鴉は嬉々として
車窓より魚のジャンプ冬の風
冬の山美しくあり怖さあり
冬の山地球は凍え縮みをり
着ぶくれて階段降りる象の足
看取りして黙して歩く寒の月
戊年や遠吠え鋭く寒の月

一月中旬に会議で鹿児島へ行ってきました。南国の鹿児島はこの日は寒くて雪のちらつく気候でした。桜島は雪化粧した真っ白な山肌を見せ、黒い噴煙を吐いていました。鹿児島には今まで何度か来たが雪の桜島は初めてでした。

今年には明治維新から百五十年ということであり、町中が大変な盛り上がりで熱気を感じました。大河ドラマ「西郷どん」も放映されてることもあるでしょう。

当日は午後からの会議のため、午前中に仙巖園を訪れました。島津家の別邸にあたるところで、本殿周辺から見た桜島と錦江湾の眺めは日本庭園とともにとても調和のとれた光景です。

また、仙巖園内にある反射炉遺構は三年前に世界遺産に登録されたそうです。近代日本の発展を支えた薩摩の歴史を肌で感じることができ、随所に日本近代化の軌跡をうかがうことができます。

幕末ファンならずとも惹きつけられるのは、ここに島津家の壮大な夢が詰まっているからでしょう。

松嶋民子の俳句紀行（松江市）

受験近し

竜の玉夢へ一步を踏み出せり
面談を待つ底冷えの廊下かな
冬風や母に遅れて駆け出す子
床屋へと父乗せてゆく年の暮
数へ日や母に頼まれ釘を打つ
階段に物置く癖や日脚伸び
受験近し辞書を枕にうたた寝す

夢あればこそ

怪我を乗り越え、大リーグという広い世界に旅立ってゆく大谷翔平選手。十二月二十六日の朝日新聞の写真は、札幌ドームでファンに挨拶している時のものだが、とてもいい顔をしている。日本人の前例がなければ自分が前例になればいい。二刀流で一番になるといふ夢を彼は決してあきらめない。又、応援している西武の源田選手が新人王になったので、私はとてもうれしくて、元気をもらった。

もうすぐ次女はセンター試験を受験する。彼女の夢は何だろう。具体的なことは今のところ聞いていない。それでは私の夢は何だろう。私には、妻、母、娘の三役の務め、学校の授業、俳句作家としての活動がある。どれも大事だし、バストを尽くしたい。そして、この地球の一人の人間として、この世から偏見や差別や戦争をなくしたい。それは今、直接的な行動には結びついていないけれど、この気持ちを日々の暮らしの中で持ち続けていなければ、心の奥に潜む感情が人を傷つける言動となって表われてしまうだろう。

二月末、自らの差別体験を語り、Mさんが次女の学校に来られる。私は体育館の保護者席で聴くつもりだ。Mさんは私の大切な友達である。

松田明子の俳句紀行（三郷市）

お茶

冬の山声も写真におさまりし
初詣テントのお茶の熱きこと
何もかも放り投げたる冬田かな
空つぼの郵便受けの冷たさよ
寒月や男三代三無口なり
時の間に寒月頭上に座りをり
新海苔の届く頃かな友思ふ

初詣

昔、初詣といえは越ヶ谷の久伊豆神社に行っていた。この神社は將軍の秀忠や家光が鴨狩をした時、参拝、休息をしたと言われており、埼玉県の天然記念物指定の樹齢二百年以上の藤の木が有名である。藤の見頃の時は観光バスも来ていた。よって初詣の時は混雑し、駐車場にたどり着くまで大変であった。が、ここ十年以上行っていない。身体が人混みを受け付けないようになったのも一因であるが、地元には神社仏閣が多いことに気が付いたのである。中川に添って彦成街道が走っているが、この街道には神社、寺が沢山ある。今年の初詣はその街道沿いの虚空蔵尊に行った。この寺には鰻の碑が建っている。伝説によると、昔堤防が決壊した時、流れてきた丸太につかまり、人々の命が助かったのであるが、丸太と思っていたものは、鰻が何匹も縄のように絡み合って太くなっていたのだった。虚空蔵菩薩が人々を救うために鰻を遣わしたのである。お参りの人もご近所がぼつぼつ。碑を読み、奥の小さな池を眺め、お守りを買ひ、何することもなくぼつと周りを眺めていると、テントにポットが用意されているのに気が付いた。そのお茶は今煎れたての様に濃く熱くて美味しかった。身体と心を温めてくれた。

松村勝美の俳句紀行（由布市）

元日の母

冬風の湾ゆつくりと船出かな
稜線のすつきり聳ゆ冬の山
除夜の鐘音なく里の老いにけり
使ひ込む辞書の手垢や年新た
新年や時の階段登る如
元日の卒寿の母が紅をさす
寒月の鋭き光地に注ぐ

暮れと正月

新しい年が明けた。頭を剃り、一年間伸ばした髭も剃り、心機一転決意新たに句作に励もうと誓う。例により、暮れの三日は大掃除、孫二人も手伝ってくれお餅搗き。妻と娘も加勢してくれ、お節作りに追われる。今年の出来はまずまず。大晦日は息子夫婦と弟の家族が集い、大宴会となる。友人に頂いた「獺祭」は殊の外美味い酒であった。今年、卒寿となる母も久しぶりに嬉しそうである。母が同じ事を繰り返すので、「大婆ちゃん、どうして同じ事を言うの」と四歳の孫。一同目が点になり、大笑い。息子の嫁と孫に「あんた誰かへ、こん子は誰の子かへ。名前は何かゆうの」と母が言うので、嫁は困り顔。偶に会う家族にとつては笑いのタネだが、これが二人になり、繰り返すを繰り返されるとストレスが溜まる。母はアルツハイマーではないが、高齢者の親を持つ人達の苦労がひしひしと伝わる。まさに老々介護である。まあ、あと十年、百歳までは生きて欲しい気もするが、私が八十歳まで生きられるかが問題である。

正月三日が過ぎ、母と猫と私の静かな暮しが始まる。薄化粧し、背を伸ばし、脚の達者な母の後を猫が何匹か付いてゆく。長閑な初春である。

松村れい子の俳句紀行（大分市）

月日

笹鳴

冬風や鳶は高みへ島日和
冬山家老いの足取り豊鎌と
笑ふたり時には泣きて年送る
街路樹やオブジェと化せり寒の月
病棟の窓は真四角寒の月
階段の長き手摺や寒見舞
笹鳴や今も主は病がち

月日が経つの早い事、一年は尚更だ。だからと言つて問題のない日はなく、笑つたり泣いたりといろいろなことが生じる。

一昨年よりメニエルか延々と続いている。床について寝連りをする。グラツとくる。起床時は体を起こして暫く目をとじていないと頭の中がめまい中なのだ。この表現はなつた人にしか分からない。

川柳に「加齢ですだけに払う初診料」を読んで大笑いした。先日、近所の内科の老先生も「上向きで剪定していたらグラツときてね」というので、「お仲間ですね」と笑い合つたことである。

体力がないことが原因と紙上で読み、早速ウォーキングを再開した。運動嫌いの私のこと、継続の難しさはよく分かっている。できるだけ高低差のある道を選び速歩で二十〜三十分。なぜ速歩かというと早く家に帰りたいからだ。夏場からはじめて晩秋の頃からめまいの頻度が減つてき、思い切つて遠出のバスツアーに続いて、近場のツアーに二回参加した。気持ちの切り替えが効を奏したと報告をしたいところだが、完治はしていない。多分、老化の速度に体力が追いつかないのだろう。行雲流水。一歩前進二歩後退。

御沓加壽の俳句紀行（三郷市）

寒の月

この寒さ耐へて芽吹きを待つ
友 呉し 辛子 大根 大涙
落葉掃き芽吹きを描きつつ
冬の凧釣り糸見つつ微睡みぬ
出番なき本箱の辞書日向ぼこ
ヤッホーも凍てつくやうな冬
階段の上で気づきし寒の月

削ぎ落とす

スマホの契約期限が過ぎたので新しい機種に替えた。ところが電話帖の移植がうまくいっていない。完全な復活をしたいと思います。が考え直した。

丹念に調べてみると殆ど使われていない電話番号が結構入っている。この際思い切って整理することにした。

妻に先立たれて三年目になる。意気消沈していた当初、ある方から「ひとり住まいは人間の原点ですから、工夫がたのしいと思いますよ」と言われた。こんな状況の時によくぞ言えたものだと思ったが、今では感謝している。あるがままを全て受入れ、一人で生きようと思ったとき道は開けてきた。その一つが削ぎ落とすことであつた。

俳句塾では腸詰俳句を辞め、核心部分を抜き出し、思いを込めて十七文字で表現しなさいと常々言われている。

「言うは易く行は難し」のテーマであるが、継続することによってしか身に付かないと思うとき、この過程も存分に楽しもうと自らに言い聞かせる。

水野幸子の俳句紀行（岡崎市）

姫の島

冬風や手毬のやうな姫の島
師に見えて父にも見ゆる寒の月
冬山の奥に民話のやうな村
早春の階段 一歩 一歩 づつ
立春の電子辞書より愛の文字
やさしさの集まつてゐる福寿草
久女忌の一輪ふふむ寒の梅

幸せの苦しみ

昨年の十月二十九日、スーパーマーケットに買い物に行く途中に「ぎくり」と腰に激痛が走った。一瞬ふらりとしたもののすぐに治まり、無事買い物を買済ませる事ができた。午後からは入院中の夫の外泊の迎えに、そのまま理髪店に寄り、自宅に帰ったのは午後五時過ぎであった。

その夜は、娘家族との会食を賑やかに楽しむことができた。次の日の三十日、夫を病院に送り届けた夜、また腰の激痛に襲われる。倉敷に住む看護士の娘に相談すると、「ぎっくり腰かも」との返事。二、三日痛み止めを飲み、様子を見ることにしたが、一向に良くならないので、一月五日、病院で診てもらうと骨折とのこと。当分痛み止めの薬で様子を見るしかこれと言った治療はないらしい。やれやれ……。何とか歩けるが寝起きが辛い。「地獄の苦しみです」と娘に言う、「お正月から地獄と言わないうで」と笑う。私も「そうね、幸せの苦しみね」と軽く受け流す。

近くに住む二人の娘達が何度もきてくれ世話をしてくれる。家族の優しさに支えられ、心だけは元氣。やっばり幸せの苦しみ、もう一歩踏み出したいので、前に進むだけ。明日は明日の風が吹く、頑張ろう……。

溝口 直の俳句紀行（大分市）

冬の山

冬風やこの一年を振り返る

雪景色しばらく走り消えにけり

冬の山動ぜぬ姿見習ひたし

階段はリハビリテーション年を越す

寒月や黄褐色の皆既蝕

春の風邪気のすすまねば言ひ訳に

辞書をひくよりパソコンの二月尽

ギター専用

ギター専用というとはギター専用アンプを連想するだろう。もともとギターは音が小さく、広い会場などでは聞こえにくい。それに専用アンプで電気を通すと物凄い音の広がりを見せる。これが出来てロックが可能になり、エレキギターで瞬く間に普及した。しかし電気を通さないクラシックギターの音は繊細で昔のまま。CDなどステレオ装置を通すと、それだけで繊細さが失われてしまう。

先日、寝室の音響装置をちよつとグレードアップしたら驚いた。安物のスピーカーなのだが（寝室用）、ナルシソ・イエペスの「禁じられた遊び」をかけた途端、頭の上で誰かが本物のギターを弾いているような音がした。このスピーカーのエンクロージャー（外箱）は、ギターの素材を使っているのだ。音楽はギターだけではないから、今までは色々なCDをかけてわからなかったが、ギターになったら、箱もろともギターの音響版になって、その響きを忠実に再現してくれる。びつくりした。これからはこのスピーカーはギター（クラシック）専用としよう。贅沢だがそうすることがこのスピーカーも喜んでくれると思う。クラシックギター専用スピーカーなど新発見だが、ギター好きの人には絶対いいと思う。

村山邦保の俳句紀行（三郷市）

辞書を枕に

冬風に船跡走る月明かり
寒月に犬もくしやみし急ぎ足
しずかさや落雪一つふゆの山
寺階段主待つ犬か日向ぼこ
作句飽き辞書を枕の炬燵かな
裸木の枝先宿る蕾かな
大根引すずめ覗くやチドリ穴

野菜の種Ⅱ

昔の農家は野菜から種を採って蒔き親と変わらぬ野菜を作った。これが固定品種。現在も「京野菜」などの伝統がある個性を持った野菜として強く根付いている。固定品種の二つを掛け合わせると出来る種は「一代交配種」となり、両親の優性のほうが現れ、劣性の性質は現れない雑種強勢と言う。

殆どの場合両親よりも丈夫で品質も良く、成長も均一なので栽培計画が立てやすく農家には都合が良く「一代交配種」を使うように成った。現在、スーパーマーケットなどで販売されている野菜は殆ど「一代交配種」で栽培された野菜で、色形は良いが味も均一的で昔ながらの味、おいしさの欠如と感ずるのは私だけだろうか。「一代交配種」は海外の種苗会社が研究を重ね開発したものでいろいろの特許関係とか管理がうるさいそうだ。

種を牛耳られている日本としては大きな問題を抱えていると考える。それでは、交配種はどうやって作るか、植物の場合花の中に雄蕊と雌蕊があり、交配するには開花前に雄蕊を取り除き、開花後交配相手の花粉を雌蕊柱頭につけ受粉させる。

品種間の交配による一代雑種の雑種強勢を利用した品種改良あり問題無いように思われるが、その交配に気になる問題がある。その問題は次回にて。

宮川洋子の俳句紀行（飯能市）

初句会

電子辞書ジャンプジャンプ冬の夜
電子辞書一緒に眠る冬の夜
作業着を洗濯しをり大晦日
初刷の片手で持てぬ重さかな
選の数一つ増やして初句会
亡き人と近づくための寒の月
こんなにも早く来しとは古稀の春

路線バス

一月中旬、バス停で、六、七人がバスを待っていた。七分位待って、バスは定刻に来た。バスのドアが開く前、運転手さんからの声が届いた。

「寒い中、お待たせしました」

バスは定刻に来ているのである。運転手さんの思いやり、丁寧さを感じた。定刻に来たバスで、このような言葉を聞いたのは初めてであった。遅れて来たバスで、「お待たせしました」の言葉を聞く事はあるものの。運転手さんは、バス停に着く度、同じ言葉をおっしゃった。信号の全てで、左手を使った指差し確認をされた。

終点の駅に近づく、「最近、車内での転倒事故が多くなっております。完全に停車するまで、席を立たれないようお願いします」と放送された。

このような車内放送はいつももあるのだが、電車への乗り換えの人が多くいるバスである。早目に席を立つ人が多くあるのだが、その時は早く席を立つ人は一人もいなかった。運転手さんの名前を確認した。年齢は二十歳位の人と思われた。真心のこもった仕事をされる若い人のおられる事を嬉しく、あつたかく思った朝であった。

宮崎敬介の俳句紀行（京都市）

月の時雨

青春を荒野に残し辞書初め
日矢を分けあふ冬の山日本海
冬風や梢は空を支へあふ
忌を修す日のあと月の時雨かな
階段をカンカン登る寒夕焼
一点離さぬ獣の眸寒の月
たましひの億光年の星冴ゆる

静寂の時間

「樹木の梢が空に拡げている空間には、樹の感情がかくされている。冬の空の澄み切った重みを、梢々の空間がしんと支えているのがみえてくる、（略）山の人生とその時間を歌わんとすれば、わが宇宙論としての定型が、神韻縹渺として木の間にただよう」「わが歌よ、死者の打つ木魂のように空を走れ！」（前登志夫『存在の秋』）

聖樹・糸杉の柔らかな、発光する紅葉。山科疎水の山の端で、牡鹿が一声啼いた晩秋の朝。

そして今歳の冬。敏捷な風の双眸のように、寒星さざめくソウルメイトの瞳よ。宇宙樹に縁を結ぶ君に出会えたことは、今世の喜びである。

寒極まって降雪の日々、積雪の日々。その後の雪晴れの清晨。これよりの大寒の日々の扉という扉が一挙に解き放たれたかのようなその明るさと、幽かな潤いの気に、早春の予兆をみた。

できうれば、「静寂の時間」を持ち、「凡事徹底」の一步一步を歩むこと。冬のくらしの向こうに「清冽な湧水」をみつめる。そんな日がやってくることを希っている。

（「仏法真理」参考）

光山治代の俳句紀行（岡崎市）

ひと声高く

冬風の島に魚釣る人の影
玻璃越しに流るる雲と寒の月
雪嶺のつづく道のり里の家
神鶏のひと声高く初茜
弾みきて首をかしげる初雀
階段をしかと踏みしめ年新た
辞書片手俳句作るも去年今年

フアイト、フアイト

年間契約でNHK俳句を購入している。一月号の本を取りに行った。家に帰りページをめくった。片山由美子選の巻頭の名句が掲載されている。その中に、稲田眸子先生の句があった。

初風呂や花束のごと吾子を抱き

が赤枠で目立っていた。思わずパチパチと拍手をした。

思えば、俳句を始めて十年経った。平成二十年の六月頃、「露」に入会した。六年目に入る前、倉田紘文先生との別れとなった。やさしい先生であった。その後、稲田眸子先生の「少年」に入会した。今までは自分の知っている季語で俳句を作っていた。

「少年」は兼題が七つもある。その中には季語でないものもある。それは使い慣れた言葉であり、日頃見ているものである。それらを使い、俳句を作るとなると難しい。頭を三十度に傾げている。滑稽な姿である。出来ない時は、発表された皆さんの俳句で教えてもらっている。四苦八苦の連続であるが、これがいい勉強だと思っている。漢字が少し読めるようになってうれしい。フアイト、フアイトと自分を励ましながら、句作りに頑張っている。

宮崎チクの俳句紀行（南小国町）

片言で

階段の手摺りに頼る寒さかな
寒月や見上げれば影動かざる
冬風や句会の窓辺日差し受く
リュック背に遠き思ひ出冬の山
短日の手許もどかしく豆を選る
片言で会釈の曾孫お年玉
散歩する小犬も赤いチャンチャンコ

体の続く限り

去年の花わらび句会が終わって、世話人さんに同行して来年の初句会の会場を下見したところ、感じの良い印象を受ける。早速、世話人さんのテキパキした行動で決めて帰る。

年明けて待ちに待った一月十五日。その日は約十名の参加。例年にならない大寒波の襲来で身も心も凍てつく思い。高齢者には一番の敵であり、心配していたが、なぜかその日は会場の庭園の木々の根雪も解けて、何とおだやかなこと。うきうき気分になった。句会が終わると、いよいよ宴会。小国の河津酒造の大先輩から戴いた新酒で乾杯。新年会らしく賑やかなことである。

和洋風のな心のこもった会席料理に舌鼓を打ち、満足、満足。皆さんと一緒に年を忘れてわいわい。幸せな気分であった。

花わらび句会が何時までも続く事を念じながら、身体が続く限り頑張ろうと自分を励ました。

宮本陸奥海の俳句紀行（柏市）

関東の冬々早春

関八州冬風ぎ続き松明けぬ

降り積む雪キシキシ確かめ一歩づつ

雑木林明るき山道正ちやん帽

雪国の友と別れて北斎展

沼に雪櫓舟の舳先雁掠め

冬夕焼け「影富士ここにも」佇つ階段

春雪に野の枯れ薄首折れて

柏からも影富士

昨秋、横浜で開催の東京湾大感謝祭に我が句会で出展の俳句パネルに次の句を応募した。（冬夕焼けこの富士北斎眺めしや）。これは、横浜港見学の折に貰った全天茜に染まる夕焼けにくつきり浮かぶ影富士がみなとみらいビル、赤レンガ倉庫、港内観光船等と写る横浜沖上空からの写真葉書を見ての発句で、冬晴れの多い関東平野特有の眺め。

私の住む柏市内にも富士見坂等の地名が残り、それを頼りに一ヶ所は十年程前、車中から昼間に、二ヶ所目は昨秋、遠出の散歩で影富士を見た。今月散歩で、夕焼けが綺麗そうなので、辺りで最も高台の団地を通るコースを選んだ折、自宅から数百mの外周道路から団地へ階段を登り、そこは西空が開け夕陽・夕焼けを楽しめるのだが、その日も正に沈もうとする夕陽を見て「ラッキー」と思いつつ、少し南に目を動かすと、何と、家並の影の向うに小さな影富士が見えるではないか！

最近「空の色が良くなった。空が澄んできた」との声が聞かれる。更に、官民連携の工場や車の排ガス規制、市民・事業所の省エネ等々により北斎の頃の空に戻れば、朝の赤富士、夕べの影富士を題材に住き絵や句が生まれるのではなからうか。

村田文雄の俳句紀行（三郷市）

雪

冬風の人工島に人の波
ラッセルが続く冬山登山道
雪晴れの樹木の辺り蒸気立つ
階段のあんよも上手初詣
寒月に無情の知らせ履ひ止め
回廊の階段巡る牡丹寺
辞書捲り歳時記捲る長き夜

バナナの叩き売り

寅さんの「男はつらいよ」第一作が始まる前年の昭和四十三年、帰宅途中の川崎駅前に人集りがあつた。覗いてみると、露天商がバナナが並べ、台を叩きながら話している。

「さあ、この房にバナナ何本あると思う。一、二、十三、十四、十四本ついているよ。ハイ千八百円、千五百円、千三百円、千三百円。給料貰ったばかりだろう。川崎は景気がいいんじゃないのか」と言つて声が掛からないバナナの房は展示台へ戻された。次に少し小さい房を出し「ハイ千五百円、千四百円、千三百円、千二百円、千円、千円」と反復。そして「九百」と言い掛けた時、事務員風の女性が素早く「買った」と声を掛けた。直後「九十八円」と言いながら台をバシッと叩いた。女性は洪顔で千円札を出し、釣りは受け取らなかつた。更に小ぶりの房が出た。「ハイ九百円、七百元、五百円、四百円、三百円、二百円」と一気に言い切つた時、私はすかさず「買った」と声を掛けた。露天商は「しまつた」という顔をしながら「兄ちゃん、ネクタイなんかして出世するよ」と言つた。当時は「このテキ屋さん見る目あるなあ」と思ったが、今振り返ると全く見る目は無かつた。

矢下丁夫の俳句紀行（東京都）

寒月

冬風や浜の小波に鳥遊ぶ

寒月や猫小走りで家に消ゆ

コツフェルのコーヒーの香や冬の山

先競ふ駅の階段年の暮

辞書頼み言葉選びて寒見舞ひ

熱の子の寝入りて寒の月清し

寒鴉独り厭はず遊びをり

冬風

俳句の夏の季語に「朝風」「夕風」がある。海岸地方の朝夕の風向きの転換する時間帯の、風が止まる状態をいうものだ。

冬風は、これとは発生の理屈が異なり、冬型の気圧配置が一時的に緩むことに伴う気象現象をいうらしい。してみると必ずしも海に限る必要はないようであるが、俳句の解説書によつては、冬風は海が風ぐ状態を指すと断るものもある。

最近、朝早く職場に出て仕事前に近場を散歩することになっている。東京に住んで嬉しく思う点は冬晴れが続くことであつて、空つ風が吹くことはあるものの、総じて天気は穏やかで、ほぼ毎日歩ける。職場が東京港の海面が見える位置にあるので、水際を歩くことが多いが、外界のうねりの入つてこない冬の東京港は風状態が続く。もつとも東京の前の海は、東京湾の湾奥の方にあるので一年を通じて静穏性が高いといえようが。

頬を刺す冷たい空気に触れながら冬風の海面を目にしつつ歩くと体も心もほかほかしてきていつも気持ちが一新される。

安武くに子の俳句紀行（小国町）

針供養

北窓を横に横にと枯葉過ぐ
チエーンソー上げる唸りや冬の山
マスクとり滝の階段口呼吸
冬風や亡母の忌に聞くエピソード
残雪の筵踏みしめ露天湯へ
待針の名のかしらもじ針供養
委託田となり耕しの始まりぬ

音読のすすめ

高齢者の介護予防クラブメニユーに音読がある。前年度は宮沢賢治の『よだかの星』、今年度は『ブレーメンの音楽隊』で、あと二回で完結となる。

他のメニユーは、脳トレ・ストレッチ、筋トレ等で、リーダーが分担する。音読もあるお口の体操を受け持つ事が多い。「オーバーな位に口を動かし、表情筋もゆるめると、若さも保てるそうですよ」とお声をかけると、「ワッハッハ」と大笑いし、力のある声で一緒に音読となる。

声と言えば、心の電話相談室をしていた従姉妹が「あなたの声は内にこもって聞きづらい」と、朗読講座を進められ、受けた事があった。鼻炎のせいではなかった。できる限り、うしろにも、耳の聞こえを不安がる方にも声は丁寧に届けたい。

認知症予防には、音読が一番という。一人暮らしはなおさらで、自宅では、熊本日日新聞の社説・新生活面に加えて、この頃では、眸子先生の『つれづれ百話』に取り組んでいる。今の私にとっても難解なところも、繰り返し返すことで少しずつ理解できればと思っている。

山口 修の俳句紀行 (三郷市)

皆坊主

赴任地へ立つ 駅頭の寒残月
朝日射す優しく見ゆる冬の山
雪女しよんぼり帰る過疎の村
冬風や大棧橋に舞ふテープ
下萌えや野球少年皆坊主
若草や杖なしで起つ老いの試歩
春風が回すふたりの観覧車

早春三月

昨年十二月から本年一月は、いわゆる風邪気味の症状が続き、最初は喉が痛く痰切れが悪い状態が、難聴、食欲不振、体調不良等の他、本欄では記述不適切な様々な症状が現れたため、耳鼻咽喉科、内科、休日診療病院に通う羽目となった。

一月中旬現在、一応、小康状態となったが、なお精密検査を受診予約している状況である。

なんとも憂鬱な状況であったが、これ全て寒さの所為と思つている。ともかく春の暖かさが待たれるのである。

三月ともなれば、江戸川の河川敷も、一面の枯野が黒く潤った大地となり、ぼつぼつと緑の芝が芽生えはじめ、岸边には葦が針のような芽を出して、まるで少年のいがぐり頭を見るようである。

春風がそよぎ、雲雀が囀り、子供ははしやぎ、若者は闊歩し、老人までもついつい浮かれて歩き出す。そんな日々を待ち続けるこの頃である。

山口慶子の俳句紀行（福岡市）

冬の月

奥山の炭焼の声 訝する
冬の月外壁工事長引きぬ
紙いっばい力いっばい筆始
じじばばを逆さに覚へ初笑ひ
初氷桶に柄杓の直立す
寒月や天主台だけ残る城
階段の二つある蔵春蚕飼ふ

薪とり

疎開していた熊本県の山村。西原という地域では、冬に千代字学生皆で薪とりに行っていた。

山に入ると下級生は落ち枝を集め、上級生は立ち枯れた木や倒木を伐り、丁度よい長さに整える。そして各自が背負える量を縄で括り、下級生に背負わせてくれる。二宮金次郎のような姿で並んで山道を下りる。女子の中心は「ヨッコちゃん」だった。

私より一つ年上の「ヨシロウちゃん」は大きな倒木をズルズル引きずって家まで持ち帰り、大人たちかせ大したもんだとほめられていた。

山の中で時折、「だれかく」という男声が響く。これは山の持ち主の「ムツオさん」だ。彼は小学生の頃から神童と言われた方だったが、戦地で心を病まれ、復員された時は普通の状態ではなかったという。山に籠もって炭焼きを生業としておられた。ムツオさんの山に人が入ると、大声で誰何される。大人たちには衆知のことであった。

薪を背負って帰ると、祖母がとても喜んだ。

あれから六十余年、ヨッコちゃん、ヨシロウちゃん、ムツオさんはどうしておられだろう。

山田洋子の俳句紀行（燕市）

冬風

冬風や羽根を十字に鶴の立てる
悔ひ一つ冬三日月の通夜帰り
冬山の坂の階段薬師堂
階段と廊下の散歩雪籠り
受験子の灯火辞書繰る音ひそか
甲矢乙矢翁命中弓始
妹と乗る初夢の豪華船

いもうと

「自分に厳しく！ 甘えちゃ駄目！」と妹の声。除雪作業で弱い膝が更に痛くなったとこぼす私に、そう言う妹は、リハビリの歩け歩けの最中だ。驚きだ。だって先日、旅行中に大尻餅をついて、腰の圧迫骨折で手術したばかり。

「今の医学は進んでいるのよ」と明るい声。私と二つ違いの妹は、越後を離れて上京し、美容師になった。私の結婚の時は、鬘合わせから着付け一式全部をとりしきってくれた仲。

昨年の夏、私の菩提寺の送り盆行事に帰省して、一緒に楽しみ、思い出の一枚にしようと、プロのカメラマンに二人並んで写真を撮ってもらった。その夜は宿に泊まって、アハハオホホとたわいもない話で、お腹が痛くなるまで笑い合った。

その二人の写真が実にいい。安らかな顔をしていて気に入ったので、卓上に飾って眺めている。帰宅して、「只今」「お帰り」と笑顔の写真が迎えてくれる。何故か、遺影の対話と少し違った感覚で、ほっこりあたたかくなる。

山本万象の俳句紀行（三郷市）

鮫

ジム終へる寒満月やすくむ首
獵銃を担いで入るや冬の山
友暮らす久慈の冬山今二人
シニア連ピツケル・アイゼン冬山行
冬風や無骨の指の直す網
風の海潜りし頭上鮫の群れ
冬風や軍船客船舫ふ島

今年は？

テレビ、新聞、雑誌。どれにも年初恒例の各界リーダー等の今年度予想のアンケートが組まれている。総じていえるのは、その人の立脚している仕事柄を反映している。其の業界にとつて「かくありたい」、「こうあつては欲しくない」の天秤の掛け方のようだ。

昨年でいえば、トランプ現象のとらえ方で左右されていた。多くは、トランプリスクとの見方。逆張りでもトランプチャンス。

高校時代の同期会の話題で、トランプ当選で、早々と株は整理したという者もいた。そこで、私。私は年金生活者・貯蓄を取り崩し細々と生活していく身。ということ、インフレ真つ平、デフレ歓迎。世の波乱、まして戦争などんでもない。危機を煽る人も大嫌い。ということになると、トランプは、リスク、まして、トランプさんへ媚び諂う輩。

ところが、オリンピック、東日本大震災の復興特需。そして日銀のヘリコプターマネー。うーん、逆張りか？と迷妄の世界に入っていく。テレビで、糸井重里が問われ、並いる社長を前に「俺にそんなアンケートするなよ」との名回答。ところで、世の俳人は如何？

鎗水稔子の俳句紀行（小国町）

寒月

ロビーよりぼんやり見てる冬の山
冬風の東京湾のゆりかもめ
寒月と寝台特急ふるさとへ
栗の実の落つるままなる廃居かな
熊の子の交通事故も夜話に
ペランダのカニサボテンの日向ぼこ
寄せ植えのパンジーの黄の鮮やかに

旅

「ななつ星 in 九州」列車の旅をテレビで見た。豪華なホテルのような個室、食事。到着駅では幼稚園児まで加えての熱烈な歓迎。見物する場所もガイドも、何故か普通の人とは区別されているような気がする。お金持ちの旅行って凄いなと思うと同時に、日本の平和を改めて感じた。

宝くじが当たったら乗ってみたいな。でもやっぱり普通の気儘な汽車の旅の方がいいかな。

小国に来たばかりの頃、正月は両親に会いたくて、今は廃線のローカル列車を乗り継ぎ、大分駅から夜八時頃の寝台特急「富士」に乗り、東京に帰った事を懐かしく思い出した。

小学生の長男は食堂車が大好きで、食べる事より物珍しさの方が先だった。

夜中、列車が停まると、何故か目覚め、カーテンの隙間から誰もいないホームを見る。発車。ゴトン、ゴトン……と鳴る枕木の音を聞いていると、又眠くなる。あの頃は若かった。今は「富士」も「さくら」も無くなった。

「ななつ星 in 九州」にも乗りたいが、もし叶ったら、昔、学生時代にしたような乗り降り自由な周遊券を使つての旅がもう一度してみたいと思った。

鷲塚靖子の俳句紀行（所沢市）

文字太く

木の葉髪かつら買おうか一思案
三食をアベカワシルコイソベ餅
最果ての冬風神の采配か
冬の山月をお供に神御座す
元旦や一番電話孫曾孫
新しき日記帳への文字太く
寒月や手術を迷ひ膝さする

兄の死

兄が死んだ

五歳年上の兄は享年八十歳そこそこであった
豪放磊落のように見えるが
神経細やかな優しい男であったと他人は皆口を揃
えて言う

死に顔は今まで見た事のない

別人の顔をしていた

偉くなつた兄なので構えて気負つていたのだろう
重い鎧も兜も脱いで重圧から解放たれて
さぞかし楽になつたのだろう

「ねえ、お兄さん！ 来世はもう社長業はいいで
しょよ！」

「競争と名誉と権力の世界は生きにくかつたでし
よ！」

少年の頃から医者になるのが夢だつたのに、実業
家になつたお兄さん

次の世は貴方の本当の夢をかなえて医者になつて、
命を見つめ助ける人になつて下さい

貴方には背広より白衣が似合います…サヨナラ！
サヨナラ！ 又そのうちあちらでね…

頬こけて肉そぎ落ちた軀には

兄の面影何もかも無く

阿部嶋尾の俳句紀行(横浜市)

松納め

冬風や沖ゆく船をただ眺む
寒月を仰ぎて町のパトロール
冬山や送電線の守り人
凧はもう時代遅れかドローン飛ぶ
エレベーター避けて階段年始め
石段にちとつまづきて初詣
願ふこと無病息災松納め

面影の街

♪新潟は面影の街♪ これは「新潟ブルース」の一節であるが、その新潟の地に二度のお勤めをしたのであった。最初は子供たちが学齢前であったので、田んぼの中の宿舎で、田植え、稲刈りの風景、歩いて行ける日本海での海水浴、信濃川の花火、佐渡への船旅、など親子四人結構楽しく暮らした。

しかし、二度目は単身で、しかも辞令は十二月一日、粉雪舞い散るところか、雪が降り積る中を新潟駅に降り立ったのであった。

用意された宿舎は、街の中の木造の戸建て、近所にコンビニとコインランドリーがあり、これに銭湯があれば生活オーケーなのだが銭湯はなく、旧式のガス風呂、前任者からの最大の注意事項は「火の用心」、風呂は休みの日の昼間限定、暖房は電気ストーブと炬燵に限る、であった。

二年余の単身生活は、よく働きよく飲んだ。裕次郎が亡くなつて、その追悼映画が古町通りの映画館で上映されて間もなく、単身から解放された。

あれから三十年、面影の街が懐かしく思い出されてくるのである。新潟駅、古町通り、新潟島周遊小道、万代橋とその下流側西詰袂にある新潟ブルースの歌碑などなど、是非とも訪ねなければならぬ。

荒木輝二の俳句紀行

眺ねる検査値

白息を吐きて階段息切れし
また一つ病名覚え冬の山
冬風や遠くの島を眺められ
酒少し検査値眺ねる寒の月
磐梯の麓ゴーと音たて雪解川
幾度マーク同じワードに受験かな
ブレイザーとストラックスとの入学式

ペットボトルの価格種々

街角の自販機で時々、缶コーヒーやペットボトルを買うが、場所により値段が違う。

さらに言えばスーパーで売られている同種類のものもつと安い。現に家の近くのクリーニング店の前の自販機ではミルクコーヒーの缶が九〇円なのに、公園の自販機では一〇円となっている。

インターネットで調べると、設置した家の主でありマージンにこだわらない人は、売れ行きを気にして安く設定しているらしい。元手割れは当然避けられている。

スーパーマーケットでは、大量仕入れによるメリットで価格は随分安い。また、大容量のものが売られている。

今、日本経済は消費低迷でアベノミクスも思うように進んでいない。

飯野亜矢子の俳句紀行（三郷市）

二人の釘

冬風の房総半島三時間
寒月や田園風景見馴れぬし
冬の山筑波二峰に友住まふ
寒風や敢へて階段駆け上る
古稀近し寒夜の辞書は手に持たぬ
掛け違ふ二人の釘去年今年
羽子板を求め手打ちの輪に入る

山岡英明さん

…
こんなに早く、山岡英明さんの計報が届くなんて
山岡さんとは、「少年」創刊二十周年祝賀会で、
久しぶりにお目にかかった。これまで、数度お会い
したが、楽しい人だと印象に残っている。あの大き
な身体で、いつものように元氣そうに見えたのに、
体調が悪かったなど思いもよらなかった。

祝賀会の懇親会で、山岡さんは「ばか面踊り」を
することになっていた。私は、十二歳年上で、六十
歳手前で亡くなった兄を偲びたいと思い、「踊って
いる姿をスマホで撮ってもよいですか」と聞いた。
「いいよ」と快くおっしゃってくれた。私は、撮っ
た写真を見ながら、兄を偲んだ。

兄は、毎年七月十五日開催されるお祭で、あのば
か面踊りを踊った。山車に揺られたり、御輿の上に
乗ったりしながら。横笛も上手で、周りの人達が涙
をながすほどまでに笑わせていた。

母だけは「もうやめてくれ」と止めに入っていた。
酒の入った身体は、くたくたしていたので怪我が心
配だったのだ。

五十嵐千恵子の俳句紀行（南砺市）

傍らに

ご無沙汰を詫ぶ冬山の父母の墓
炬燵して俳話と辞書を傍らに
冬風や名所に停まる旅列車
冬風や遙か立山連ね浮く
寒月を大いなる暈かこみけり
寒月や森に妖精出て来さう
埋もれたる非常階段吹雪く夜々

私の宝の辞書

平成二十九年十一月十四日、眸子先生が福野町の「糸瓜句会」に立ち寄って下さった。福野糸瓜句会は、梅島くいを会長として、市内の他の句会と交流しながら、月一回の割で行われています。

福野町の俳句の歴史は古く、虚子先生や素十先生も町を訪れ、俳句会を催されたそうです。素十先生をはじめ縁の俳人の句碑も建っています。

眸子先生は、安居寺の素十先生の句碑を訪ねられたり、梅島様宅に寄られたりして、お泊りになるホテルへ。初めてお会いする私はドキドキです。

「福野タウンホテル ア・ミュー」において、午後二時半より、俳句会が始まり、講話、食事会など。眸子先生から懇切丁寧なアドバイスをいただきながら和気藹々の一時でした。先生の温厚なお人柄、飽きのこない話の巧みさに、本当に素晴らしい機会を持たせていただきました。

また、ご縁があつて「眸子先生の俳話断章」つれづれ百話」をいただきました。思いもかけぬことに、うれしさもひとしお。透明なカバーを掛けて大切に持ち歩いております。「つれづれ百話」は私の宝であり、辞書です。ありがとうございます。

池田美智子の俳句紀行（三郷市）

元気の標

冬風に往き交ふ舟も一呼吸
カーテンを開き寒月澄むを観る
階段の上より眺む凍る町
年を越し私も後期高齢者
冬ざれや終活プランあれこれと
初雀ちちちちと福を呼ぶ
買物は元気の標し春の午後

ある日のスーパーマーケット

スーパーマーケットで買物をしていた時の事である。隣でピシャリと音がした。

顔をあげると、母親が子供の頭をはたいている。さつきから子供が、グニャグニャ、ブチブチと言いながら、肉のパックをつついていた。その事を怒っているのかと思ったが、母親曰く、「きたない！手が汚れるじゃないの！」と叱ったのみ。肉のパックを傷つけてしまった事には全くふれていなかった。母親は、子供を引きずるようにして何処かに消えて行った。

私なら、肉のパックを傷つけた事を怒り、そのパックを買うだろう！母親はそのパックを買わなかった。私もそのパックは買わなかった。きっとそのパックは売れ残るのだろう。

石塚未知の俳句紀行（三郷市）

未知なる国へ

階段を登る寒夜の音寂し
冬風の対馬海峡青深し
寒月や二人の刻を黙しゐる
冬の山眼下に島へ二人旅
辞書引いて未知なる国へ旅始め
頑なな一日柚子湯に浸かりけり
山路来て寒九の水を含みけり

節目節目の行事

その時代時代に行事の形態も変わるものである。思い起こせば、半世紀前は盆正月という言葉があるように、年の始まりである正月と先祖供養のお盆が、子供心に楽しみの行事であった。しかし、生活の形態変化と共に様変わりしたようである。

さて、年頭の長期休暇は職を持つ身にとつて又とない行楽のチャンスである。我も高齢ながら未だに現役の為、楽しみな遠出となれば、この時期しかないのである。北国はこの時期遠慮したいとか、なれば近場の温泉でと思えば、去年の思いがけぬトラブルが思い出されてパス、外国はもちろん無理となる。そのような訳で、今年には沖縄で一年の口切旅となった。

待望の離島巡りは、期待通りの鄙びた島々に大満足。思わぬダブルブッキングもあつたりして肝を潰したが、それも旅の思い出である。

今年も仕事と俳句を両立して、悔いのない一年になるよう精進したいと思う年頭である。

上田雅子の俳句紀行（三郷市）

自由とふたり

ベランダに自由とふたり日向ぼこ
貸し出しのスコップ並ぶ雪の朝
探梅や相模の海がよく晴れて
つぎつぎと売れる洋菓子春隣り
冬風や遠く七島かすみをり
ハーバーにヨット舫はる寒の風
冬の山白き魔物の棲めるかに

自由と不自由

夫の一周忌も過ぎたこの頃、家族のいる女友達から「自由でいいわね」と時々言われる。夕飯の支度で早く帰らなくてもいいし、お洋服も好きなだけ買えるし、という訳だ。確かに束縛のない生活は一見自由だ。まあ、不自由も山ほどあるが。

しかしこの自由がくせ者である。自由とだらしないのは紙一重。自由と貧乏も、自由と食べ過ぎも、自由と朝寝坊も、夜更かしもみな紙一重である。つまり紙一重の向こう側に行ってしまうように、自己管理をしっかりとしなければならぬ。これって案外不自由。

しかしまあこの不自由をクリアして初めて、本当に自由を楽しめると言う事である。

日々努力して、残された日々を自由君と仲良く暮らしていくとしよう。

梅島くにをの俳句紀行（南砺市）

俱利伽羅詣で

冬風や能登の漁火濃く淡く
冬風や遙かに太刀の峯延びて
寒月へ枝の鋭き庭木かな
落葉踏み俱利伽羅寺へ階峻し
冬風や男岩女岩と離れざる
稿継ぎのつまづきし時春の雷
春宵や句座の誰もが電子辞書

能登一周

日本地図を逆さにすると、能登半島や富山県が日本の中心に見えてくる。能登半島は小川が注いでいるのであろうか、小さなリアス式海岸のようだ。この半島は富山湾の真北へ伸びていて、海岸線が長く続く。夕方からは漁火が美しい。

春宵の漁火すでに一と並び くにを

和倉温泉の公園に建つ虚子先生の御ン句碑は、

家持の妻恋ひ舟か春の海 虚子

七尾湾に能登島が浮かび、北へすすむと軍艦島が碇泊しているようだ。

柳田村には、埋蔵物文化財センターがあり、一見の価値あり。外海を西へまわれば、松本清張さんの「ゼロの焦点」が映画化されたロケ地。さびしい村里だ。

千枚田はライトアップされ、夕方になると観光客が多くなる。「波の花」のとぶ曾々木海岸を抜け、輪島の朝市で財布の紐が弛むよ。

能登気多大社には「入らずの杜」があり、昭和天皇が目にとめられた草橋にて、巫女が冠に挿頭して舞はれるのが見ものだ。和倉温泉で四肢をのぼそう。

潮騒の能登一の宮 紅椿 くにを

永福倫子の俳句紀行（長崎市）

中島川と石橋群

冬風

冬風や夕月かかる桜島
噴く山と真青な空と冬の風
身ほとりに辞書ある暮し冬うらら
街師走核廃絶の署名せり
角力灘一望の丘寒夕焼
川畔冬安政と彫る常夜灯
寒月や薩摩切子の返す綺羅

長崎市の中心を流れる中島川と石橋群。昔は十四橋あったそうだが、度重なる洪水、殊に昭和五十七年の長崎大水害後、改修工事や築堰等で、川も橋もかなり様変わりしてしまった。

石橋は、当時の人々の生活を支え、寺町の各寺へと続く門前橋でもあった。最も有名なのは、興福寺の二代目住持・黙子如定（唐僧）が架設した眼鏡橋であろう。双円のアーチが川面に映る姿は美しい。

又、橋の名が床しい。例えば、側に阿弥陀堂があるので阿弥陀橋。遊郭を控え、編笠を被って遊客が渡ったので編笠橋。辺りに草が生い茂っていたので、原橋。僧・卜意が在留唐人達に寄付を募って架設、優雅なアーチと共に周辺の石畳等、昔の姿をそのまま残している桃溪橋等々。

中島川は、江戸と長崎を結ぶ架け橋でもあり、船の出入りも多かったので、荷揚げ場跡や川畔には大きな常夜灯等、まだまだ往事を偲ぶ事ができる。

今は、鯉、青鷺や白鷺、亀の甲羅干し等がよく見られ、絶好の散策コースでもある。先日、この川で初めて翡翠の飛翔を見てびっくり、感動した。

榎並万里の俳句紀行（立川市）

猫

受験子や辞書引く眼あせる指

冬の山切り立つフオッサマグナかな

コンビニにお遍路さんの鈴ひとつ

公園の入口に咲く木瓜の花

猫の恋出窓のこちらで空仰ぐ

犬駆ける土手の土筆を蹴散らして

潮干潟すべり入る穴小さき蟹

マイ猫

猫は可愛い。自分の家では飼えないが、実家の猫を筆頭に公園の猫、出張先の猫など、定期的に会う猫をマイ猫として心を癒やしている。

実家の華子さん（オス）は伸びると長い。最近はお窓で外ばかり眺めていて遊んでくれない。母から送られてくる写真も背中越しの横顔ちよつとだけ。お座敷の障子はバリバリ破られているのに、会いに行つたときはツンツンとしている。

日比谷公園の伊達政宗終焉の地が縄張りの黒猫はいつも眠そうな半眼だ。ずっとオスだと思つていたが、メスのようである。同じようなおばさんに可愛い名前前で呼ばれていた。

出張先で会う猫はのんびりさん。漁港の傍で本日の漁のおこぼれをもらつて昼寝している。観光客に写真を撮られても微動だにしない。名物のところどころ屋の網戸の向こうでは、妙に良い姿勢でお座りして何かを待っている。

十六年生きた犬があゝの世に往つて二年半。そろそろ、もふもふしたものが欲しくなつてきているが、大型ロボットか人型ロボットで、掃除もしてくれた方が良いと思う。猫型ロボットのドラえもんなら俳句も手伝ってもらえるかも。

太田 孝の俳句紀行（三郷市）

雛人形

ラブレター

冬風の海を見下ろし山静か
階段を寒風と子ら駆け抜ける
蠟梅を採す川辺のうららかな
大掃除辞書より落ちたラブレター
白球を見失ひたる残り雪
生垣の続く限りの落椿
雛祭人形五年出番待つ

長女の初節句に盛岡の義母から雛人形が届いた。当時、厚木の集合住宅団地にいた。箱包みを開けると、七段飾りの大きく立派な人形セットで、飾ると部屋をはみ出した。義母は、我が家の狭さを知らなかったのだ。

子供が三人になり、パブルの頃、宮代町の戸建て住宅を購入し引越した。駅から遠く広めの家であった。雛祭になると一階の居間に雛人形を飾って楽しんだが、準備や片付けが大変だった。

子供が大きくなると、内裏雛のみの親王飾りとし、右近の桜、左近の橘、ぼんぼりをピアノの上に飾ったので準備と片付けは簡単になった。

その後、子供が独立、二人になって東京に近い三郷のマンションに越してきた。家の広さは半分ほどになったので、荷物も半分ほどに整理してきたが、雛人形は持ってきた。

それから四年、雛人形は箱に入ったままタンスの上に置かれている。昨年、三女に女の赤ちゃんが誕生、今年は久しぶりに雛飾りするか思案中である。

大塚そうびの俳句紀行（福岡市）

俳人氣取り

冬風や長き髪持て少女佇つ
寒月や生ゴミ漁りゐる鴉
重き辞書棚に冬眠続きをり
冬の山標あらわになつてゐし
陽射し良き枝より先ずは散る紅葉
万両の揺れに風吹く事を知る
枯蓮の沼みて俳人氣取りかな

娘の来福

昨年十二月の初めに、東京の長女と孫娘が博多の我が家を訪れてくれた。とは言つても目的は他にあつたようだ。私らには耳慣れない、韓国のスター「東方神起」とかの追っかけなのだ。東京ドームのチケットが手に入らず、福岡ドームにまでやつて来たのだ。

数日前から分かつていた事なので、病人は預かつてもらい、迎える準備をと思つていたら、「お母さん、毎日疲れてるんだから何もしないで。ホテルも予約済みな、逆に、お母さんとランチは外でしようと思つているのよ」との連絡。

私はその言葉に甘える事にした。

めつたに一人で外出出来ない私なので、ランチのお店はよくわからない。そのようなこともあり、事前に調べていたらしく、孫娘はスマホを使いながら先へ先へと先導してくれるのだった。

博多駅周辺の数あるお店の中から、お寿司屋さんに案内してくれたのだった。

介護に手抜きがあつてはいけないと好きなお酒も断つていたのだが、娘のお酌で久しぶりに口にすることもできた。おいしかった、楽しかった。至福の一時に感謝である。

大平青葉の俳句紀行（三郷市）

記憶

乗り過ごし 駅寒月のクレーター
子どもには辞書持つ権利こたつ壇
冬山に付せんのかいた記憶あり
でこぼこに鍵の顔あり 懐手
老舗着のまま足早に札納む
大寒の「晩鐘」に似る車窓かな
湯気立ちて眉間に優しさ戻りくる

時間旅行

冬山と言えば、もう何年も行っていないスキー場を思い出す。平日に休みをとり、職場のお姉さんのような人の車に同僚も入れ三人で出掛けた。平日のスキー場、特に早朝は雪も良い上に空いていて、何の障害物もないゲレンデ一面を独り占め。サーっと一筆書きのように降りていくのは爽快なことだった。スキー場は当然ながら雪が降る。真っ白い世界にたった一人、視界全体が白という世界にぼつんと一人居ると、一瞬自分というものがよくわからなくなる。おまけにスピードカーから流れる音楽が昔のものだったりすると、本当に自分だけが世界から置いていかれてしまったような錯覚に陥るのである。

あの時のゲレンデ仲間も、各々今は別の遠方の町に住み、そこで基盤を作り生きている。

「色んなことがある人生だから、短い間でも笑顔で会えることがすっごく嬉しい」と、運転をしてくれた彼女は会えばいつも言う。

ゲレンデは過去のものとなり、冬山も縁遠くなつてしまったが、心の距離はさほど遠くもないことに安堵した。

かのアインシュタインに言わせれば、過去・現在・未来の区別など幻想なのだそうであるが。

奥寺郁子の俳句紀行（越谷市）

勇者

歌留多会読み手の声にとびし札

日向ぼこ手擦れの辞書とコーヒーと

階段に響く靴音霜降る夜

車窓から銀嶺の富士真正面

浅虫の冬風みつめ涙ぐむ

月凍つる夜廻りするはシルバーさん

氷壁を登りし勇者日の丸を

高岩寺

高岩寺は、四〇〇年前（慶長元年）、江戸湯島に開かれ、約六十年後下谷屏風坂に移る。

明治二十四年、区画整理のため、当地（北豊島郡巢鴨町）に移転、今日に至っている。御本尊はもとより靈験あらたかな「とげぬき地藏」として知られる延命地藏菩薩である。

正徳五年のある日、毛利家の女中が誤って口にくわえた針を飲み込んでしまった。苦しみがぐが、医者も手の施しようがなかった。

そこに西順が来て、「ここに地藏尊の御影がある。頂戴しなさい」と一枚を水で飲ませた。すると間もなく女中は腹中のものを吐き、その中に、飲み込んだ針が、地藏尊の御影を貫いて出てきたと「とげぬき地藏尊御縁起抄」に記されている。それを読んで、「まあ、すごい」と思わず、びっくり。もうかれこれ六十年位前の事である。

それから都内に住んでいたせいもあり、縁日の四のつく日は、お参りに行くようになった。

我が家の初詣は、もちろん、高岩寺さん。今年も正月二日、家族で行ってきた。今年一年、元気で楽しく過ごせましたように祈った。

奥土居淑子の俳句紀行（長崎市）

冬青空

寒月を突き産声の上がりけり
寒月や背の傾きを正したる
冬風やスナメリは群生しない
冬の間テレビ画面で観るばかり
冬ぬくし父の形見の大字典
ランナーに残る一周冬青空
古書店の跡は雑貨屋二月尽

田舎のバスは：

雪が降ってきた。今年二度めの雪である。

一度めの時は、一日雪に閉じ込められ、外出できなかった。わが家から国道まで、徒歩で七、八分、車で一、二分の道路の凍結が融けなかった。

今回はそこまではなさそうである。夫は仲間との新年会へバスで出かけた。そんな時、バス停までの送り迎えは私である。

夫も私も、外出は車に頼ってきた。しかし、二人とも高齢となった。免許証返上も直近の問題である。バスの上手な利用を考えねばならない。

とは言え、バスの運行状況は思わしくない。長崎市の中心街へは、およそ一時間に一本。国道を逆方向に佐世保方面へ向かうには、今まで一本で行けたのが、現在は途中二箇所で乗り換えねばならない。しかも結構な待ち時間を要する。

遠くを短時間で結ぶ高速道の陰で、小さな町や村の利便性が切り捨てられてゆく。子供の頃、「田舎のバスはおんぼろバスで……」とうたう歌があったが、たとえおんぼろでも、全国津々浦々、利用しやすい形でバスが走ってほしいものだ。

越智祥子の俳句紀行（越谷市）

椅子

夫と我障子張り終へテイタイム
張り替へし障子たつぷり日向かな
冬ぬくしバス停の椅子輝けり
忘年会カウンターには客ひとり
年の瀬の駅前広場閑古鳥
シヤキシヤキと霜柱なる朝の畑
寒晴れや椅子体操の暖かし

チェア体操

膝の痛みは和らいできたが、身体全体の筋肉が弱
つてきて、いろいろな所の違和感が日常生活の中で
感じるようになってきた。年齢の事もあるし、この
まま動きの悪い身体に固まってしまつて、一生送る
のかと思つたら、怖くなつてきた。

かと言つて前に十年も続けていたエアロビクスを
再開する自信はない。近所の友人に話したら、彼女
は民謡を習っているのだが、習っている八十歳代の
先輩達は皆元気で躍っているというのだ。彼女の話
を聞いて、動くのはやはり良さそうだと思つた。じ
やあどうすれば自分自身でも毎日ストレッチは行つ
ているが、それだけでは老化に負けてしまいそうで
不安なのである。（これとてもこわい）

今自分自身の行動範囲の中で考えてみると、近く
で仲間がいて、指導者がいる事が望ましい。十年程
前に、老人福祉センターでチェア体操をしていた事
を思い出した。椅子に座つての運動なので、高齢者
に適している。近所にある自治会館に今は椅子も揃
っているし、じゃあ、と先生の確認を取り、声をか
け合つて生徒集めをした。十二名でスタートし、六
ヶ月が過ぎた。私の身体も調子が良くなり、気分も
よくなり、希望も沸き、感謝。

落合青花の俳句紀行（大宰府市）

冬ざるる

冬風や猫ととんびと島人と
白帽子深々かぶり冬の山
冬ざるる石の階段続く寺
バラと松活けて迎えしお元日
「忙」と言ふ言葉貫く去年今年
神妙にさし出す両掌お年玉
寒月やしじま引き裂く救急車

六回目の「年女」

六回目の「年女」である今年の私。何か良い事がある年なのであるうかと思つてしまふが、年が明けて今日で十九日。今のところ何の変化もない。いつものと変わらぬ生活振りである。

そもそもこの「年男年女」って何。その起源とは、最初にこの「年男年女」なんて言い出したのは誰？と次々疑問が湧いてきた。手許の辞書を開いて見ると、「その年の干支（十二支）に生まれた男で、節分の豆まき役をする人。女の場合は年女」とただそれだけが記されているのみ。私を知りたいと思つた事は、この小さな国語辞典では何も解らない。解らないとなると、無性に知りたくなって来るのが私の癖。だからと言つて、図書館などに行つて調べるなんて事もしない、無精者の私。

ただ、日がな一日、（何なんだ、この年男年女って）と重たい荷物を背負い込んだように、「六回目の年女って嫌だね、十二×六は？ おお！ 嫌だ、嫌だ。年だけがこんなに重なって！」と一人意気消沈している今年の幕開け。果たしてどんな一年が待っているのだろう。

小野京子の俳句紀行（大分市）

居酒屋の昼下がり

辞書を抱きて

改定の辞書を抱きて冬の町
日当たれば動き始めし冬の山
寒月の下なる神の滝の音
孤高なるひとの横顔寒の月
杉の秀に寒月のぼる峡の村
階段をのぼれば春の雲遊ぶ
階段を下れば春の潮の香

久し振りに出会った友人と仕事を済ませ、冬の町を歩く。十一時過ぎだというのに道を行く人も少なく、重い雲が私達を見下ろしている。

「今日は、違うお店でお昼を…」という事になり、小さなドアを押し、店の中へ。

そこは居酒屋。居酒屋の昼。四角い小部屋の一隅には、古びたハンガーが五つ、所在なげにぶら下がっている。

自分が必要とする人も現れず、物憂げなそのハンガーを眺めながら、人生のある瞬間を思い出していた。

このハンガーにどんな上着が、どんなコートが掛けられたのであろうか。その服の持ち主はどんな人を送ってきたのであろうか。

人生の悲喜交々のドラマを垣間見ているそのハンガーに声をかけてみたいものだ。

「居酒屋のハンガー」をテーマに短文を綴ってみるのも面白いのではないか。

重い腰を上げてみようかと思ったりもする居酒屋の昼下がり…。

江村悠朗の俳句（所沢市）

松本城

束の間の冬風、海瀬戸の海
天守閣怪しくみせて寒の月
冬の山ただ黙然と立ちゐたり
階段の手摺凍てをり脚過重
冬の夜電池の切れし電子辞書
春の雪太郎次郎の屋根に降る
春の塵杜の都の堅き窓

佐藤一步の俳句（柳津町）

冬茜

極楽と障子一重の一雷音
老いの坂踏み外すまじ初氷
観音の裾に座禅の霜柱
生き延びし命の冥加冬の椅子
つぎはぎの縄文土器や冬茜
一語づつ菩薩に禱る初明り
雪溜めて遠き陽を待つ童子仏

中村沙佳の俳句（諏訪市）

湖氷る

野を走る電線越へる冬の風
冬の八ヶ岳娘のケータイに送りけり
寒月や遠き娘も見上げしか
階段の手摺に頼る上り下り
鴨遊ぶ今宵の宿は西山か
湖氷る観測の人足袋白し
梅東風や辞書をポツケに一巡り

平林益雄の俳句（越谷市）

二脚

指入れて確かむ厚さ初氷
小春日や妻とひと日の畑仕事
終の家二脚で足りて冬ぬくし
初春や選手ら来ると広報車
新春の胸突き上ぐる先導車
冬ざれや犬小屋空きて三年過ぐ
寒雷や大愚良寛蕩々と

虚子嫌いが読む虚子の歳時記(一二六)

後藤 章

上記の考察から私の考えは、(蛙 前号の続き) 天和元年か二年に江戸で「古池や蛙飛んだる水の音」の形の句が作られ、それはそのまま大阪に伝わり貞享三年三月に「庵桜」に掲載された。

芭蕉はこの後「野ざらし紀行」にでて、「冬の日」から「春の日」へ蕉風体へ変貌してゆく。貞享三年閏三月の芭蕉庵での「蛙合」で「古池や蛙飛び込む水の音」の形に変えて句会に出した。それが「蛙合」という出版物に残った。

このように考えると二つの句が作られた季節がいつであるかなんて関係ないことになる。少なくとも貞享三年の何月かを詮議することは無意味である。

I. 下記に若干の補足を書いておく。
この蛙はどのような蛙か。

トウキョウダルマガエルという説がある。この説は次の条件の下に推論された。①芭蕉が気がつくような「水の音」をさせた。②この条件からトウキョウダルマガエルの三候補が挙げられたが、関東に多いこととトウキョウダルマガエルである可能性が高いので、トウキョウダルマガエルがあの有名な蛙であると推論されたのである。

この蛙は大きな分類ではアカガエル科に属する。この科はかなりの数の種類に分かれていて区別がつきにくい。そこで蛙の世界をちよつと整理しておく、ひとつの分類として水辺に住むものと樹上にまで生活範囲を広めた蛙に分けることができる。このトウキョウダルマガエルはアカガエル科に属して水辺に住む。吸盤は無い。アカガエルといわれるだけあって色は土色で体格がいい。ニホンアカガエルという名の蛙もいる。

樹上にすむのはアマガエル科などで吸盤がある。こちらは体格的にはアカガエルより小さく、緑色をした蛙である。この科にはニホンアマガエルと沖縄方面にしかないハロウエルアマガエルの二種類しかない。でもよく見かける蛙である。

これだけを比べると古池にいたかえるはトウキョウウダルマガエルと断定したくなるが、この種のかえるは跳躍筋力などはあるがめつたに飛び込まないらしい。緊急避難のしかジャンプしないのである。だから古池の句のような閑寂の世界では水に飛び込まないと見たほうがよい。

一方、それではアマガエル系の蛙かというところ、これは樹上から飛び込むこともあるようだが、いかんせん体が小さすぎて音が聞こえた可能性に乏しいのである。それゆえ数匹の団体で飛び込めば音も感じられたかもしれない。しかしそれでは閑寂味が出てこない。ゆえにどちらも難点があつて決め手に掛けるのである。

代表してニホンアカガエルとニホンアマガ

エルを比べてみると大きさがまず違う。ニホンアカガエルは成体メスの平均五十四センチ、ニホンアマガエルは成体メスで平均三十五センチである。

次に大きな違いはその生態である。ニホンアカガエルは繁殖行動を日本に住む蛙で一番初めに始めて一月から三月にかけて行う。そしてまた暖かくなるまで眠るのである。一方ニホンアマガエルの繁殖行動は四月から七月である。この蛙は二度寝はしない。

このように蛙の生態の側面からこの句を見てみると、この二度寝するアカガエル系のニホンアカガエルがその主役として浮かび上がってくる。

要点をまとめると早春に繁殖のためいったん冬眠から覚めて活動する、大きな蛙なのでひよんなことで水に飛び込めば音がする点である。

しかしながら、ここに問題が生じる。文献的側面から見たこの句の作られた時期である。①古池や蛙飛んだる水の音

貞享三年正三月下旬「庵桜」一六八六年

グレゴリオ暦四月二十日 || 旧暦三月三十日
② 古池や蛙飛び込む水の音

貞享三年閏三月「蛙合」
グレゴリオ暦五月二一日

|| 旧暦閏三月二九日

③ 古池や蛙飛び込む水の音

貞享三年八月下旬「春の日」

④ 古池（山吹）や蛙飛び込む水の音

元禄五年「葛の松原」一六九二年

弥生も名残お（を）しき比にやありけむ、蛙の水に落る音ししばならねば、言外の風情この筋にうかびて、「蛙飛び込む水の音」といへる七五は得給へりけり。晋子が傍に待りて、「山吹」といふ五文字をかふ（う）むらしめむかとを、よづけ待るに、唯「古池」とはさだまりぬ。しばらく論レ之、山吹といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして実也。実は古今の貫道なればならし。

これらの文献により現在まで、この句の製作時期が論じられてきた。その中で志田義秀説が主流派であった。それは貞享の時代には

芭蕉と其角が同時に春に江戸にいた時期が無いとの理由から天和元年か二年だという説であり、「葛の松原」の記述を信用する立場において製作日時は三月下旬であるとした。

それに対して井本説は「庵庵」の出版時期を奥付の日時どおりと考える必要はなく、かなり遅れたと見ることができるとして、貞享三年三月上旬あるいは二月下旬製作を唱えている。また芭蕉の作風の変化から見てもこの時期が適当であるとしている。志田説は作風の点では若干弱い。

井本の説では二月下旬から三月上旬の時期に作られたとしている。これをグレゴリオ暦で記述すると、一六八六年二月下旬を二月二六日にしてみるとグレゴリオ暦では三月二〇日になる。そこから三月上旬（九日）はグレゴリオ暦四月一日頃までである。

志田説は三月末説である。すなわちグレゴリオ暦四月二〇日頃である。

☆井本説

二月下旬 三月・弥生上旬（旧暦）

(二月二十六日)(四月一日)(グレゴリオ暦)

☆志田説

三月・弥生下旬(旧暦)

(四月二〇日)(グレゴリオ暦)

ニホンアカガエルの繁殖時期(一月か三月)

ニホンアマガエルの繁殖時期(四月から七月)

山吹の開花時期(四月から五月)グレゴリオ

暦)山吹が咲いて蛙が繁殖時期になっているものはニホンアカガエルということになるが、古池の句が全体的に表している静かさから見れば、一月から三月頃までの春の兆しが見えてきた頃の古池の様子と見るべきである。そうすればニホンアカガエルが適当ということになる。

そもそも山吹云々の話は、支考の「葛の松原」から来ている。後付話ととつてもよいのではなからうか。

子規がこの句に春季が感じられないといっているのはその表れで、全体的には冬から春への移行期の古池のたたずまいがこの句の通

奏低音なのである。

和名…ニホンアカガエル

英名… Japanese Tree Frog

学名… *Hyla japonica* (「日本産のアマガエル」の意味)

分布…北海道、本州、四国、九州、佐渡島、隠岐、宍岐、対馬、大隅諸島、済州島、朝鮮、

バイカル湖から沿海州までのロシア、サハラ、中国北部

生息…平地や低山地の林、草原、生け垣などの低い木や草の上で生活をし、繁殖期は、四月から七月頃。卵は、浅い止水に産み、水に

浮いて草に付着する。

体長…成体オス二二〜三九(平均三一)ミリ
成体メス二二六〜四五(平均三五)ミリ

和名…ニホンアカガエル

英名… Japanese Brown Frog

学名… *Rana (Rana) japonica* (「日本産のア

マガエル」の意味)

分布…本州、四国、九州、隠岐、大隅諸島、

八丈島

生態：平地から丘陵地にかけて明るい森林、池沼、水田周辺の草むら、湿地等に住んでいます。繁殖は、本州に住む蛙の中で一番早く、一月から三月に行われます。そのため、結氷して死滅することがあります。産卵場所は、水の残った水田がもつとも普通ですが、その他湿地の水たまり等の止水が選ばれます。体長：成体オス・三四〜六三(平均四八)ミリ 成体メス・四二〜六七(平均五四)ミリ

ニホンアカガエル(日本赤蛙、学名*Rana japonica*)は、無尾目アカガエル科両生綱に分類されるカエルの一種。

分布：日本の本州から九州、中国の一部に分布。

形態：体長は三〜七・五センチ。体色は赤褐色で、背中の左右の黄色いすじが真つ直ぐ平色に通っている。オタマジャクシの背中には一対の黒斑がある。

生態：単独で生活。普段は草むらや森林、平地、丘陵地等の地上で暮らす。昆虫やクモ類

を食料とする。冬眠をするが、暖かいときは真冬も活動する。産卵は他のカエルより早く、一月から始まり、時には十二月でも産卵する。産卵数は五〇〇〜三〇〇〇卵ほど。産卵場所は水田(湿地)や湿地。繁殖期が終わると再び斜面林の落葉等に潜り、5月頃まで冬眠する。

【HP上の参考意見】

芭蕉が自分の最盛期の作品を、「古池や蛙飛びこむ水の音」としたことは、この本の中で明らかにされています。閑静な場所、恐らく決して大きくはない蛙の水に飛びこむ音が響く、わびを感じさせる名句とされています。しかし、これはまったくの幻想の一幕でしかないことは、嵐山氏の説明を待たなくてもありません。句を読んだのは江戸であれば、蛙の種類は限られます(アマガエル、シュレールゲルアマガエル、アズマヒキガエル、トウキョウダルマガエル、ヒキガエル、ツチガエル)。これらの蛙のどれひとつとして、自ら進んで水に飛び込む種類は、今でも東京地方には生息しません。飛び込むとすれば、人や

他の動物におどろいた場合だけで、ガサコソという音にあわてる蛙の水音では、この句の雰囲気は台無しです。 http://www.ccc-web.co.jp/column/midare/midare_index.html

ある先生が推理していた。

芭蕉自身は、蛙の種類について書き残してないので、「状況証拠」から推理をめぐらせていた。まず、(1)「飛び込んだとき、芭蕉の心をとらえるほどの「水の音」がしそうな「体格」をもち、(2)「古池に住んでいる」ところから、このカエルは三種類に絞られる。トノサマガエル、ダルマガエル、トウキヨウダルマガエルの三種である。このうち、トノサマガエルは、本州、四国、九州に広く分布し、ダルマガエルは瀬戸内地方から東海地方にかけて生息している。そしてトウキヨウダルマガエルは、トノサマガエルとダルマガエルの交雑種とみられ、特に関東地方多い種類だ。

最後の決め手は、この句が詠まれた場所だが、当時、芭蕉は江戸の深川に居を構え、近

くに古池があつたと伝えられている。ということは、その池が句の中の「古池」であればそこに飛び込んだのは、トウキヨウダルマガエルであつた確率もつとも高いといえる。このカエルはかなり大きい種類なので、古池に飛び込んだときには、さうとう派手な音がしたはずである。というものです。(納得)

我が青春の銀幕たち（七）

溝口 直

春の雨の中を

大学教授のメレデイス（フリリップ・ウェーバー）と妻のビリー（イングリッド・バグマン）は都会の喧騒を離れて、冬の休暇を田舎の山荘で過ごすことにした。

メレデイスは、一年かけてここで大学のテキストを執筆する予定である。しかし、妻のビリーは、田舎の生活を持って余っていた。夫が退屈まぎれにと、買ってきた二匹のヤギに喜んだビリーは、それを機会に野山に親しむようになった。そんな時、山荘の管理人ウイール（アンソニー・クイーン）がいつも色々教えてくれた。中年過ぎたメレデイス夫妻は、

もう性的関係もなく、夫は執筆に没頭、妻を顧みることもなかった。

逆に、ウイールも同じ年頃なのに、ビリーを女性として常に尊重してくれた。私はまだ女性、ビリーは、そんなウイールを快く思うのだった。二人は何時しか親しくなり、ウイールは彼女に愛を告白した。ウイールの妻は、その土地の遊びの卵割りゲームに熱中するだけで、男女の愛には無関心なたちだった。学問一筋の夫、夫に関心のない妻、二組の男女はお互いの存在を意識し始めた。

野山に遊び、ウイールと共に過ごす時間だけが楽しみのビリー、ウイールはいつも戸外でビリーと一緒にだった。しかしビリーとウイールは住む環境も習慣も全く違う世界だった。そのビリーもウイールに惹かれ始めた時、事件は起こった。

二人の行動を見ていたウイールの若い息子が、ビリーに手を出し始めたのである。怒ったウイールは止めようとして取っ組み合いになっただけで、息子は車に頭をぶっつけて死んで



ビリーは、天真爛漫なウィルに親しみを覚えるのだった。
 (ソニーDVD)

しまう。山荘に飽いたメレデイスはロンドン
 に帰るといふ。ビリーはただそれに従うほ
 かはなかった。
 これは、いわゆる不倫の関係である。ビ
 リーは夫に自分をどれだけ女性と認めてく
 ているか、それとなく探るシーンがある。見
 ていると哀しいシーンだ。一方、ウィルは赤
 裸々にビリーを愛する。それに引きずられ
 ている。いつまでも天真爛漫なウィル、常
 識的な夫メレデイス。ふたりの間でゆれる
 ビリー。中年の恋をしっかりと描いた佳作
 である。この実は、この映画は一九七〇
 年の作品。このとき、バーグマンは五十四
 歳、最後から四番目の作品である。ロッ
 セリーニスキヤンダルから復活してハリ
 ウッドに帰り咲いた五十六年より十四年
 も経っている。さすがにバーグマンも役柄
 も少なくなる。
 この映画も私は製作中から知ってはいた
 が、日本ではなかなか封切られず、その
 後もビデオ化もされず、私にとつてずっと
 幻の作品だったが、先日偶然ビデオ化を
 知り、ようやく見ることが出来た。

相手役のアンソニー・クイーンは、バーグマンとの相性も良く、五年前にも「訪れ」で共演している。(これもビデオ化されていない)

この「春の雨の中を」は、その題名のよう
に春の雨の中を歩く時のようにしつとりとし
た、そしてちよつと気の重いような感じのす
る佳作で、バーグマンも中年の哀しみを上手
に表現している。

なぜこの作品が日本では音もなく？ 公開
されたり、長くビデオ化されなかったのか理
解できないが、思えば当時、映画はどん底の
不況で、業者も地味な作品として消極的だっ
たのであろう。

バーグマンはこのすぐ後、オリエント急行
殺人事件で三度目のアカデミー賞をとって
いるが、むしろこの「春の雨の中を」の方に賞
をあげたいくらいだ。

続・京子の愛唱一〇〇句「癒し」(十九)

小野京子

歩み寄る虫に友来る冬日和

岸本尚毅

庭に来る雀たちに交じってみどり色の小柄でスリムなめじろの姿がある。動きは鋭角、直線的だ。

地面の餌を見つけると一直線に舞い下りて餌を啄む。物の気配を感じると一度地上近くの草花に下りて周囲を確かめ、餌に向かう。

近くに猫の姿があるのを承知の上のその大胆さに驚いている。それに比べて雀たちは用心深く、集団で下り、餌を啄む。

食事が終ると、鳥たちは木の枝で胸毛を光らせている。

ストーヴに椅子引きよせて読む書かな

杉田久女

曾野綾子の「人生の収穫」の中に「子どもの荒れる原因の一つに、家庭も世間も子どもに何一つとして生活の厳しさを味わわせないこだ」の一文がある。

昔の子どもは、自分の部屋の掃除は勿論、草取りや外掃除、店番などは当り前であった。

今の親は、子どもがいやがるとそれに屈服し何もさせない。親の弱さを見直すことが大切だと説く。「少しでも自分の存在が家族や社会に役立っている」という実感を抱かせることの大切さと思う。

雲を仰ぎて春林に遊ぶなり

前澤宏光

こころとてかたちあるもの春の雲

上田日差し

「意こころごと通すれば即ち傾蓋の遇ぐなり」という空海のことばがある。意味は「人が理解し合うというのは必ずしも長い時間をしてもなるものではなく、心が通じ合えばそれだけで旧知の仲のようにになれるもの」「傾蓋の遇」とは、「たまたま路で会って立ち話をする」とで、ちよつと話しただけで旧知のように親しくなれること」

親しみや友情を生むのは、何度出会ったか、どれだけ長く話したかではなく、どれだけ通じ合ったかなのだと言う。

今、県PTA新聞のコラム欄を担当させていただいている。私の経験から学んだことを中心に、子ども達の素晴らしさ、子ども達を取り巻く環境から見えてくる問題点を取り上げ、考えを述べさせていただいている。

その内容に共感してくださった編集部のお母様方が、コラム欄のタイトルの下地の色を毎回変えて読者にアピールして下さるのだと言う。「それが私達の感謝のしるしです」と語るお母様方に、只々感激！

このさくら人のこころの中へ散る

後藤比奈夫

庭の土がぼこぼこ盛り上がっている。猫か犬の足跡かと思いついて見ると、ふくらんだ土の下には霜柱の列が……。思わず掌にのせて見入っていると、「お早うございます」の元気な声。ふり返ると一年生の裕君とお父様。父親のマフラーを自慢げに風になびかせ登校中の裕君の笑顔に「気をつけて行っていらっしやい」と声を返す。二人の幸せそうなる姿に、霜柱たちも背伸びする。

結んで開いて手を打てば春

ふけとしこ

「『国語の授業とは』についての講演をいただきましたが、一番心に残ったのは、『国語は言葉だけを教える授業ではない』ということ。また『教育は常に揺れ動く』この言葉も重く受け止めました。教師の考えを子どもに教え込むのではなく、色々な教材、考え方に出会わせることで、子ども達の引き出しを沢山作り、色々な出方に対応できる力を持つ子どもにすることが大事だということを学びました……」

教育実習生のHさんの学びに感動……

代士子の万華鏡（七十二）

篠崎代士子

幸便

NHK俳句一月号、巻頭名句鑑賞に、

初風呂や花束のごと吾子を抱き

稲田眸子

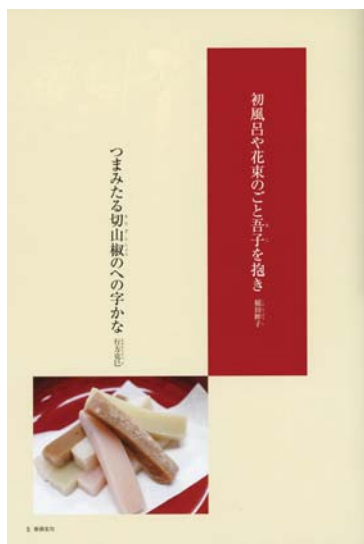
御句のご掲載のお知らせ、有難うございます。新春の名句として語り継がれる代表作は、青春の家族愛を詠った作者のお人柄が偲ばれる愛情あふれる一句とお見受けしました。

早速、「NHK俳句」一月号を求めました。又、「港湾空港タイムス」も同封いただき、ありがとうございます。「四季有情」に取り上げていただき、句評もいただき、御礼申し上げます。

又、少年大分句会での懇親会の写真も有難うございました。勝美さんと並んだ写真は、

シチリアのゴッドファーザーの一族のようだと大笑いしました。

初句会では、髭を剃ってさっぱりしたお顔でした。「少年大分句会」お出かけ下さいますようお願い申し上げます。



平成三十年一月のカレンダーより

元旦

今年のお正月はおだやかな晴天であった。暮れから、睦、康子、夏が年越に來ていた。年越蕎麦は「二八蕎麦」に頼んで、三十一日に打って貰った。夏は紅白を見てひとりで騒いでいる。祝箸の名前を書くのは、夏の仕事である。

雑煮は康子が見様見真似の筑前雑煮である。鰯に鶏に、野菜は大根、人参、里芋（昔は八頭）、椎茸、白菜、水菜、蒲鉾、そして丸餅をお椀にくつつかないように輪切りの大根の上に置く。

結婚当初、九州の「天こ盛」の雑煮に東京育ちの睦さんはびっくり。東京は「お清汁」に、鶏と三つ葉と餅の雑煮だそうだが、海の幸、山の幸に恵まれた九州の雑煮の味に馴染んでしまっている。

年酒は久保田の萬寿（濱田先生夫婦の金婚式のビンゴゲームで康子がゲットしたお酒）

である。

日本酒大好きな睦さんは大喜び。朝寝、朝酒、朝湯の小原庄助さんの正月を決め込んでいた。

睦一家は、初詣を竈八幡神社にその後出かけた。

昼下がりに、孝也、高史一家が賑やかにやってくる。

初日の出は拝めなかったが、今年の元日は晴天で暖かい。

曾孫の憲吾ちゃんと朱里ちゃんは、お年玉のシャボン玉とボールを蹴って、庭中大燥ぎに走り廻っている。

当節のシャボン玉は、石鹼水を溶いてストローで吹いた昔のシャボン玉と違い、一振りすると、テニスのボールやサッカーボールの大きなシャボン玉が日光にはじけて虹のようないかたりのシャボン玉。そのシャボン玉が庭中にあふれ舞い飛んで行った。大燥ぎした子供達を風呂場で遊ばした後、若者グループはカラオケに繰り出した。しばしの休息である。



元旦のシャボン玉遊び

夕食はホテルのおせち料理をメインに、中
トロの刺身とネギトロの手巻き寿司、雑煮の
残り等、ビール、シヤンパン（KRUG）、
日本酒（キス・オブ・ファイア）の酒盛りの
家族団欒のおだやかな正月であった。
今年も夏の成人式のお祝の年である。
大学に行った子も浪人の子も久し振りの顔
合せで、「成人式が部活の友達との顔合せで
もあるのよ」と、嬉しそうに早めに帰って行
った。
楽しくもあり、少し疲れた正月であった。



吉永さんのお天気雑学（八）

吉永泰祐

衛星の話 第四回

ひまわり五号の延命策

後継衛星の打ち上げに失敗した時点（平成十一年）でひまわり五号は運用開始（平成六年）から五年の設計寿命を経過していた。今後さらに新衛星を作ってそれを運用開始するまでの約五年間、運用を継続するのは困難であった。困難な要因の主なもの、軌道や姿勢の制御用に搭載している燃料の枯渇、観測場所を決めるために望遠鏡の前にある鏡を制御する装置の劣化、太陽電池パネルとバッテリーの老朽化である。

衛星を赤道上に静止させておくには時々姿

勢制御・軌道制御を行わねばならない。ひまわり五号の重量は本体三百十キログラム、打ち上げ時にロケットから切り離されて自力で静止軌道まで移動するための燃料が約三百五十キロ、軌道・姿勢制御用の燃料が約五十キロであった。この中の数キロは寿命の最後に静止位置を次の衛星に引き渡すために最後の燃料を振り絞って軌道外に投棄するためにとっておかねばならない。

残りの燃料が軌道や姿勢の制御用だが、設計寿命が切れた時点で残っていた燃料は約六キロ。このわずかに残っている燃料を大切に使うには一番燃料を食う軌道の南北制御（一回約二キロ）を止めなければならぬ。このためひまわり五号は東経百四十度の赤道上万六千キロの静止位置から徐々に南北に八の字の形にずれ始める。

衛星からの画像を受信するために利用者（日本以外ではハワイからインドまで約千局）はパラボラアンテナを衛星の方向に向けているのだが、その先にあるはずの衛星がずれて衛星画像が受信できなくなるのである。

最近打ち上げられた準天頂衛星「みちびき」はこの軌道のずれを積極的にくい復数の衛星のうち一つは常に日本の上空にあるようにしようというものである。(みちびきは非対称の八の字軌道)

次に鏡の制御にも問題が出てくる。衛星の話の一端で説明したように、地球の画像を毎時間撮影するために北極から南極までを二千五百ステップでカタカタと鏡を動かし、最後の南極の方向まで行ったときには次の観測に備えて一気に北極側に戻す必要がある。このような動きを毎時間五年間行ってきたので鏡の動きを制御する装置(図参照)では潤滑剤の偏りが発生し、一番南極側には潤滑剤の盛り上がりが出てきて、鏡を動かすボールベアリングがここに乗り上げて動かなくなる恐れのため、いつ装置が故障してもおかしくない状況となつた。

この回避策として豪州より南側の南氷洋の画像は撮影をあきらめざるを得なくなり、さらに平成十三年からは画像の欠ける範囲を徐々に拡大していった。最後には南半球の撮

影回数 を毎時間から三時間毎に減らさざるを得なくなつた。

太陽電池やバッテリーの劣化は過去の衛星の運用経験に照らして大丈夫のようであつた。衛星を製造した宇宙開発事業団と気象庁は毎月衛星の健康状態について打合せを行つてきており、事業団側からは「まだ大丈夫」という報告があつたが、気象庁としてはダメになる前に何らかの手を打つ必要があり、様々な選択肢について検討を重ねていた。

平成十三年六月に各国の気象庁長官が一堂に会する世界気象機関の総会がスイスのジュネーブであつた。長官が発する直前に長官室に呼ばれた。

長官「俺はこれから行くジュネーブで米国の長官に米国の静止気象衛星を貸してくれと頼んでくるからな」

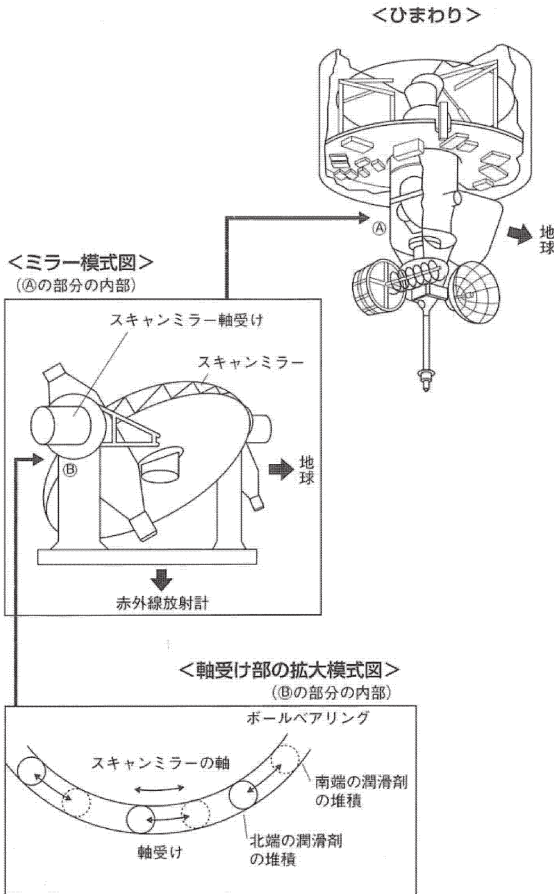
吉永「長官、それは事務レベルでの検討で無理と結論が出ています」

長官「俺は長官だ(好きなようにやらせてもらう)」

吉永「……」

ということ、米国の静止気象衛星ゴーズの軌道上予備機を借りてくることになった。「とんでもないことになってしまった。この先どうすればいいんだろー」

この先は次回。



南北方向をスキャン（走査）して観測するためのミラーは、ボールベアリングで支えられているが、このベアリングのボールが動くことで潤滑剤が剥がれ、ボールが移動する部分の両端に堆積してゆく。ボールがこの堆積部分に達しないようミラーの傾斜角度を制限し、堆積物が増えないようボールの移動回数も減らして、延命を図っている

自叙伝 「私は軍国少女」 (三十)

中嶋美知子

ロートエキス

今日は手術が二人連続で大忙しだ。院長が回診している間に、前準備をしていたんが、どうした事か、急に腹痛に襲われ、仕事に付かない。(この忙しい時に、何とか頑張らなきゃ)と我慢して動こうとするが、痛みが益々激しくなり、遂に屈み込んでしまった。

「鹿毛さん、どうしたん」

原田さんが心配気に声を掛けた。

「何だかさつきからお腹がきりきり痛くて、この忙しい時に済みません」

「まあ、そりゃ悪いね。どこ辺が」

「此処ん所、胃の下辺りが……」
「ひよつとしたら当たり物か知れんね」
「そう言いながら、葉棚から二瓶の粉薬を取り出し、乳鉢で調合し、葉包紙に包んで
「これ飲んで、よく効くよ」
と差し出した。

「どうも済みません」

有難く受け取って一気に飲むと、何と効果観面、五分と経たない中に痛みが止まった。(ああ助かった。お陰で仕事が出来るぞ。それにしても、この薬の効果の何と早い事。凄い薬だなあ)と驚きつつ、器具の消毒を始めようとすると、又しても、体に奇妙な現象が起きた。上半身が急に熱を帯び、顔が火照り、下半身ががくがくと震え始めた。(もしかしたら、先の薬の副作用では……)と疑念を抱き、先の薬、お陰で痛みはぴたっと止まったんですけど……何だか顔がかっかっかと熱くなつて、一寸変なんですけど……」
「あれはロートエキスで、痛み止めによく効くとよ」
「確かによく効いたんですけど、副作用は無

いんでしようか」

余りの急激な効力が、少々不安であった。

傍らで二人の様子を見ていた副院長が、心配気に首を傾けながら、

「今のロートエキス……」

「はい、そうですけど……」

「一寸量が多過ぎないか。あれは劇薬だから、量を間違えると大変だぞ」

（えっ、劇薬。ああ、私はもうお終いだな）

びつくり仰天。半ば諦めの境地になっていた。

「山崎病院に電話するから、直ぐ行きなさい」

副院長の心配りに従うしかない。事の重大さに、智子さんも落ち着かない様子で、

「私も一緒に付いて行ってあげよう」

「ああ、そうしなさい、一人じゃ危ない。急いだからいいよ」

副院長の温かい言葉で、大急ぎで山崎病院

へ向かった。山崎病院は、直ぐ近くの内科で、

豆田町では一番大きく、評判も上々である。

私はもう生きた心地は無く、

「もう駄目じゃろうね」

「何言よるね。大丈夫よ。そげん弱気にならんで。急ごうよ。手遅れになったら大変だから」

「もういいよ。このまま死んでも、何という事も無いし」

智子さんと歩いている中に、妙に気持ちが悪くなり、落ち着いて、死の恐怖より（ええ、どうにでもなれ）俎板の鯉のような開き直りの境地に

なっていた。病院に着くと、副院長の電話が先回りして

いて、直ちに診察室に通された。見るからに

品格があり、温厚そうな老紳士で、

「ああ、心配しなくて大丈夫ですよ。一回分の量を一日分にしようと、致死量ではない

ので。何しろロートエキスは劇薬だから、薬

にもなれば毒にもなりますからね。効能も早い

いが、副作用も激しく、色んな症状が出るから

ね。まあ、でも大した事じゃなくてよかったですね。下剤をあげますから、今直ぐ飲んで……」

院長は淡々と説明し、予め用意してあった

下剤を手渡した。液状の下剤を口中へ流し込

み、丁重にお礼を言つて、急いで待合室へ行くど、

「どうじゃった」

不安気な智子さん。

「どうやら死に損なつたみたい。量が一寸多かつたけど、生命には別状は無いって。下剤を飲んだから。心配掛けてご免ね」

「まあ、よかつたよ。本當にびっくりした。あんた、よつぽど運が強いね」

「そうね。もうてつきり死ぬと思うちよつたから」

「あんたのお母さんが守ってくれたんよ」

「私もそう思ったよ。それにしても、ロートエキスって恐ろしいね。まかり間違えれば生命取りだもんね」

「薬品の取り扱いには、余程気を付けんと」

「本當に。もう懲り懲りよ」

九死に一生を得たような気分て病院に帰り着くと、私の姿を見るなり、

「大した事じゃなくてよかつたよ」
皆、ほっとした表情で迎えてくれた。

「ご免ね。大変な間違いをして、危なく殺人者になるとこじやつた」

原田さんは真底申し訳なさそうに詫び入っている。

「まあ、そんな。あのお陰でお腹の痛みが直ぐ止まつたし、今こうしてびんぴんとしているんだから」

「そうよ。何も悪気でしたんじやないからね」

婦長の心遣いで、皆和やかな表情に戻つていた。

「兎に角、これを教訓に、薬品の取り扱いは慎重に慎重を重ね、細心の注意が必要だから、くれぐれも気を付けて」

院長の忠告を皆真剣に重く受け止めていた。この事件以来、私の脳裏にロートエキスの薬品名が焼き付いて、時折ふつと、九死に一生を得たような、死に損ない事件を思い出してしまう。

一枚の葉書

九月の初め、助産婦の免許取得の筆記試験が目前に迫り、皆が寝静まった後、智子さんと二人で猛勉強だ。有難い事には、出産に関しては、直接見習い体験をしているし、毎週の金曜日には、研修会で女性の生理に関する講義を受けているので、かなりの自信はあった。

「二人共、パスするといいね」

「うん、大丈夫と思うよ。実習もちゃんとしてるしね」

二人で励まし合つての勉強だから、張り合いが、昼間の疲れを忘れて、勉強に専念する事が出来た。

ところが、一週間程前になって、全く予期しない一枚の葉書が舞い込んできた。何とそれは、

「私の勤務している学校で、女教師が結婚の為中途退職して欠員になって困っている。直ぐ来て欲しい」

女学校時代の親友、玲ちゃんからの教員要

請であつた。女学校卒業式の後、民さんと三人で会話をした際、教員要請所への入所を頼りに誘つてくれた玲ちゃんからの嬉しい知らせだった。完全に断念していた教師への夢が一挙に呼び覚まされてしまった。待望のチャンスが降つて湧いたように到来したのだ。当天にも昇る心地であつた。助産婦の事等頭から吹っ飛んでしまった。

早速、智子さんに、
「ねえ、これ一寸読んで：」

直接言葉では言い辛くて、葉書を差し出すと、素早く目を通して、

「まあ、よかつたね。絶好のチャンスじゃない。あんなに希望しちよつたから」

「うん、でも：。あなたに悪い気がして：」
「そんな事にせんで。向こうから頼んで来るなんて、願つても無い事よ。このチャンス

を逃したら一生後悔するよ」

「そうよね。師範に行かんで教師になるなんて夢みたい」

「お母さんもきつと大喜びじゃろう。家の母だつて、おめでとうと言うじやろう」

「おばさんには一方ならずお世話になつて何とお礼を言つていいか。御恩は決して忘れません。宜しく言つてね」

「分かつた、分かつた。それはそうと、院長さんには……一寸言い辛かろう」

「そうなんよ。どう言つたらいいか。色々お世話になつてもう辞めるじゃ……。余り身勝手過ぎて……」

「でも言わん訳にはいかんじやろう。一生の大事な事じゃから、分かつてくれるじやろ」

「そうね。思い切つて言うしか無いね」

躊躇っている場合じゃないのだ。意を決して院長室に入った。

午前中の診察を終えた院長は、ソファに凭れて雑誌を読んでいた。突然入つて来た私を見て驚いた様子で、

「何だ、君か。何だね」

「あの……これを……女学校の時の友達ですが……」

おずおず葉書を差し出すと、文面に素早く目を通して、

「うくん、これは君の将来の問題だから、君

が決めるしか無いじやろう」

院長の返事は極めて簡潔で、私が教師の道を選んでゐる事をお見通しのようなのだ。

「色々とお世話になりました。勝手な事を申して済みません」

多くを言つても、結局は病院を去るのだから、顔向け出来ないような、後ろめたさで、そそくさと院長室を出た。

先輩達に事情を話して、別れの挨拶をする、免許取得を直前にして、病院を去る事は意外だったようだが、教師の道を選んだ決意の固い事を知つてか、引き留める事は無かつた。短期間とはいえ、懇意に接してくれた先輩達、漸く仕事に馴染んで来た病院を呆気なく去る事は心苦しくもあつたが、宿願の教職に就けると思つと、矢も楯も堪らず、宙を飛ばふ思いで、日田バス会社へと走つた。何時もの風呂敷包み一つ抱えて。

日田バス会社から、大山經由の杖立温泉行きに乗り、級友の待つ松原分教場へ向かつて出発だ。（どんな学校かな。山の分校……どんな子供達と会えるのかな）心はもう未知の

学校へと走っている。杖立温泉行きの木炭バスは、至って粗末な小型の乗合バスで、何とものろまな事か。大山川に沿って坂道を登り始めると民家は疎らとなり、青々とした杉木立が続く。大山の地名そのままの山又山のごろごろ道だ。二百十日を過ぎて間のない路面は泥んこ状態で、遅々として進まず、時折体が大揺れになる。ふつと、夏休みに帰省した時の伏木峠の情景が頭に浮かび、（そう、そう、あれから五年になるんだなあ。母さん、とうとう先生になれるよ。母さんのお陰で……）心の中で報告すると、（よう頑張ったね。よかった、よかった）喜色満面の笑顔が浮かび、涙がぐつと込み上げてきた。

当時のバスは悠長なもので、乗客が「止めてえ」と手を挙げれば何処でも乗車も下車も可能で、バス停は有つて無きが如し。従つていよいよ時間は超過するばかりで、もどかしなくて、歯痒い。車窓から全く民家が見えなくなり、こんな山の中に学校が有るのだろうか。と不審に思うような山峡に漸く松原の小さなバス停が見えて来た。

急いでバスを降りると、道路の下の方に、藁屋根の民家が五、六軒点在し、何処を見ても杉山と、広くもない田畑ばかりの山間僻地である。しかし、今の私にはそんな事はどうでもいい。早く学校へ。心急ぐままに、百メートル程小走りで行くと、道路下に鈎形の古めかしい校舎と、町の公園位の運動場が見えた。（あつ、あれが私の勤める分教場だ）胸を躍らせながら、坂を駆け下り、校舎へと走った。

新任式

玄関を探したが、それらしい所は見当たらない。校舎の左端の一室に事務機と、教員らしい姿が窓越しに見えたが、何処から入つていいのか戸惑つていると、
「まあ、鹿毛さん。どうぞ上がつて」
玲ちゃんが正面の硝子戸を開けて、スリッパを差し出した。どうやら此処が職員室らしく、事務機がコの字型に置かれている。正面が主任の席と見えて、中年の男性が私の方を見

ている。玄関等あろう筈もなく、出入口は木製の硝子戸で、上がり口には、長方形の切り石が二段重ねてあるだけの至ってお粗末な職員室である。

玲ちゃんは、応急措置として女学校内に設置された臨時教員要請所（六ヶ月）を出て、正式の教員免許を取得し、僅か一年余りだが、先生がすっかり板に付いているようだ。

「この人が同級生の鹿毛さんです」

「初めまして、未熟者ですが、どうぞよろしくお願い致します」

「あなたの事は松村先生から色々聞いちよります。ごげな小さな学校で、たった三人じゃけん、仲良うやっていきましよう」

「はい、何も分かりませんので、御指導をお願い致します」

「まあ、まあ、そげん固うならんで。授業はその中段々と馴れてくるけん。分らんとこは松村先生に尋ねて。それよりも、早速運動会の練習で、新任早々きつかるうが、頑張つて貰わんと。此処の運動会は、校区総ぐるみの一大行事で、父兄の方が余つ程熱が入つち

よるとじゃけん。はは、ははあ」と高笑い。

底抜けの豪快な話し振りに、緊張感が解れ、玲ちゃんと顔を見合わせて、思わず吹き出しってしまった。

主任は復員軍人らしく、詰衿の色褪せた国防色の服を着用しているが、軍人としての威厳は微塵も無く、庶民的で、ざつくばらんで、初対面とは思えない親近感を覚えて、ほっとしていた。

「校長には了解を得てあるから、今から新形式をしましょう」

「えっ、もう新形式ですか」

余りの事の早さに面食らってしまった。何の手續きも無く、いきなり新形式だなんて、夢のような不可解な心境であった。

「先生には一・二年生を担任して貰います」

「はあ、そうですか」

何気なく返事はしたものの（えっ、一年生いや二年生かな）怪訝に思つて首を傾げていると、

「こん学校は児童数が百人足らずで三学級。

教師も三人じゃから、一つの教室で二学年を指導する複式学級で……」

複式学級とは全くの初耳で、又しても、心の中に迷霧が漂い、不安に襲われた。

「初めての先生には荷が重かるうが、まあ、そう難しゅう考えんで、ぼつぼつやって下さい」

からからと笑う主任。当の私は（こりや大変な事になったぞ。一学年の担任でさえ不安なのに、二学年一緒だなんて）

雲を掴むような話に、教育経験の無い新米の私には大変なショックだった。

主任と話している間に、式の段取りを終えた玲ちゃんが、

「式の準備が出来ました」

主任に告げると、

「先生、どうぞ会場の方へ」

案内され、ついて行きながら、（さて、どんな挨拶を……）何も心の準備をしていなかっただけに、気持ちばかりが焦って、適切な言葉が浮かばない。（いよいよ生徒との対面だ。待望の教師としての第一歩。しっかりしなき

や）気を取り直して式場に入った。すると、待ってましたとばかり、子供達の視線が集中し、胸の鼓動が高鳴り、顔が急に紅潮してきた。

主任が演台に立ち、

「先日、田代先生が突然退職されて淋しくなっていました、今日新しくお迎えする事になった鹿毛先生です」

名前を言った途端、会場がざわめき、くすくすつと笑い声が入った。（ああ、鹿毛という奇妙な苗字だな）過去の経験から直ぐ察しが付いた。

「静かにして」

注意する玲子先生。

「鹿毛先生は松村先生と女学校の同級生です。一・二年生の受け持ちですから、先生の教えをよく聞いて、勉強にしっかり頑張らしましょう」

一旦教壇を下りると、私の方に向かって

「それでは、先生、御挨拶を」

改まって「先生」と呼ばれると、面映ゆい気持ちで壇上上がると、眼前に居並ぶ子供

達が真面に見えてきた。

(あれ、これが全校児童：内心びつくり) 女学校の一学級分程である。しかもその半数以上が、紺の半纏を羽織っている。想像以上に鄙びた山の子達であるが、女学校を出たばかりの新米教師でも、「先生」と呼んで貰えると、感慨一入であった。

「皆さんと一緒に勉強が出来るようになり、とても嬉しいです。初めてで分からない事ばかりですから、教えてね。よろしくお願いします」

咄嗟に考えた精一杯の挨拶だった。

新任式が終わり、職員室に入ると、早速主任から、

「一・二年生の出席簿です。早く名前を覚えて仲良くなる事ですね。まあ、二十人ばかりですから直ぐ覚えるでしょう」

「二十人ですか。新米の私でも何とかかなりそうですね」

「そうですね。此処の子は純朴で従順ですから、扱い易いけん」

主任の話の聞いている中に、(ああ、よか

った。小さな学校で) 肩の荷が幾分軽くなった。

「出席をとったら、簡単に話をして帰して下さい。職員会議をしますから」

「はい、分かりました」

(もう、職員会議…) 着任早々の新米が一人前に扱われていると思うと、嬉しくもあり、又、重荷を背負ったような気分であった。

さあ、待ちに待った教息子との対面だ。喜びと期待で胸を膨らませて教室に入ると、

「起立！」

張りのあるリーダーの声。思わず緊張感が走る。面映ゆい気持ちで教卓の前に立つと、

「礼！」

きびきびとした号令に、教師としての実感が沸々と湧いて、身の引き締まる思いである。それにしても何と殺風景な教室。薄汚れた染みだらけの壁。虫食いで穴だらけの床板。これが新入生の教室かと思うと、子供達が不憫に思えた。古びた机が縦に四列で、右二列に一年生が八人、左二列に十一人の二年生。合わせて十九人の複式学級であった。

「皆さんと一緒に勉強出来て、とても嬉しいです。皆で仲良くしましょうね」

努めて明るく、親しみを籠めて言った筈だが、子供達の反応は、

「はあい」

気の無い返事で、表情にも活気が無い。

「名前を呼ばれたら、元気よく返事をしてね」

「中野次郎君」

「はい」

内気な子なのか、小声で、直ぐ俯いてしまった。三番目の名前に、はたと困った。山田仁六（はて、にろく、又はじんろく……）一瞬戸惑ったが、「山田仁六君」と呼んでみた。すると、急に笑い声が教室中に広がった。

「先生、違う。にろくさんよ」

委員長の安志君が得意気に教えてくれた。

（あつ、しまった。悪い事をしたな）後悔しながら、

「仁六君ご免ね」

頭を撫で謝ると、仁六君は顔を真赤にしな

がらも、

「はい」

元気よく返事をしたので、ほっとしている
と、この失敗が子供達には受けたようで、皆
急に明るくなり、教室の中が和やかなムード
に一変していた。全員の名前を呼び終えて、
返事一つにも十人十色。個性があるんだなあ。
この個性を大事に生かせるだろうかと少々不
安になり、職責の重大さを痛感させられた。

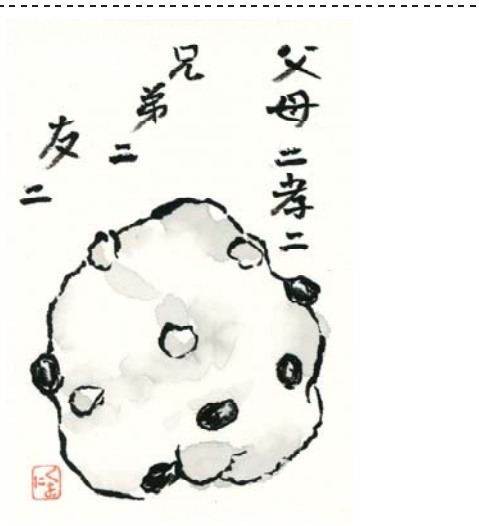
くにをの絵手紙紀行（二十四）

梅島くにを

十月三十日 御名御璽でお餅

父は、昭和初期に高利貸しから借金して大きな家を買って店を構えた。中庭に松と梅の大木があつて、庭師が来た。戦前はよく大雪が降つた。私は昭和六年に、離れ座敷で産声をあげたそうだ。梅島整髪院には三人の習いさんが住み込みで技能習得していた。旧世界大恐慌の憂き目で家を売り、一家は旧満州国へ渡つた。私は内地で進学のため、昭和十八年内地の祖母の家に寄留した。中学講義録（今も本棚にある）でガリ勉だった。十月三十日、国の旗日で、全校生徒が体操場に整列。奉安殿から御真影をステージ中央に。白手袋の校長は「教育に関して下し給へる勅語」の奉読。最後は明治二十三年十月三十日、御名御璽で教室ではお餅や饅頭を受ける。授業二時間で下校。

秋祭の父の実家へと汽車（現城端線）だ。従姉妹三人で遊ぶ間もなく、田圃の株切りだ。半円の刃付きの金具をつけた長靴を履き、四人肩組みながら田を歩く。夜、焼魚もらつて帰つた。



露の葉に思う

たかが一枚の露の葉で、俳誌「芹」昭和四十一年七月号には、高野素十先生は、倉田紘文先生の御句を巻頭に据えられている。

露の葉の大きくなりて重なりし 絃文
露の葉の大きくなりて傾きし 同

句評には、「露の葉の重なった句、又、露の葉の傾いた句ならいくらでもあるが『大きくなりて』という言葉がある」という。簡単に見過すことが出来ない。時間の経過またその姿が心に眼にひびき又現われる。『大きくなりて』は『大きな葉』というのと違って、大きくなつたが然しまだういさういさが、柔らかさが残っている。慈しみ、親しみ、愛しみとも見られるのが作者の心持でもあり、又力量でもある。このような健康な写生句が『芹』にあることは、選をする私として満足だし、誇りとも思う」と記されている。

今もなほ、素十、絃文両先生を終生の師と仰ぎ、ご遺徳を偲びつつ一文を書いた。



輝二の徒然読書ノート（十）

荒木輝二

五番町夕霧楼

水上 勉著 水上勉全集 第二卷

1. 読んだ理由

前回にしばらく水上ワールドを読んでみた
いと報告したが、今回は有名な「五番町夕霧
楼」を紹介する。

日本海側に育った著者がその自然をあます
所なく夕子に託し、描かれている。

2. あらすじ

主たる登場人物は、妓楼である夕霧楼の女
将のかつ枝、片桐夕子、くぬきだ正順、西陣
帯の間屋の主人の竹末甚造、関連する人々で

ある。

①片桐夕子（以下夕子）の生家は木樵を生業
とする子沢山の貧乏な家であった。

隣村で行われた樽泊の酒前伊作の葬儀の折
に、伊作の内縁の妻であるかつ枝に夕子と父
親の片桐三左衛門が来て、父親は夕子をかっ
枝にあづかつて欲しいと依頼した。

かつ枝は承知して京都の西陣の夕霧楼に連
れていく。

②昭和二十六年頃、五番町には京都人には
「ゴバンチョ」と早口で呼ばれる二百軒ほど
の妓楼があった。夕子はその中で「夕霧楼」
に行った。水揚げを蠟屑の竹末甚造に頼んだ。
一方、かつ枝は夕子の持参した柳製の手提
げの横に「鳳閣寺内 くぬきだ正順様」と書
いたはがきを見た。その時は夕子に何も聞か
なかった。

③昭和二十六年は朝鮮戦争が起きた翌年であ
り、九月には歴史的な日米講和条約が締結さ
れた。

夕子の水揚げ料金は二万円で、当時の若い

サラリーマンの五ヶ月分の給料に相当するものだった。

水揚げ後、甚造は「夕子は処女ではない」と言った。

④しばらくして、かつ枝は、夕子の売り上げの六分は夕子、四分はお帳場と決め、夕子も納得した。

そのうち夕子は自分から甚造の他にも客を取りたいといい、初めての客が正順であった。時間花か、泊かを帳場に報告後、時間花の客は九時前に帰って行った。

⑤そのうち、正順と甚造は偶然、鉢合わせになった。その折に、甚造は正順の顔を覗き見た。

⑥今出川の燈全寺で着物の展示会を行うことになり、準備に甚造は行ったとき、また正順に偶然会った。

⑦これを機に、甚造は正順に興味を持ち、鳳閣寺の小僧さんであることを知った。

かつ枝の知ることでなり、正順のことを詳しく夕子に問い詰めた。

夕子は「時間花とらはっても、あたいとげ

んつけはったことおへん」と主張した。

⑧そのうち夕子は肺病にかかり、東山の大病院に入院することになった。

かつ枝は鳳閣寺の正順に夕子のことを伝え、見舞いの事を懇望した。

その時、正順は「もうすんだ。安心せい」と夕子に言付けするように言った。その夜、鳳閣寺は炎上した。

⑨正順は裏の山の中腹で服毒、昏睡状態で発見された。

捜査本部に連行取り調べを受けた。動機は「虐げられた絶望感から美に対するねたみを抑えきれなかったためだ」と告白した。

醜い自分の性格と不自由な言語障害（どもり）の身体に対する自己嫌悪から美に対するねたみを押さえきれなかった。

署内で剃刀にの刃で頸動脈を切り自殺をはかった。

⑩それより先、正順の母親は山陰線から保津川に身を投げ自殺した。

⑪一方、夕子は病院を抜け出して、故郷である樽泊の子供ころ正順と遊んだ浄昌寺の墓地

の百日紅の根元で彼岸花の浴衣を着て睡眠薬自殺していた。

⑫父親の三左衛門が迎えに来て、背中あてに夕子をおぶって故郷に帰った。

3. 感じたこと

①水上勉はこうも薄幸な人を克明に描くのか。彼が経験上、見聞きしたこと、福井・京都の裏日本の情景。

②「飢餓海峡」の杉戸八重は殺されたこと、「はなれごぜおりん」はめくらゆえ生き延びたこと、正順は自殺・夕子は服毒自殺と殺人生き続けたこと、自死とまるで命の三部作。③めくら、どもりなど身体的ハンデのものを取り上げている。もちろん現在で差別用語であるが。

④水上氏が今、生存していたら現代の疾病についてどう思うだろうか。

四季有情（十） 稲田眸子

リハビリのまなざし遙か木々芽吹く

倉田洋子

脳梗塞で倒れが一命をとりとめ、
リハビリに励む父。青々とした葡萄
棚が一望できる病室だが：。「高齢
でリハビリの効果が上がりにくく、
帰宅がままならない義父の目に、美
しいはずの木の芽吹きや花の季節は
どのように写っていたらうか」と眩
く作者。

（港湾空港タイムス

平成二十八年三月七日より転載）

外輪山スクラム組んで笑ひけり

南 富美子

季語に「山笑ふ」がある。木々が
芽吹き始めた春の山は霞の中で笑っ
ているように、駘蕩として心が和む
もの。中津在住の作者が阿蘇の外輪
山を見渡しながら発した言葉が掲句。
「スクラム組んで」と擬人的に表現
することにより親しみの湧く句となっ
た。

（港湾空港タイムス

平成二十八年三月十四日より転載）

花嫁を迎える朝木の芽風

浅野明慧

婚家の門前は打水で清められ、幔幕を張り、高張り提灯を掲げて、家長、親戚一同が花嫁を迎えたものであったが、時代とともに婚礼も様変わりした。作者は、しまなみ海道の中央部、大三島にある万福寺の坊守様。眩しい木の芽風が婚家の朝を吹き包む。

(港湾空港タイムス

平成二十八年三月二十一日より転載)

蕨出て薇の出で母忙し

城戸杉生

度々襲った凶作と飢饉：その度に村人の胃袋を満たしたのが蕨や薇。夜になると狐が庭に出てくるといふ大塔村に住む作者の母上。俳句も嗜む才女であった。春の日差しに誘われ、裏山に蕨や薇が出てくる頃になると山菜とりに嬉々と出かけた母であった。

(港湾空港タイムス

平成二十八年三月二十八日より転載)

願ひはそつとたんぼぼのあるやうに

大平青葉

地中深く根を張り、荒地に花を咲かせるたんぼぼ。踏まれてもへこたれることなく、お日様や、雨水や、その身を運んでくれる風に感謝し、花を咲かせるたんぼぼ。たんぼぼの、「ぼぼ」の音は不思議な響きを奏でる。「願ひ」の措辞がその音に共鳴する。

(港湾空港タイムス)

平成二十八年四月四日より転載)

去年より小顔の多し白子干

橋本喜代志

「しらす」は漢字で「白子」と書く。語源は、釜茹でして浜に広げて干した状態が大岡裁きや遠山の金さんでお馴染みのお白州に似ているからだと言われている。その白州に並ぶ白子が去年より小顔になった、などと呟きながら、白子干場を覗くのも愉快。

(港湾空港タイムス)

平成二十八年二月十一日より転載)

九十の母すこやかに花菜漬

水野幸子

「花菜漬」は菜の花の蕾を漬けたもの。色合いもその味わいも素朴でバツグンな食感。色に乏しい冬の間、心待ちにしていた春の彩り。その季節の到来をまず告げるのが菜の花。「九十の母」も健やか、作者も健やか。今年もまた佳き春が迎えられそうだ。

(港湾空港タイムス

平成二十八年四月十八日より転載)

勝手口より田楽のお裾分け

西川青女

おでんのルーツは、拍子木形に切った豆腐に竹串を打って焼いた豆腐田楽。田楽とは豊穰祈願の楽舞田楽舞の事で、1本竿の竹馬に乗って踊る姿に似ていることから命名されたらしい。田楽は庶民の味。「勝手口」「お裾分け」の幹旋がその気配を伝える。

(港湾空港タイムス

平成二十八年四月二十五日より転載)

月花風声 (十)

稲田眸子

鬼やらひはな緒緩びて帰り来し

岩波千代美

〔評〕宮中では大晦日に、疫病を表わした鬼を桃弓、葦矢等で追い払い疫病除けをしていた。今に伝わり「鬼やらひ」となった。この句の眼目は「はな緒緩びて」。邪気が払われた心の姿とも解釈できそうだ。

温度計上下激しく春を待つ

清瀬 隆

〔評〕冬の厳しい寒さが少しずつ緩んできて、寒い日々の中に暖かい日を授かるようになる。と、「三寒四温」という言葉を聞く。その気配を作者は「温度計上下激しく」と表現した。その激しさは待春の情。

税理士の鞆の大きき二月かな

栗林多世子

〔評〕二月は、どの会計事務所でも年末調整や確定申告を集中して行う時期のため、一年の中で一番忙しいとされている。年度末を目前にした税理士は鞆の中に書類を詰め込み、颯爽と仕事をこなすのである。

老いて猶頑固さ消えぬ薄氷

西 正美

〔評〕悲しいことではあるが、年をとると、脳の軟化がおき、思考回路を膨らます事が難しくなる。その結果、自分の経験が絶対の物差しになり、頑固一徹となるのだ。儂い人生の中で生きぬくことは難しい。

涅槃会や人の世にある運不運

平田節子

〔評〕お釈迦様の最後の「説法は「自分自身を抛り所として生きなさい」と。その抛り所とする自分は、我見・我欲の自分ではなく、心が調えられた自分でなければならぬ。運不運に振り回されてはならない。

沓え返る日や暗殺のニュース読む

溝口 直

〔評〕北朝鮮の金正恩委員長の異母兄で、故金正日総書記の長男、正男氏がマレーシアで十三日午前に殺害されたと、メディアが報じた。その黒幕について様々な情報が錯綜している。まさに、沓え返る心地。

たらちねもかかる苦しみ越えにしか

愚痴の一つも聞きしことなき

切石文士

〔評〕朝から晩まで働いていた母。明るく負けん気の強い母は、愚痴一つこぼさず働く人で、元気に働く母が自慢であった。その姿は、自分を犠牲にしても子どものためにひたすら尽くす悲母のそれであった。

悔い少し残したる過去鳥雲に

市川和子

〔評〕悔いのない人生を過ごしたいと切に願う。しかし、悔いがつきもの。だからこそ、来し方を振り返り、行く末を思う。来し方を省みて「悔い少し」と呟く作者。北に帰っていく鳥達の姿を見守りながら。

春場所や小兵力士の高き塩

岩波千代美

〔評〕仕切の際の塩撒きは、土俵の邪気を払うため。大量の塩撒きで棧敷席から歓声を浴びているのが、十両の旭日松。掲句は、天まで届けとばかりに高く撒く小兵力士を詠んだ。躍動感を「小兵」で表現。

露の臺衣一枚脱ぐところ

栗林多世子

〔評〕落葉の隙間から露の臺が話しかけてくる。「冬の間は、落葉の布団の中でぬくぬくもう春だから起きようつと」。春の訪れを告げてくれる露の臺。その様を「衣一枚脱ぐところ」とはユニークな捉え方。

春なかば個室に残る冷気かな

西 正美

〔評〕知人が末期癌で入院。モルヒネを開始する少し前、個室に移動となった。余命は数えるほどしかないと告げられ、家族が泊り込んで看護した。その方はほどなく天国に召された。「冷気」は虚ろな寒さ。

一つづつ降ろす肩の荷春遅々と

平田節子

〔評〕「人の一生は重荷を負って遠き道をゆくが如し」とは家康公の遺訓。山岡荘八は、著『徳川家康』で「重荷が人をつくるのじやぞ。身軽足軽では人は出来ぬ」と記している。丁寧生きてきた作者の感慨。

ひとはみなおもふにまかせぬ春もあり

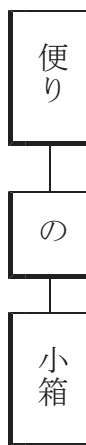
溝口直

〈評〉ごく僅かではあるが、思い通りの人生を送っている人がいるらしい。が、多くの方は「なぜなんだっ!」、そう心の中で叫びながら人生を過ごしてきた。「おもふにまかせぬ春」は「春愁ふ」の心模様。

職辞めて今憧れの日向ぼこ

山上靖史

〈評〉「退職したらあんなこともしたい、こんなことも」とリタイア後の生活に思いを馳せる作者。ゆったりと、頭の中を空っぽにして思い切り日向ぼこをしたい、そう願う作者。「今憧れの」の措辞が絶妙。



山岡英明様を偲ぶ

「少年」一月号、「山岡英明様を偲ぶ仲間達」を何度も拝見致しました。山岡様のご逝去、残念でなりません。

昨年五月、「少年創刊二十周年記念祝賀会」の会場ロビーに着いた時、まさにそこに、山岡様がどつしりと坐っておられ、四度目の再会を喜び合いました。その後、自らの闘病について、実に淡々と語られました。私は、その重さと、遠まなざしを受け切れませんでした。

山岡様の四冊の作品集を改めて手許に置き、俳句とエッセイを通して、今、山岡様の生き様、お人柄について、思い起こしております。

青嵐よろける母を支へけり 英明
 終活を家族と語り温め酒 同
 阿波踊みな構へゐて合図待つ 同

主宰の句評と合わせ、あらためて拝見（「少年」誌より）

種茄子のはち切れさうに老いにけり 英明

枇杷の花便りなき子を案じゐる 同

梅雨茸や雑兵のごと倒れゐる 同

山岡様、主宰への思いをつづること叶わず、ペンを擱いた後に、過ったこととは何だったのでしょうか。

願わくば、その後の俳人に活写されたであろう自らの帰天する魂について、親しく教えていただきたい、そう願っております。

流星を遮る物のなかりけり 英明

慎んで御冥福をお祈りいたします。

清覚院秋穂英照居士 星凍つる 敬介合掌

* 宮崎敬介（京都市）

山岡さんのご逝去の報に言葉もありません。お元気でいられた頃の、そして、浅草でのお姿が思い出され、胸が痛みます。

* 津田緋紗子（諫早市）

昨年は、先生にお会い出来る機会を得まして嬉し
ゆうございました。

私は、この六日、七日、八日に、息子夫婦、孫三
人の六人で、横浜、東京都内、デイズニderland、
デズニイシイなどを、車で旅して参りました。歩き
通しの丸三日間でしたが、健康だからこそと喜んで
おります。

一月五日着で「少年」一月号（通巻一二五号）が
届き、旅から帰り、読ませていただいております。
お顔は存じ上げませんが、「英明さんのフォトア
ルバム」として、毎号読ませていただいております。
山岡英明様の御逝去も記されておりました。
山岡英明様のご冥福をお祈りしております。

合掌

五十嵐千恵子（南砺市）

*

眸子先生を紹介、舌足らずでした。

昨年の眸子先生歓迎句会の冒頭、先生をご紹介し
た時の舌足らずで恥。次の言葉で。

◎甘藻 浅海の海底に肉質の藻場を育成して漁場の
資源となるそんな事業に参画。富山湾岸でも高校生
らが事業の手伝いをした話。

◎私の若い頃からの句友に、杉浦東雲さんがいた。
昭和五十九年に、牧羊社から処女句集シリーズで五
十六名の作家が並んでいる。

東雲さんから句集「風花」をいただいた。「落」
の夏行大会で偶然にも、眸子先生と同室がご縁で、
即座に「少年」の弟子となる。

東雲さんの話が出て、句集シリーズの中に眸子先
生の御名を聞き、早も「風の扉」を送ってもらった。
発行は弱冠三十歳の快挙だった。そのあと、蝸牛社
発行の「影」をお送りいただいた。出版当時は三十
八歳で、秀句三五〇選が並ぶ。

古い俳人の句をも百五十字分で解説されている。
鳥獸・魚介・樹木・草花。自然・風物・人間・人生
のそれぞれの「影」「景」について、先生は、どれ
だけの書物を繙かれたらこんな一冊に纏められたの
か、想像するだけでも気が遠くなる。

こんな物凄い先生に、私は師事しているのだ。自
信を持って語られる先生は、他におられるだろうか
と、あの句会でご紹介すべきだったことが、悔やま
れた。今、誌面を借りてお詫びする老人である。

* 梅島くにを（南砺市）

「少年」一月号、うれしく拝受致しました。
「言葉の力」を何度も拝見致しております。

「句作のポインント」

一、意味から開放されること。

二、言葉に忠実であること。

三、言葉の力を信じることに、そのための努力。

実践は、なかなか難しいと思いつつ、羅針盤と思
い定め、方位を間違わないようにしたいと思います。

* 宮崎敬介（京都市）

長崎は、正月三ケ日は好天に恵まれ、穏やかな日
和でした。が、十一日から、この冬一番の寒波に見
舞われ、窓のカーテンを開けると一面の銀世界にび
つくり。なんと積雪七センチ。

坂の町故、バスタップ。一部休校も報ぜられる
等、冬籠りの三日間でした。

「春よ来い！ 早く来い！」の心境です。

* 永福倫子（長崎市）

（一信）

寒の中にもかすかではありますが、春への胎動が
感じられる日々、季節の訪れの早さに驚いています。

（略）

俳人協会大分県支部より会報原稿の依頼があり、
お受けすることにしました。題は「わたしの歩んだ
道」。眸子様と歩んで来た日々を振り返り、そこで
学ばせていただいたことを書き残しておきたいと思
っています。

一月三十日は大分句会。眸子様のお姿を思い浮か
べながら、頑張りたいと思っています。五年後の大
分大会の為に、会を守っていかねば…と思ってい
ます。

（二信）

目が二羽、バラの枝を揺らしています。雪がち
らつくなか、鳥たちは元気。春の気配の近いことを
感じている午後です。

（略）

五年後、大分で二十五周年記念の祝賀会ができる
よう、頑張ってみようと思います。

若い方々にそれとなく伝えると、「これからの句
会には出来るだけ参加します」との嬉しい声が返っ
てきました。また、「もっと魅力ある会」にはどう
したらよいかについて、牧さんとも相談しました。
手始めに、主宰の「つれづれ百話」を読むことから

始めようかとか、質問コーナーを設けてみたら…とか、色々アイデアが出てきました。

皆さんが、大分句会に関心をもって下さることを願うとともに、皆さんの力でこの会を盛り上げていきたいとも考えていますので、牧さんの「時間の有効な使い方」のささやきは、私にとっても嬉しい出来事でした。

小野京子（大分市）

*

「足で想い、手で考える」私にとって俳句と向き合うのは、私の健康の原点だと気が付きました。歩くことよって「出合う」「出会う」こと。「種が見つかると」ことが楽しいと思うようになりました。次はどう磨くかが課題だなと感じています。

七十代は《自由な時間を楽しみ過ごす》をモットーに自分の歩を大切にしたいです。
可能な限り、少年句会や俳句授業に出かけられるよう健康に留意したいです。

利光幸子（大分市）

*

巻頭名句鑑賞の句は、何年か前の俳句カレンダーに載っていましたね。私の好きな句です。他人の句

や、自分の句でさえ、覚えられない私ですが、この句だけは忘れません。ふにやふにやの赤ちゃんが見える様です。

神永洋子（東京都）

*

今年も十五日が経ちました。

子どもの頃の様なきめきはないにしても、お正月はやはり心改まるものでございます。

昨年はいろいろとお世話になりました。浅草での楽しい二日間のこと、思い出しては温かい心になっております。

先ず、健康で、この一年を過ごさねばと、一日一日を大切にしたいと思っております。

初風呂や花束のごと吾子を抱き 眸子

二、三年前の俳人協会のカレンダーの一月の頁で拝見した時、すてきな句だなと、書き留めておりました。

もう一度、出会えましたこと、とても嬉しく、大切にさせていただきます。

俳句を始めた頃、先生から、人の句をよく読んで、一日十句書くようにと教えていただき、好きな句、有名な句、いろいろと書いて参りました。一時は、

俳句の林に迷い込んだようで、あまりにもたくさんの人々がたくさんの句を作り、それが皆一句一句違う事に圧倒されてしまい、どうしたらよいのか分からなくなった事もありました。

進歩の跡はあまりありませんが、二ヶ月に一度の原稿をどうにか書いております。先生の御指導のおかげと感謝致しております。

三月一日の福岡句会、楽しみに致しております。お元気で御来福下さいませ。

* 川西ふさえ（福岡市）

先日、お電話頂きました三月一日の福岡句会開催の件、大変嬉しく、福岡の皆様楽しみにお待ちしております。つておられます。

句会の会場は、いつもの所で福ビル地下「海幸」で、夕方の五時からということと案内しております。今回のお題は「風」。川西さんから頂きました。お目にかかり、親しく句座を囲める日を楽しみにしています。

* 落合青花（太宰府市）

※五月号の投稿の締切は、三月二十日です。

パートV・七号

（平成三十年五月号）

七句投句・内、

左記兼題から三句

【兼題】

○残雪

○春の星

○春泥

○地図

○指輪

パートV・八号

（平成三十年七月号）

七句投句・内、

左記兼題から三句

【兼題】

○実梅

○昼顔

○百日紅

○花瓶

○地下鉄

パートV・九号

（平成三十年九月号）

七句投句・内、

左記兼題から三句

【兼題】

○西瓜

○草の花

○撫子

○信号

○棚

パートV・十号

（平成三十年十一月号）

七句投句・内、

左記兼題から三句

【兼題】

○鶏頭

○葡萄

○竜胆

○街灯

○電報

書籍のご案内

眸子の句集・評論集のご案内をします。
ご購入ご希望の方は、眸子宛にお申し込み下さい。

処女句集『風の扉』

稲田眸子

爽やかさと自由さは風の特権である。そしてまたその爽やかさと自由さは若い眸子さんの特権でもあった。眸子さんは俳句においてその特権を十二分に發揮したのである。(倉田絨文先生の序文より抜粋)

石かかへ天道虫の動かざる

炎天や別れてすぐに人恋ふる

秋風の誰か来そうな扉かな

・発行所：牧羊社（一九八四年刊）
・定価：一〇〇〇円（送料無料）

第二句集『絆』

稲田眸子

俳句の未来

百花繚乱、伝統と不易、そして流行が生み出す広く豊穡な現代俳句の次代を担うべき俊英作家の精選新句集叢書。

(花神俊英叢書4・帯文より抜粋)

初風呂や花束のごと吾子を抱き

少年の目も蜻蛉の目も動く

肩車して春月に歩み寄る
風の吹く方に落葉も人々も

・発行所：花神社（一九九二年刊）
・定価：二二〇〇円（送料無料）

『眸子の俳話断章』『つれづれ百話』稲田眸子

「俳話断章」の中から百話を自選し、本著を出版することにした。取り纏めるにあたり、三つ工夫した。

その一は、小見出しをつけること。キーワード的な小見出しによって俳話のイメージが瞬時に掴めるよう心掛けた。

その二は、テーマ毎に完結した内容とすること。

通して読んでも、興味深い箇所から読んでも興味がわくよう、テーマごとに完結した内容になるよう心掛けた。

その三は、掲載する順番。まず、心のあり方に関する俳話を掲載、その後、態度に関する俳話、そして、技術に関する俳話とした。その順番は大きな意があると考えている。熟読すればその意図を理解して頂けるはず。

・発行所：少年俳句会（二〇一七年刊）
・定価：一〇〇〇円（送料無料）

俳句雑誌 少年 隔月刊発行 renewal 2014.09

少年俳句会へようこそ！
俳句雑誌『少年』は、俳句とエッセイを愛する仲間たちの交流の広場です。二種互換ですが、

創刊の経

主催者プロフィール

少年（のワンダー）

入会案内

少年読書・お知らせ

交流広場

三陸市俳句連盟

常葉俳句塾

小俳句スクール

あらくろ塾会

ジツク生一覧

連絡紙・作家

ホームページ

少年俳句会

Copyright (c) 1999 Shonen Haikai All Rights Reserved

最新情報

2014年9月号

2014年10月号

2014年11月号

2014年12月号

2015年1月号

2015年2月号

2015年3月号

2015年4月号

2015年5月号

2015年6月号

2015年7月号

2015年8月号

2015年9月号

2015年10月号

2015年11月号

2015年12月号

2016年1月号

2016年2月号

2016年3月号

2016年4月号

2016年5月号

2016年6月号

2016年7月号

2016年8月号

2016年9月号

2016年10月号

2016年11月号

2016年12月号

2017年1月号

2017年2月号

2017年3月号

2017年4月号

2017年5月号

2017年6月号

2017年7月号

2017年8月号

2017年9月号

2017年10月号

2017年11月号

2017年12月号

2018年1月号

2018年2月号

2018年3月号

2018年4月号

2018年5月号

2018年6月号

2018年7月号

2018年8月号

2018年9月号

2018年10月号

2018年11月号

2018年12月号

2019年1月号

2019年2月号

2019年3月号

2019年4月号

2019年5月号

2019年6月号

2019年7月号

2019年8月号

2019年9月号

2019年10月号

2019年11月号

2019年12月号

2020年1月号

2020年2月号

2020年3月号

2020年4月号

2020年5月号

2020年6月号

2020年7月号

2020年8月号

2020年9月号

2020年10月号

2020年11月号

2020年12月号

2021年1月号

2021年2月号

2021年3月号

2021年4月号

2021年5月号

2021年6月号

2021年7月号

2021年8月号

2021年9月号

2021年10月号

2021年11月号

2021年12月号

2022年1月号

2022年2月号

2022年3月号

2022年4月号

2022年5月号

2022年6月号

2022年7月号

2022年8月号

2022年9月号

2022年10月号

2022年11月号

2022年12月号

2023年1月号

2023年2月号

2023年3月号

2023年4月号

2023年5月号

2023年6月号

2023年7月号

2023年8月号

2023年9月号

2023年10月号

2023年11月号

2023年12月号

2024年1月号

2024年2月号

2024年3月号

2024年4月号

2024年5月号

2024年6月号

2024年7月号

2024年8月号

2024年9月号

2024年10月号

2024年11月号

2024年12月号

2025年1月号

2025年2月号

2025年3月号

2025年4月号

2025年5月号

2025年6月号

2025年7月号

2025年8月号

2025年9月号

2025年10月号

2025年11月号

2025年12月号

2026年1月号

2026年2月号

2026年3月号

2026年4月号

2026年5月号

2026年6月号

2026年7月号

2026年8月号

2026年9月号

2026年10月号

2026年11月号

2026年12月号

2027年1月号

2027年2月号

2027年3月号

2027年4月号

2027年5月号

2027年6月号

2027年7月号

2027年8月号

2027年9月号

2027年10月号

2027年11月号

2027年12月号

2028年1月号

2028年2月号

2028年3月号

2028年4月号

2028年5月号

2028年6月号

2028年7月号

2028年8月号

2028年9月号

2028年10月号

2028年11月号

2028年12月号

2029年1月号

2029年2月号

2029年3月号

2029年4月号

2029年5月号

2029年6月号

2029年7月号

2029年8月号

2029年9月号

2029年10月号

2029年11月号

2029年12月号

2030年1月号

2030年2月号

2030年3月号

2030年4月号

2030年5月号

2030年6月号

2030年7月号

2030年8月号

2030年9月号

2030年10月号

2030年11月号

2030年12月号

少年俳句会のホームページには、誌友の皆様の作品が丸ごと入っています。アドレスは下記のようにです。

<http://shonen2106.mond.jp/>

インターネットのyahoo! Japanなどで検索する際、「少年俳句会」と入力すると、トップページに出てきます。

*右欄の「新着情報」をクリックすると、楽しい情報満載。たとえば、ジュニア俳句スクールの記事は下記のようにです。



NHKテキスト 月刊20日発売 ◆定価648円(税込)

NHK俳句

3月号

放送ⅡEテレ⑨午前6:35⑦7:00/再放送⑨午後3:00⑦3:25

今井聖

＊名句検証
飯田龍太 少女冷ゆ

風

高柳克弘

＊挑戦する俳句
問いかけ、みずからへ

蝶

夏井いつき

＊音で楽しむ季節
生き生きと、俗を詠む

猫の恋

権未知子

＊俳句・最強超短コース
自選こそすべて

雉市

○旅を詠む 宮崎 布瀬伊夜子

○宇多喜代子のくらしの籠

○俳人発 俳人著 日本画巻×福田由美

○アンソロジー「声」 西村和子

○わが師を語る 高野素十 小林俊明

○誌上深淵教室 上田日彦子

○1月の入選・佳作句

○旧かな入門12の練習帖 山西雅子

3月のテーマ

名句の名句たる所以が見えてくる!

作句力をアップ 名句徹底鑑賞ドリル

高柳克弘

○定価1,512円(税込)

NHK出版

NHK出版
お客様注文センター

TEL 0570-000-321

午前9:30～午後5:30(年末年始を除く)

NHKテキスト電子版も発売。

http://nhktext.jp

特別対談 長谷川 權×坂井修一

どこへ行く俳句と短歌——大衆性の
さき

巻頭作品10句

相子智恵・大牧 広・鈴木章和・すぎ巴里

津川絵理子・能村研三・満田春日・矢島渚男

俳壇

3月号

2月14日発売
定価800円(税込)

巻頭エッセイ
太田土男

八木健彦 滑稽俳壇

四季巡詠33句……大輪靖宏・山田佳乃

インタビュー—私のメイン・テーマ 池田澄子

ゆうゆう書簡……正木ゆう子×小島ゆかり

日本の樹木12選……広渡敬雄

俳句論のゆくえ……坂口昌弘

子規・仰臥六尺……復本一郎

人生に効く、俳句……小島 健

俳壇時評……栗林 浩/俳壇月評……杉山久子

俳句と随想12か月

遠藤若狭男・笹瀬節子

本阿弥書店

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

毎月25日発売
定価1200円(税込)

俳句界

2018年3月号

特集

高齢者だから 詠める俳句

巻頭エッセイ 有馬朗人

●高齢者の名句鑑賞 坂口昌弘

●90歳以上の俳人題詠

後藤比奈夫 深見けん一 金子兜太

伊丹三樹彦 花谷和子 大坪景章

有山八洲彦 ほか

特別作品50句 中岡毅雄

2017の俳句界NOW 山元志津香

21句 谷口慎也 尾村勝彦 高橋正子

人口減少と結社の閉鎖

●高齢化と会員の減少について 酒井佐忠

●結社主宰後継者不足を考える 大井恒行

【特別インタビュー】瀬戸内寂聴「俳句を楽しむ」

本セクション結社「野火」 菅野孝夫

私の一期 森 潮

対談 佐高信の甘くてコンニチハ！

田鎖麻衣子 (弁護士)

別冊 投稿俳句界 一流選者28名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文學の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

被災地の今

渡辺誠一郎／柏原眠雨

照井翠／白濱一羊／永瀬十悟

駒木根淳子／岩岡中正

福田若之『自生地』鑑賞

青木亮人／池田澄子

加藤治郎／トオイダイスケ

◆その時 俳句手帳 ◆俳句と短歌の10作競詠

山下知津子

黒岩徳将

◆今月の華 ◆好評連載

大木あまり

吉田隼人

◆巻頭三句 ◆筑紫磐井

茨木和生

野村直子

伊藤政美

Café Lyricism
筑紫磐井

西村和子

伊藤政美

三木星童

中田水光

辻恵美子

酒井佐忠

本窓辺

間村俊一

の装幀交友録

二ノ宮一雄

一望百里



Haiku Shiki

2018年3月号

2月20日発売
定価930円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

俳句

3月号
予告

2月24日発売
予価(本体852円+税)

特別作品—高橋睦郎・今瀬剛一・權未知子

春の季語入門

大特集

- ▼総論 季語の本意〔春編〕……藤本美和子
- ▼雑賞 本意がある春の季語……鳥居真里子
- 花谷清・藤田直子・谷口智行・山尾玉藻
- ▼類似季語の使い分け

新版歳時記刊行記念 〈季語の疑問徹底解明！〉

座談会

第91回 声のライブラリー

俳句という詩型の可能性

高橋睦郎 × 伊藤比呂美 × 恩田侑布子

アンケート企画

本屋で役立つ 俳書ガイド

好評連載

井上弘美の名句発掘 / 俳句旅枕 : 渡辺誠一郎
現代俳句時評 : 阪西敦子

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<http://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <https://www.kadokawa.co.jp/>

俳句年鑑 2018 年版

角川「俳句」別冊(分下カラムマツ) 好評発売中 定価2900円(税込)

口絵 ● 二〇一七年一〇〇句選 : 恩田侑布子 選
写真でたどる 二〇一七年の俳壇

【巻頭提言】昭和も遠く…… 西村和子

年代別 二〇一七年の収穫

諸家自選五句…… 約六五六名！

今年の句集BEST 15 四協会の一年
今年の評論BEST 7 各俳句賞のひとりとほか

合評鼎談

総集編

片山由美子 ●
野口る理 曾根毅 橋本直
生駒大祐 池田瑠那 松本てふこ

●全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き！

●全国俳人住所録 約三〇〇名を一挙掲載！

KADOKAWA

発行:角川文化振興財団 発売:株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ先(注文) TEL.049-259-1100(読者係)

2016.10・2017.9

[執筆住所]

◇巻頭作家招待席／小野京子

〒870-0873 大分市高尾台2丁目8番4号

TEL : 097-544-3848

◇秀句ギャラリー鑑賞／中田麻沙子

〒270-0111 流山市江戸川台東4-416-18

TEL : 04-7155-2582 e-mail : nakata-liburu@jcom.zaq.ne.jp

◇虚子嫌いが読む虚子の歳時記／後藤 章

〒331-0044 大宮市日進3丁目34-1 ハウス大宮日進101

TEL : 0975-68-6566 e-mail : goto.drigo@nifty.com

◇我が青春の銀幕たち／溝口 直

〒870-0952 大分市下郡北3-24-2

TEL : 0975-69-5074 e-mail : sunaomi@fat.coara.or.jp

◇続・京子の愛唱百句「癒し」／小野京子

〒870-0873 大分市高尾台2丁目8番4号

TEL : 097-544-3848

◇代士子の万華鏡／篠崎代士子

〒870-0046 大分市荷揚町6-16 スカイメゾン外苑702

貞閑千寿子様方

TEL : 097-537-3339 携帯 : 080-1774-0015

◇吉永さんのお天気雑学／吉永泰祐

〒270-0176 流山市加6-1318

TEL : 04-7158-1077 e-mail : y_yoshinaga@cdit.or.jp

◇自叙伝「私は軍国少女」／中嶋美知子

〒870-0864 大分市国分1975-18

TEL : 097-549-3715

◇くにをの絵手紙紀行／梅島くにを

〒939-1552 富山県南砺市柴田屋114-1

TEL : 0763-22-2764 e-mail : u-218k@p1.tst.ne.jp

◇輝二の徒然読書ノート／荒木輝二

〒341-0036 三郷市東町370-1-604

TEL : 048-956-5637 e-mail : a449ari@earth.ocn.ne.jp

◇編集ノート◇稲田眸子

◆「少年」の志に共感し、平林益雄様のご入会。平林様は越谷市のゆりのき荘で企画された講座「俳句に親しもう」の受講生。熱心に学ばれるその姿に感じ入ったものです。「三郷俳句塾」「少年」へのご入会をお勧めしたところ快諾なさりご入会。絵手紙をはじめ、多彩な才能をお持ちのようです。歓迎致します。◆本号は、二つの特集を組ませて頂きました。一つ目は、坂井溢郎様による「干支からみた平成三十年」。全日本漁港建設協会では毎年仕事始め式が開催されます。その際、坂井名誉会長のお話は毎回含蓄のあるもの。「干支のなぜ」未来へのアプローチ「リーダーの干支考」等干支に関する深い見識をお持ちの坂井様ならはご講話を今年もお聞きすることができました。◆二つ目は、小中学生俳句コンクール。九年前にボランティア活動の一つとして「ジュニア俳句スクール」を開校しました。

今年のコンクールにおいても、スクールで学んだ子供達の入賞がありました。小学生高学年の部で、小田陽介君が埼玉県議会議長賞を、低学年の部では坂井愛桃ちゃんが埼玉県俳句連盟会長賞を受賞。「コンクールで上位入賞するかどうかだけではない、日本の四季を詠み込む俳句づくりで身近な自然に触れながら、それらを大切に作る人間に育って欲しい」と申し上げていますが、入賞はうれしいもの。◆「秀句ギャラリー鑑賞」の執筆が、勝浦敏幸様から中田麻沙子様にバトンタッチ。勝浦様には独自の視点から軽妙なタッチの鑑賞文をお書き頂きました。感謝。中田様のお父様は千代田葛彦様。先師・高野素十と親交の深かった水原秋桜子の高弟のお一人。不思議なご縁に感謝。◆大病を患いながらも、感力を振り絞り懸命にリハビリに励んでおられる仲間がおられます。書くことよって自分を鼓舞し続けておられます。その姿勢に頭が下がります。切にご自愛を。

少年 会規

秀句ギャラリー：稲田眸子選
俳句紀行燦々 ……自選

(但し、主宰のアドバイスあり)

用紙：添付用紙&ワープロ可

次号締切：三月二十日(パートV・七号分)

投稿会員：一年間一万円(前納)

購読会員：一年間六千円(前納)

少年パートV・六号(通巻二二六号)

平成三十年二月二十五日 印刷

平成三十年三月 二日 発行

編集発行人 稲田眸子

発行所 少年俳句会

〒三四一〇〇一八

三郷市早稲田七二七―三二二〇一

郵便振替 名称(少年)

番号(00150191730055)

TEL 090・三九六一・六五五八

FAX 0489・五九一・五七六五

mail:boshi@peach.ocn.ne.jp

http://shonen2106.nond.jp/

※「少年俳句会」で検索してください。

印刷所 キュービシステム株式会社

〒一〇一〇〇四一

東京都千代田区神田須田町一十一―二一六

マルコビル4F